氷の涯　夢野久作　附やぶちゃん注

［やぶちゃん注：本作は昭和八（一九三三）年二月刊の『新青年』に発表された。底本は昭和八（一九三三）年五月十九日春陽堂刊日本小説文庫の単行本「氷の涯」（正字正仮名）を国立国会図書館近代デジタルライブラリーの画像で視認した。但し、底本は総ルビで五月蠅いから、私が難読或いは読みが振れそう或いは必要と判断したもののみのパラルビとした（一部を除いて、最初に附したものを原則、繰り返すことはしていないが、一部固有名詞などはルビ一括変換機能を用いたため、ブログ版とは附け方が変わっている）。踊り字「〳〵」は正字化した。傍点は太字とした。私が立ち止まった一部の語についてのみ、当該段落の後に簡単な注を附した。逆に言えば、私にとって達意の語については注さないということである。悪しからず（この注もブログ版とは一部、異なる）。歴史的仮名遣の誤りも見られるが、そのままとして注記等は施していない。因みに、私の所持する一九六九年第一書房刊「夢野久作全集」（第三巻所収）の同作と比すると、一部の表記・表現に改稿らしい部分が見られるが、特に大きな箇所を除いては注していない。但し、気になるのは同全集の中島河太郎氏の解題に『単行本所収に際して訂正加筆している』とある点で、この私が底本としている単行本とその全集の表記が異なることから、どうも私の底本としているのは雑誌初出形であると考えてよいようである（そもそも底本は純然たる久作の単行本ではなく、『日本小説文庫』というシリーズ本である）。私は葦書房の西原和海氏の編になる「夢野久作著作集」が全六巻で終わってしまった時、全小説作品をやってくれていたらなぁ、と秘かに残念に思った人間なのである。

なお、底本の挿絵五葉をここと思ったところに配した。挿絵には「*mae*」と思しいサインがあるが、画家は不詳。底本とした国立国会図書館近代デジタルライブラリーでは書誌情報に本書全体が『インターネット公開（保護期間満了）』と示されているので、著作権侵害に

当たらないと判断した。

ＰＤＦ化によって一部の活字が横転しているのはソフトの限界であるので御寛恕願いたい。「廻」は表示されないので新字を用いている。また、ルビ化に際してざっと点検をしたが、逐字的な校正は行っていないので、改訂する可能性が高いため、私の注のリンクはこの注の中を除いて、リンクさせていない（リンクがあるように見えるのはＰＤＦの特徴で実際にはリンクしていないので注意されたい。リンクを作っても、それを再度使用することが私の制限ソフトでは出来ず、一からやり直さねばならないからである。悪しからず）。お手数であるが、リンクについてはブログ版（ブログ・カテゴリ「夢野久作」をここにリンクしておく）でお願いしたい。

なお、本テクストは私のブログ「鬼火～日々の迷走」開設十周年記念テクストとして公開した。私の注については著作権を主張するが、当然のこと乍ら、本文データは私の許諾なしに如何様に加工されても一向に構わない。電子データとは本来、そういう性質のものである。

【二〇一五年七月六日　藪野直史】

氷の涯

この遺書を發表するなら、なるべく大正二十年後にして呉れ給へ。今から滿十個年以上後の事だ。それでも迷惑のかゝる人が居さうだつたら、お願ひだから發表を見合はせて呉れ給へ。

僕は怖いのだ。現在、背負はされて居る罪名の數々が、たまらなく恐ろしいのだ。萬一君が、僕の冤罪を雪ぐべく、この遺書を發表して呉れた場合に、こんなひどい罪に僕を陷れた責任を問はれる人が、一人でも出來てはならないと、それぱかりを氣にかけてゐるのだ。そんな人々を僕が怨んでゐるかのやうに思はれるのが、自分の罪科以上にたまらなく辛いのだ。出來る事なら斯樣な未練がましい手紙なんか書かない方がいい。默つて一切合財の罪を引受けたまゝ死んで行つた方が、却つて氣樂ぢないかとさへ思つてゐる位だ。

だから僕はこの事件に關係してゐる人々の氏名や、官職名、建物、道路等の名稱、地物の沿革、方角などを、事件の本質に影響しない限り、出來るだけ自分の頭で變裝させてゐる。事實の相違や、推移の不自然を笑はれても仕方がない。たゞこの事件を記憶してゐる人々の、さうした記憶を喚び起すだけに止めて居る。さうして僕の此事件に對する責任の程度を明らかにするだけで滿足して居る。……それ程に不愉快な、恐ろしい、驚く可き事件なのだ。

この事件は最早、内地に傳はつて居るかも知れない。又は依然として嚴祕に附せられて居るかも知れない。

僕は現在、自分自身に對してすら辨解の出來ないくらゐ、複雜、深刻を極めた嫌疑を、日本の官憲から受けて居るのだ。捕つたら最後八ツ裂にされるかも知れない恐ろしい嫌疑を……。

僕……陸軍歩兵一等卒、上村作次郎が、哈爾賓駐劄の日本軍司令部に當番卒として勤務中に、司令部附の星黒主計と、十梨通譯と、同市一流の大料理店、兼、待合業「銀月」の女將、富永トミの三人を慘殺して、公金十五萬圓を盜み出した……同時に日本軍の有力な味方であつた白軍の總元締オスロフ・オリドイスキー氏とその一家を中傷、抹殺し、同氏の令嬢ニー

ナを誘拐した上に、銀月を燒き拂つて赤軍に逃げ込んだものに相違ない……だから、それに絡まる賣國、背任、横領、誣告、拐帶、放火、殺人、婦女誘拐、等々々……と言つたやうな想像も及ばない超記録的な罪名の下に、現在、絶體絶命の一點まで追ひ詰められて來て居るのだ。

［やぶちゃん注：●「駐劄」駐箚も同じい。外交官などが任務のために暫くの間、外国に滞在・駐在すること。　●「拐帶」「誘拐」の意もあるが、ここは後に「婦女誘拐」が出るから、今一つの意、預けられた金品を持って行方を眩ます「持ち逃げ」の意。　●「オスロフ・オリドイスキー」実は第一書房版全集第三巻（以下、鍵括弧附きで「全集」と呼称する）の「氷の涯」には本文三ページ目に『主な登場人物』の一覧が表になって載っている（但し、これは夢野本人の手になるものではなく、全集編者によるものである可能性があるので総てを引くことはしない）が、そこには『キタイスカヤの「セントラン」（もと旅館、今は司令部のある建物）の所収主、白露の陰謀政治家』とある。　●「ニーナ」同前の登場人物一覧に『オスロフの養女、十九歳』とある（戦前であるから数え）。］

勿論、そんな戰慄的な大事件が次々に哈爾賓で渦巻き起つたのは事實だ。同時に僕が、そんな事件の中心になつて居る哈爾賓駐劄の日本軍司令部に、當番卒として勤務してゐた事も、たしかな事實に相違ない。

しかし夫れにしても、そんな大事件を捲き起すべく餘りにも無力な僕……むしろ小さな、間接的な存在に過ぎなかつたであらう一兵卒の僕が、どうして其樣な怪事件の大立物と見込まれるに到つたか……白狀する迄もなく、中隊でも一番弱蟲の小心者と言はれてゐた僕が、どうして日本軍、白軍、赤軍の三方から睨み付けられ、警戒され、恐れられて、生命までも脅やかされる立場に陷つて來たのか。さうして其の眞相を發表する機會をトウトウ發見し得ないまゝ、思ひもかけない氷の涯に生涯を葬らなければならなくなつたのか……といふ疑問は、現在でも、多少に拘はらず抱いてゐる人が居るに違ひないと思ふ。たとへば僕の平生

を知つて居る戰友や、直屬の上官なぞ……その疑問を今から解き度いと思つて居るのだ。その變幻不可解な慘劇の大渦卷を作り出した眞相の數重奏を、此の手紙の中に記錄してみたいと考へて居るのだ。

［やぶちゃん注：●「思ひもかけない氷の涯に生涯を葬らなければならなくなつた」殆んどの読者がこれを当初、極東極寒の地の涯に果てて行った主人公の比喩的な表現としか読まないように抑制しているところに、夢野の巧さを味わいたい。驚くべきことに、実に本作本文中では「氷」はたった八回、「涯」に至っては「生涯」が二度あるのを除くと「涯」はここ一箇所でしか使われていないのである。●「直屬の上官なぞ……その疑問を今から」第一書房版ではここが（恣意的に正字化した）、『直屬の上官なぞ……そんな人々のそうした疑問を今から』となっている。明らかに分かり易く書き加えていることが分かる。］

決して口惜しいから書くのぢやない。かうして正義を主張するのでもない。僕は、さうした事件の全部に對して、云ふに云はれぬ良心的の責任を負うて居るのだから……。此の事件の素晴らしい旋回力に抵抗し得なかつた僕自身の無力を、中心から恥ぢ悲しんで居るのだから……。

［やぶちゃん注：●「中心」衷心。］

さもなくとも戰時弊態の大渦紋の中では種々な間違ひが起り易いものだ。しかも、それは、いつでも例外なしに深刻を極めた、恐怖的な悲劇であると同時に、世にも馬鹿々々しい喜劇に外ならないのだ。さうして次から次に忘れられて、闇から闇へと葬られて行き易いのだから……。

のみならず僕は、君も知つて居る通りの文學青年だ。今でもチツトモ變つてゐない。……あやまつて美術學校に這入つて、過つて戀をして、過つて退校されるとソレツキリの人間になつてしまつた。スツカリ世の中がイヤになつた揚句、活動のピアノ彈きからペンキ職工にまで轉落してゐるうちに兵隊に取られた。それから上等兵候補になつて、肋膜で落第する

と間もなく出征して、現在、哈爾賓駐劄の〇〇〇團司令部に所屬してゐる意久地の無い一等卒だ。たゞそれだけの人間だ。惜しがる程の一生ぢやない。恥かしがる程の名前でもない。親も兄弟も無いんだからね。

［やぶちゃん注：●「美術學校」このルビはロシア語なんどと勘違いしそうだが、調べて見ると「チャカホイ」というのは囃し文句で、『何だ此の野郎柳の毛虫、払ひ落せば又あがるチャカホイ』（一番歌）で始まる東京芸術大学美術学部の前身である東京美術学校の校歌「チャカホイ節」のことと判明した。デカンショ節と同じく学生歌かと思われるが、「全國大學專門學校高等學校校歌集」（昭和三（一九二八）年郁文堂書店刊か？）の九十一番目に載るということ（上記歌詞ともに個人ブログ「愛唱会きらくジャーナル」の「東京美術学校校歌～チャカホイ節～東京音楽学校？」記事に拠る）、歌詞が卑猥ということから戦争中に禁止されてしまったということ（pincopallino2 氏のブログ「パスクィーノ～ローマの落首板」の「東京外語の歌」の記事の末尾に美術学校の歌として拠る）が載るので「校歌」なのであろう。］

但……タツタ一人君だけは僕を惜しがつて呉れやしないかと思つて居る。僕を何かの藝術家にすべく彼れだけの鞭撻を惜しまなかつた君だからね。

しかし僕は君の鞭撻に價しない人間だつた。僕は一種の詐欺師だつた。默々としてコンナ運命に盲從しつゝ落込んで行つた……。

だからたゞ君に對してだけは何となく心掛りがしてゐる。此儘默つて死んで行つては濟まない様な氣がするから此手紙を書くのだ。

此手紙を僕は、この浦鹽に居る密輸入常習の支那人崔に託する。崔は來年氷が溶けてからこの手紙を一番信用のある戎克に託して上海で投函させる約束をして呉れた。だから此手紙が君の手に屆くのは多分夏頃になるだらう。

［やぶちゃん注：●「支那人」第一書房版全集は「中国人」となっている。言わずもがな乍

ら、これは私は夢野の改訂ではないと思う。全集の解題その他には編者による差別語変更注記は、ない。こういう所も第一書房版の胡散臭いところなのである。なお、本作にはこれ以外にも「毛唐」その他多くの差別用語が散見されるので、批判的視点を忘れずにお読み戴きたい。」

迷惑だらうが讀んでくれ給へ。あとは紙屑籠に投げ込んでもいゝ。それでも僕は報いられ過ぎるだらう。

［やぶちゃん注：●以下、一行空き。］

日本は現在（大正九年）歐州大戰の影響を受けて西比利亞（シベリア）に出兵してゐる。同時に北滿（ほくまん）守備といふ名目で〇個〇團の軍隊が哈爾賓（ハルピン）に駐劄（ちゅうさつ）してゐる。その中で歩兵第〇〇〇聯隊第二中隊に屬する上等兵一名を入れた七名の兵卒が、キタイスカヤに在る〇〇司令部に當番卒として、去年（大正八年）の八月に派遣された。その中に僕は居たのだ。

［やぶちゃん注：●「シベリア出兵」以下、非常に長くなるが、ウィキの「シベリア出兵」から引く。当時の派兵兵士の現状を知ることが、本作のロケーションを極めて鮮やかに描き出して呉れるからである。ともかくも騙されたと思ってお読みあれ（アラビア数字を漢数字にし、記号の一部を省略変更、段落は省略した）。一九一八（大正七）年から一九二二（大正十一）年までの間に、『連合国（大日本帝国・イギリス帝国・アメリカ合衆国・フランス・イタリアなど）が「革命軍によって囚われたチェコ軍団を救出する」という大義名分でシベリアに出兵した、ロシア革命に対する干渉戦争の一つ』。『日本は兵力七万三千人（総数）、四億三千八百五十九万円から約九億円（当時）という巨額の戦費を投入。三千三百三十三人から五千人の死者を出し』て撤退した（兵力投入はアメリカ約八千人、イギリス千五百人、イタリア千四百人と比すれば差は歴然）。『ソビエト・ロシア側の兵力・死者・損害は現在まで不明』であるが、尼港事件（ニコラエフスクで発生した赤軍パルチザンによる大規模な住

民虐殺事件。パルチザン部隊四千三百名が占領、ニコラエフスク住民に対する略奪・処刑を行うとともに日本軍守備隊に武器引渡を要求、これに対して決起した日本軍守備隊を中国海軍と共同で殲滅すると、老若男女の別なく数千人の市民を虐殺した。殺された住人は総人口のおよそ半分の六千名を超えるともいわれ、日本人居留民・日本領事一家・駐留日本軍守備隊を含んでいたため、国際的批判を浴びた。ここはウィキの「尼港事件」に拠った）前後には『五千名以上が殺害されたとされ』、『また別資料では、死傷者八万人、六億ルーブル以上の被害とされる』とある。その後、一九二一（大正十）年『のワシントン会議開催時点で出兵を続けていたのは日本だけであった。会議のなかで、全権であった加藤友三郎海軍大臣が、条件が整い次第、日本も撤兵することを約束した。こののち内閣総理大臣となった加藤は一九二二年六月二十三日の閣議で、この年の十月末日までの沿海州からの撤兵方針を決定し、翌日、日本政府声明として発表。撤兵は予定通り進められた』とある。さて、問題はその現地での実情である。『日本軍は出兵当初から「露国領土の保全」と「内政不干渉」を謳った「一九一八年八月二日布告」の普及に努めたが、ロシア人住民の対日感情が芳しくないことを熟知すると、日本国内の宗教団体を利用する方式を採用し、日本正教会と西本願寺に白羽の矢が立った。前者からは、三井道朗、森田亮、瀬沼烙三郎、石川喜三郎、計四名の神父、後者からはウラジヴォストークの西本願寺布教場の大田覚眠師が工作員に指名された。彼らの活動内容を伝える資料としては、外務次官・幣原喜重郎から陸軍次官・山田隆一に宛てた通牒（一九一八年八月二十二日付）などがある。そこには「表面全然政府ト関係ナキ体裁」をとることなど、工作を実施する上での規定が詳細に記されている。日本軍特務機関および総領事と緊密な関係を保ちつつ、森田と瀬沼はウラジヴォストーク方面を中心に活動し、三井と石川は北満州・ザバイカル州方面、さらにはチタからイルクールクまで足を伸ばした。後者は遊説の傍らハルビンで購入した食料品や日用品の廉売に従事したとされる。西本願寺の大田もウラジヴォストークで宣撫活動に従事。しかし一九一九年頃まで続いた活動の成果

は芳しくなかったとされる』。以下、「現地における日本軍将兵の実態」の項より。『一般兵士の間では戦争目的が曖昧だったことから、日本軍の士気は低調で、軍紀も頽廃していた。この現象は鉄道で戦地へ移動する段階から既に見られた』（以下、引用。引用文は恣意的に正字化し、一部を歴史的仮名遣に訂した）。『一般ニ士氣發揚シアラサルカ如シ 即チ戰爭ノ目的ヲ了解シアラサルノミナラス官費滿州旅行位ノ心得ニテ出征シアルモノ大部ヲ占ムルノ有様ナリ』（朝鮮軍司令官兵站業務実施報告）『また、チェコ軍救済と称してウスリー鉄道沿いにシマノフカまで前進した日本軍先陣部隊が、その先には「ロシア人しかいないと言はれて引き返し」、その後再び前線に送り出されるという「滑稽な一幕」もあったという。士官・幹部も同様で、ウラジヴォストークの某参謀将校が毎日「裸踊り」の観覧にうつつを抜かしていたことについての報告が残っている。戦線が泥沼化した一九二〇』（大正九年。なお、以下の引用文も恣意的に正字化した）『年の段階でも同地の派遣軍首脳部は「三井、三菱に出入りして、玉突きや碁將棋に日を消し」ており、少壮将校は「酒樓に遊蕩」していたとされる。このような状況を、匿名の投書で告発する兵士も出現した。黒竜会の機関紙『亜細亜時論』へ投書された告発書は、その内容ゆえに公表が一時憚られたが、「改革カ亡國カ 隊改良ニ關スル絶叫書」（以下「絶叫書」と略記）なるタイトルが付され「極祕トシテ當路扱ヒ少數識者ノ間ニ頒ツ」（同序文）こととされた（外務省記録、「出兵及撤兵」）。同「絶叫書」の内容は全八節からなる長大なものだった。以下内容の一部を紹介する。「軍紀頽廢ノ實例」の節は、さらに「（イ）敬禮ヲ避ケル」「（ロ）社會主義ノ氣分漲ル」「（ハ）殆ド盜ヲナサザルモノナシ」「（ニ）計手ハ皆泥棒」「（ホ）歩哨ノ無價値」の各小節に分かれている。

（ハ）の項では、村の民家から鶩鳥・鶏・豚・牛を盗んでは食べる兵士の不品行を糾弾している。このような事態を派遣軍司令部も把握しており、当時兵士に配布されていた「兵士ノ心得」にも不法行為を禁止する戒めの言葉が記されていたが、全く効果はなかったとされる。ロシア側の資料にも日本軍兵士による不法行為についての報告がある（「日本兵の亡霊 州里

驛より中東鐵道に達せる報告に日本兵は薪及鷄類を窃み又驛員其他の家屋に押入りて婦人を辱めたり」）。また、同「絶叫書」中「最高幹部の非常識」の項では、匿名投書子は大井師団長がブラゴヴェンシチェンスク市へ入ったときにロシア人住民に対して取った「敗戰國ノ住民ニ對スル」ような態度を糾弾している。「（ロ）社會主義ノ氣分漲ル」項目では、敵＝過激派による感化の事実などではなく、無知な青年将校が理屈に合わない無茶なことを命令し、兵士を叱り飛ばす。これに少しでも不満を漏らそうものなら、すぐ「社會主義」だと決めつけ、のけものにするとし、指揮官の兵隊に対する非人間的な扱いと、それに起因する不満の鬱積を指摘している。治安当局は「過激派」による「危險思想」の伝播にも神経を尖らせており、帰還兵士の言動にも厳重な監視の目を光らせた（軍も独自に調査を行ったとされる）が、治安当局が作成した内偵資料「祕　歸還兵ノ言動」では、「危險思想」浸潤の事実よりも、将校・下士官の横暴な振る舞いを指摘する内容が圧倒的多数を占めたとされる。また一方で、将校は「戰地」では「常ニ部下ノ機嫌ヲ取ツテ居ル」という声も相当数見られる。同資料によれば、戦地では将校は「歩兵隊式」と呼ばれた結党を伴う仕返し、集団的実力行使を恐れたからだとされる。たとえば、歩兵第七十二連隊の某帰還兵士の証言によれば、第二中隊では「中隊長ハ下士以下ニ對シテ壓制ナリ」として「下士以下全員著劍シ中隊事務室ニ押掛ケ」中隊長に詫びを入れさせたとされる。また、第一中隊では平素傲慢な態度をとる特務曹長が、機関銃隊では中隊長が、それぞれ「歩兵隊式」の洗礼をうけ全治一ヶ月の重傷を負った。いずれもウラジヴォストーク滞在中の事件だが、だからその程度で済んだ、と某帰還兵はつけ加える。「戰場ナラ彼等ハ命幾何アツテモ足ラン　彈丸ハ向フヘバカリ飛バンカラ」。戦線が泥沼化した一九二〇年頃には、前線の兵士は一日も早い帰国を望むようになったとされる（「他國の黨派添爭ひに干渉して人命財産を損する、馬鹿馬鹿しき限りなり」）『。

一方、以下は「白色テロへの日本軍の幇助」の項。『ロシア語学者の八杉貞利（当時、東京外国語学校教授）は、一九二〇年七月二十八日、アムール・ウスリー旅行を企てた。同旅行

中の日記はシベリア戦争下の現地状況について記されており、その中には日本軍の白色テロに対する幇助の模様も含まれている』（以下の引用は恣意的に正字化した。一部を歴史的仮名遣に訂した）。『日本下級軍人が、所謂殊勲の恩賞に預からんがために、而して他の實際討伐に從軍せる者を羨みて、敵無き所に事を起こし、無害の良民を慘殺する等の擧に出ること。而して「我部下は事無き故可哀相なり、何かやらせん」と豪語する中隊長あり』。『また、別の駅では以下の話を耳にする』。『目下過激派の俘虜百名あり、漸次に解放したる殘りにて、最も首謀と認めたるものは殺しつつあり、之を「ニコラエフスク行き」と唱えつつありといふ』。更に、『各駅は日本兵によりて守備せらる。（中略）視察に來られる某少佐に對してシマコーフカ驛の一少尉が種々説明しつつありしところを傍聽すれば、目下も列車には常に過激派の密偵あり、列車着すれば第一に降り來たり注意する動作にて直ちに判明する故、常に捕らへて斬首その他の方法にて殺しつつあり、而して死骸は常に機關車内にて火葬す。半殺しにして無理に押し込みたることもあり。或時は両驛間を夜間機關車を幾回となく往復せしめて燒きたることあり。隨分首切りたりなど、大得意に聲高に物語るを聞く。而して報告は、單に抵抗せし故銃殺せりとする也といふ。浦鹽（うらじほ）にて聞きたることの僞ならぬをも確かめ得て、また言の出るところを知らず』とあって、もの凄いの一言に尽きる夢野久作も吃驚の猟奇頽廃何でもアリの地獄であったことが分かるのである。●「〇個〇團」「全集」では『〇個旅團』。●「〇〇司令部」「全集」では『派遣軍司令部』で、前のも含めて、恐らく夢野自身が当局の検閲を意識して、もともと施してあった伏字であったものの、遠慮する必要のないことが分かって戻したものであろう。●「キタイスカヤ」ハルピン（現行の繁体字表記では「哈爾濱」）の中央大通街の旧名。「北海道大学附属図書館」公式サイト内のギャラリーにある「哈爾賓（ハルピン）中央大街舊名キタイスカヤ街」で画像が見られる。」

司令部に宛てられた家はキタイスカヤ大通の東南端に近い、ヤムスカヤ街の角に立つてゐる堂々たる赤煉瓦（あかれんぐわ）四階建の舊式建築で、以前はセントランニヤといふ一流の旅館だつたとい

ふ。在留邦人は略してセントラン、セントランと呼んでゐるさうな。地下室が當番卒や雇人の部屋と倉庫。一階が調理室、食堂、玄關の廣土間等。その上の二階が本部、經理部なぞ云ふ色々な事務室、三階が將校や下士の居室、その上の四階の全部が此家の所有主のオスロフといふ露西亞人と其家族の部屋になつてゐた。

ところで最初から暴露して置くが、此オスロフといふ家主と、其家族は、此事件の隱れた犧牲者だつたのだ。僕の罪名を彌が上にも重くすべく一家揃つて犬死にしたといふ世にも哀れな人間達だつたのだ。だから此處で些しばかり、その家族について印象さして貰ゐ度いのだ。矢張り此事件に大關係のある屋上庭園の光景と一緒に……。

オスロフは黑い鬚を顏一面に生やした六尺五六寸もある巨漢であつた。碧い無表情な眼をキヨイトンと見開いてゐる風付きが、いかにも純粹のスラブらしかつた。いつも茶色がゝつた狩獵服や、青いコール天の旅行服を着込んで、堂々と司令部に出たり這入つたりしてゐた。さうかと思ふとバツタリ姿を見せなかつたりしたので、最初のうちは何處かの御用商人かと思つてゐたが、どうしてどうして極東露西亞に於ける屈指の陰謀政治家といふ事がその内にだんだんと首肯されて來た。

［やぶちゃん注：●「六尺五六寸」百九十七センチメートルから二メートル。　●「コール天」コールテン。縦方向に毛羽のある畝を持った織物であるコーデュロイ（corduroy）のこと。摩擦に強いので洋服地・足袋地等にする。「コーデュロイ」の語源は「王の綱」の意のフランス語である。実際、これは「コール天」とも表記するが、これは「corded（うね織りの）」と「天鵞絨」を合成した語とも、“corded velveteen”（“velveteen”綿製のビロード。べっちん）の略ともいう。］

第一に驚かされたのは彼の居室になつてゐる四階の立派さであつた。多分、以前に一等の客室か貴賓室に宛てゝゐたものであつたらう。大理石とマホガニーずくめの荘重典麗を極めたもので、閉め切つてある大舞踏主なぞを隙見してみると、露西亞一流の、眞紅と黃金ずく

めの眼も眩むやうな裝飾であつた。

哈爾賓市中の商人といふ商人は皆、彼にお辭儀をしてゐた。中には、わざわざ店を飛び出して通りがゝりの彼と握手しに來る者もゐた。この邊一流の無賴漢や、馬賊の頭目と呼ばれてゐる連中なぞも裏階段からコソコソ出入りしてゐた一方に、彼が銀月といふ料理屋で開く招宴には、日本軍の〇〇團長〇〇中將閣下も出席しなければならなかつたらしい。

［やぶちゃん注：●「日本軍の〇〇團長〇〇中將閣下」「全集」では『日本軍の司令官新納中將閣下』となっている。］

彼は別に大した財産を持つてゐなかつたが、金を作ることには妙を得てゐたといふ。のみならず持つて生まれた度胸と雄辨で、日米露支の大立物を、片端から煙に卷いて隱然たる勢力を張りつゝ、白軍のセミヨノフ、ホルワツトの兩將軍を左右の腕のやうに使つて、西比利亞王國の建設を計畫してゐたものださうな。自分の所有家屋を、軍隊經理と同價格の賄付きで、日本軍司令部に提供したのも、さうした仕事について日本軍と白軍の連絡を取るのに便利だからと云つて、進んで日本軍當局に要請したものであつたと云ふ。

［やぶちゃん注：●「白軍のセミヨノフ、ホルワツトの兩將軍」無論、ここまでの日本軍人の名は架空のものであるが、この二人は実在した人物である。ウイキの「西比利亜自治團」（「シベリアじちだん」と読む）及びそのリンク先によれば、「セミョノフ」はグリゴリー・ミハイロヴィチ・セミョーノフ（Семёнов, Григорий Михайлович　一八九〇年～一九四六年）でロシア革命当時、ザバイカル・コサック軍（Забайкальское казачье войско）のアタマン（атаман：統領。）であり、極東三州の独占的利権を確立しようとする日本軍参謀本部によって反革命勢力の軍事指揮官に擁立された人物である。ハルビンに於いてシベリア独立を目指し、日本の後援によって沿海州占領を計画した「西比利亜自治團」（団長は哈爾賓東洋大学教授ムスチスラフ・ペトロウィチ・ゴルワチョフ）を「極東政府（臨時全ロシア政府）没落後の代表者」と呼び、ロシア帝国の公金をここに譲渡させようとしたが、失敗して

いるとあり、「ホルワツト」はその同ウイキの末尾の「関連項目」の項に、似たような如何にも怪しげに『東邦露人大同協会（ホルワット将軍）』とある。」

ところが此頃になつて又すこし風向きが變つて來たといふ噂も傳はつてゐるやうであつた。

白軍の軍資金が缺乏した爲に活躍が著しく遲鈍になつた。ホルワツト將軍は、病氣と稱して畠の向うの舊哈爾賓の邸宅に寢てゐるらしく、彼が行つても容易に面會しない。同時にセミヨノフ將軍も以前の樣に彼の手許へ通信をよこさなくなつた。それは日本當局が貪慾な兩將軍を支持しなくなつたのに原因してゐるといふ事であつたが、その爲に立場がなくなつた彼は目下躍起となつて日本軍の司令部に喰つてかかつて居るといふ。

［やぶちゃん注：●「以前」一例と挙げておくが、「全集」は著しくルビが少なく、例えば絶対に読めないこの「もと」などのルビも、ない。久作は非常に当て読みの多い作家である。第一書房版全集はその点でも著しく不備と言わざるを得ない。］

「閣下よ。窓から首を出して哈爾賓の街を見られよ。露國人の性格は彼の通り曲線を好まないのだ」……と云つて……。

むろん是は吾々司令部の當番仲間だけが、勤務中に聞き集めた時の綜合だつたから其樣な噂がドンナ將來を豫告してゐるかは勿論のこと、果して事實かどうかすら保證出來ないのであつたが併し、何にしても哈爾賓を中心にしたオスロフの勢力が大したものであることは周知の事實であつた。其せゐか司令部の中をチヨコチヨコと歩きまはる日本の將校や兵卒が、彼を見るたんびに仰向けになつて敬禮する恰好が此上もなく貧弱で、滑稽に見えた。

彼は以上陳べたやうな偉大な勢力を象徴する立派な建物の中に、タツタ三人の家族を養つてゐた。眞白髪の母親と、瘠せこけた鷲鼻の細君と、それから現在、僕がこの手紙を書いてゐるすぐ横で湯沸器の番をしいしい編物をしてゐるニーナと……。

ことわつて置くがニーナは決して別嬪では無い。コルシカ人とジプシーの混血兒だと自分

で云つてゐるが、其せいか身體が普通よりズツト小さい。濃いお化粧をすると十四五位にしか見えない。それでゐて青い瞳と高い鼻の間が思い切つて狹い細面で、おまけに顏一面のヒドイ雀斑だから素顏の時はどうかすると二十二三に見える妖怪だ。ほんとの年齡は十九ださうで、ダンスと、手藝と、酒が好きだといふから彼女の云ふ血統は本物だらう。

性格はわからない。異人種の僕には全くわからないのだ。馬鹿々々しい話だが彼女が平生、何を考へて居るのか、彼女の人生觀がドンナものなのか、全く見當が付かないのだ。たゞ是非とも僕と一緒に死に度いと云ふから承知してゐるだけの事だ。さうして此手紙を書いて終ふまで死ぬのを待つて呉れと云ふと簡單にうなづゐただけで、すぐに落着いて編物を始めて居る女だ。だから僕には解らないのだ。

死ぬ間際まで平氣で編物をしてゐる女……。

すこし脱線したやうだ。

ニーナは十四の年に落魄した兩親に賣り飛ばされて、ネルチンスクから上海へ連れて行かれる處であつた。それを横奪りして哈爾賓へ連れて來た無賴漢の手から、又逃げ出したニーナは、キタイスカヤの雜沓の中に走り込むと、向うから來かかつたオスロフの首ツ玉に飛付いて、

「お父さん……」

と出鱈目を絶叫したものだといふ。それから大笑ひの中にオスロフの養女になつて、語學だの、計算だの、自動車の運轉だのを教はる身分に出世したが、酒を飲ませると惡魔のやうな記憶力をあらはすので皆呆れてゐる。その中でも自動車の運轉はアンマリ上手過ぎて先生のオスロフが膽を潰すくらい無鐵砲だつたのでこの頃は禁じられてゐたといふ。むろん本人の話だから眞實らしい。事實、酒を飲ませるとステキな才能と美しさを發揮する。雀斑までも消え薄れて氣がつかなくなるのだから……。

［やぶちゃん注：●「ネルチンスク」（Нерчинск）はロシア連邦ザバイカリエ地方のシベ

リア鉄道の都市で、チタの東三百五キロメートル、バイカル湖の東六百四十四キロメートルにあり、直線距離でハルピンの北西ジャスト千キロメートルの位置にある。」

又、脱線しかけた。

旅行勝ちなオスロフの留守中、司令部の上の四階には、そのお婆さんと妻君とニーナの三人が、居るか居ないか解らない位ヒツソリと暮してゐた。もつともその中でニーナだけは特別であつた。彼女は所謂、少女病の傾向に陥り易い無邪氣な司令部の將校や下士連中に引張凧にされてゐたので、いつもスラブ式の垂髪を肩の左右に垂らして、コツソリとお酒を飲んでは、三階の居室から、二階の事務室の間を、木戸御免式の自由自在に飛び廻つてゐた。尤も誰かに戒められてゐたらしく、二階から下へは滅多に降りて行かなかつたので、兵隊連中にはあまり評判がよくなかつた。……「あれあタヾの女ぢないぜ」……なぞと陰口を云ふ者もゐたが、併し、彼女がドンナ意味の只の女ぢやないかを知つて居る者は一人も居なかつた様だ。

それから次は問題の屋上であるが、これは一面に平べつたい展望臺になつてゐた。時々散歩に行つてみると中央の四本の煙突を包み圍んだ四角い裝飾煉瓦を中心にした黒タイル張の平面に、色々な形の大小の植木鉢が、何百何十となく並んでゐた。しかもそれが皆、仙人掌の鉢はかりで一々番號札が付いてゐた。これは當時こゝいらで大流行をしてゐたもので、ニーナからせがまれるまにまにオスロフが買ひ集めて遣つたものだと云ふ。ニーナは勉強や毛糸細工に飽きると、直ぐこの屋上に出て來て、小さなバケツに水を汲んで支那筆を濕しながら、そんな仙人掌の一つ一つにたかつてゐる滿州特有のホコリを拂つて遣る。それから大通りに面した木製の棚の上に毎日毎日並べ換えへてやるのであつた。

しかし僕がよくその展望臺に行つたのはニーナを見る爲ではなかつた。ニーナは、此家へ來た初めにタツタ一度、階段でスレ違ひさまに「ズアラスウヰツチ」と挨拶をしたら、ジロリと僕の顏を睨んだきり、返事もしないで逃げ降りて行つたから、ソレ以來、行き會つても

知らん顔をすることにきめた位だ。耳だけ發達してゐる僕の露西亞語が通じなかつたせいぢや無い。僕の興味を惹く可くニーナがあまりに小さかつたのだ。のみならず僕がアレ以來一種の女嫌ひになつてゐる事は君も知つてゐる通りだからね……。

［やぶちゃん注：●「ズアラスウヰツチ」“Здравствуйте”（ズドラーストヴィチェ）。「こんにちは」。］

僕がよく展望臺へ上つたのは景色がいゝからであつた。平凡な形容だが、そこから眺めると哈爾賓の全景が一つのパノラマになつて見えた。邪魔になるのは向家のカボトキン百貨店の時計臺だけであつた。

哈爾賓はさすがに東洋の巴里とか北滿の東京とか云はれるだけあつた。

［やぶちゃん注：●「東洋のパリー」主にロシア人によって開かれたハルピンはその美しい街並みから当時は「東洋のモスクワ」「東洋のパリ」と呼ばれた。］

何町といふ廣い幅でグーツと一直線に引いてある薄茶色の道路からして、日本内地では絶對に見られない痛快な感じをあらはしてゐた。小さな葉を山のように着けた楡の大木が、その左右と中央を三筋も四筋も縱貫してゐる間から、露西亞式の濃艶な花壇がチラチラしてゐる處を見ると、それだけで異國情緒が胸一パイにコミ上げて來る。

あつち、此方に、コンモリとした公園が見える。その間を鐵道線路が何千哩にわたる直線や曲線で這ひまはつて、眼の下の停車場を中心に結ぼれ合つたり解け合つたりしてゐる。その向うにお寺の尖塔がチラチラと光つてゐる。その又はるか向うには洋々たる珈琲色の松花江が、何處から來て何處へ行くのかわからない海みたように横たはつてゐる。三千百九十呎とか云ふ大鐵橋も見える。その又向うには何千哩かわからない高粱と、豆と、玉蜀黍の平原が、グルリとした地球の曲線をありのままに露出してゐる。大空と大地とが、あんなにまで廣いものと誰が想像し得よう。司令部の地下室から出てあの景色を見廻すと僕はボーツとなつてしまふのであつた。

［やぶちゃん注：●「寺」これはまず、可能性の一つは当時のハルピン（現在の中華人民共和国黒竜江省哈爾浜（ハルビン）市）にあった中央寺院（ニコライエフスキー大寺院であるが、これは文革時代に破壊されて現存しない。サイト「みに・ミーの部屋」の「満州写真館ハルピン　2」（この写真や解説、同「ハルピン　1」の何とも言えぬ雰囲気を持った絵葉書写真は、本作を読み、それを映像化する上で絶対に必見である！）に詳しく、そこには『ハルピンの絵葉書で必ず登場する中央寺院で、尖った屋根を持つ独特の形状』を成すとあって、『駅前から伸びる主幹道路のロータリーの真ん中にあるためか有名だったようで、多くの写真がのこってい』るとあって、内部の荘厳も贅を極めたものだったらしい（前に引いた「北海道大学附属図書館」公式サイト内のギャラリーにある「ハルピンの景勝：北満洲の都市美」で「哈爾濱中央寺院」の二枚の画像が見られる）。但し、この主人公上村（うえむら）の言い方が、複数の「寺」の尖塔が「チラチラと光つて」見えるというのであれば、リンク先にも書かれているように、当時のハルピンにはこの中央寺院よりも『もっと大きなものは幾つもあ』ったとあるから、現存する旧聖ソフィア大聖堂（中国語「聖索菲亜大教堂」）のそれである可能性もあるか。ウィキの「聖ソフィア大聖堂（ハルビン）」によれば、旧ロシア正教会の聖堂で、ハルビンを象徴するロシア建築であるが、現在は教会・聖堂としては使用されず、ハルビン建築芸術館として『ハルビンの開拓期の写真をはじめ、絵画、教会堂などの模型が展示されており、観光名所となっている』（一般には「ソフィスカヤ寺院」とも表記されるが、正教会では「寺院」の呼称は用いられないとある）。日露戦争の終戦二年後の一九〇七年三月に『帝政ロシアの兵士の軍用教会として創建された』。現在のそれは高さ五十三・三五メートル（但し、一九三二年に改築された後の高さ）。『ビザンチン建築の影響を強く受けており、平面がラテン十字形であり』、約二千人が『収容できる規模である。最上階の鐘楼には音の異なる』七つの鐘を有する。『内部の壁は痛みが激しく、色褪せ所々剥落しており古色蒼然たる趣がある。窓ガラスにはステンドグラスは一切使われていない。レオナルド・ダ・ヴィ

ンチの『最後の晩餐』のレプリカなどが飾られ、豪華なシャンデリアは特に壮大である』とある。

「松花江」（しょうかこう／中国音「ソンホワチアン」）は中国東北部を流れる川で、ウイキの「松花江」によれば、『満州語では松花江は「松阿里烏喇（スンガリ・ウラー、sunggari ula）」すなわち「天の川」と呼ばれており、この地に入ったロシア人もスンガリ（Сунгари）と呼んだ。第二次世界大戦前の日本、殊に満州国時代の日本人の間でもスンガリ川の名で知られている』。『アムール川最大の支流で、長白山系の最高峰、長白山（朝鮮語名：白頭山）の山頂火口のカルデラ湖（天池）から発し、原始林地帯を貫き吉林省を北西に流れ、吉林省長春の北で伊通河が合流する飲馬河をあわせて松嫩平原に入り、白城市（大安市）で嫩江をあわせて北東に流れを変え』、『しばらく吉林省と黒竜江省の境の東北平原を流れてから黒竜江省に入り、ハルビン市街区のすぐ北を流れる。その後牡丹江などの大きな支流をあわせて三江平原の湿地帯に入り、ロシア国境の黒龍江省同江市付近でアムール川に合流する』。長さは千九百二十七キロメートル、流域面積は二十一万二千平方キロメートルに及ぶ。『冬季は凍結し、春になると雪解け水によって最大流量に達する』とある。

「大鐵橋」これは現在の「濱洲（ひんしゅう）鉄路橋」と呼ばれるもの。「三千百九十呎（フイート）」は九百七十二・三メートルである。調べて見ると、とある実際に訪れた方の記載に、現在のこの橋は一・五キロメートルほどあると記されてあるのであるが、先の「満州写真館　ハルピン　2」に出る。これは昭和五（一九三〇）年の地図で見ると、少なくとも当時のそれ（橋部分）は本文通り、一キロメートル弱相当に見える。」

……スバラシイ𪜈無の實感……。

其の景色を眺めて居るうちに見當をつけて置ゐた地域を休みの時に散歩するのが又、僕の樂しみの一つであつた。

十萬の露西亞人は新市街に、三十萬の支那人は傅家甸（フーチャテン）に、五千足らずの日本人は阜頭區（ふとうく）と

云つた風に、それぞれ固まり合つて住んでゐる。其のそれぞれの生活を比較して見るのが、又なかなかの樂しみであつた。キタイスカヤ界隈の傲華（がうくわ）な淫蕩氣分（いんたうきぶん）、傅家甸（フーチヤテン）のアクドい殷賑（にぎやか）さ、ナハロフカの氣味惡い、ダラケた醜怪さ……そんなものが大きな畧無の中に蠢めく色々な蟲の群れか何ぞのように見えた。

［やぶちゃん注：●「傅家甸（フーチヤテン）」ハルピンの街区名。これを調べるうち、またしても必見の素晴らしいページを発見した。プロレタリア作家で戦死した里村欣三氏を顕彰する個人サイト「里村欣三ホームページ」の里村の「放浪病者の手記」についての評論「満州小考」である（くどいが、やはり解説と写真がマジ必見！　なお、以下の引用部では「傅家甸（フーチヤテン）」を「傳家甸」とするが、正しいと私が判断する「傅家甸」で統一した）。そこに掲げられた「ハルビン、都市の景観」の二枚の地図を確認されたい。本作に出る地名と位置関係がこれで完全に確認出来る。それによれば、哈爾賓（ハルピン）（現行では「ハルビン」）は、一寒村から二十年後の大正十年代には人口三十万人という『北満随一の大都市に発展したのであるが、その街区は「埠頭区（プリスタン）」「新市街（南崗）」「八区（八站）」「傅家甸」「馬家溝」「ナハロフカ」「香坊（旧哈爾賓）」に分けられる。「傅家甸（フーザテン）」は中国人街で』ある、とある。以下、そこからの孫引きとなるが、塚瀬進著「満州の日本人」（二〇〇四年吉川弘文館刊）によれば（下線はやぶちゃん）、『ハルビンは鉄道駅を中心に新市街（南崗）、埠頭区（道裡）、傅家甸（道外）などの地区からなり、日本人の多くは埠頭区に住んでいた。埠頭区は外国人商人が集まる商業街であり、横浜正金銀行や朝鮮銀行といった金融機関の支店や、三井物産や三菱商事などの支店がある場所であった。またハルビン銀座として有名なキタイスカヤ（中央大街）があり、ロシア情緒を感じる場所でもあった。（中略）傅家甸は喧噪にあふれた中国人街であった。住民の七割は労働者や小売商人といった下層の中国人が占め、市街は不潔であり、ひとたび雨が降れば走路はぬかるみ、歩行は困難を極めた。傅家甸には少ないながらも中国人に混じり奮闘する日本人もいた』とあり、越沢明著「哈爾賓の都市計画」（一

九八九年総和社刊）によれば、『プリスタン（埠頭区）のメインストリートはキタイスカヤ（中国大街）であり、モデルンホテル、秋林商会、松浦洋行（松浦商会）などの大型商業建築が軒を並べていた。キタイスカヤに併行する新城大街は１９２０年以降に発展した商店街で中国人経営の商店が多かった。日本人の商店はモストワヤ（石頭道街）、ウチヤストコワヤ（地段街）、トルゴワヤ（売買街）の一帯に集中していた。商店の看板は各国語で表示され、国際都市としての性格を表していた。裏町は夜は歓楽街となり、ロシア・キャバレーや邦人花街（ロシア官憲により一面街に営業指定区域の許可を得る）、朝鮮人遊郭（柳町）などが集積していた』とあり、同書によれば、『新市街（南崗）と馬家溝は緑豊かな美しい街で、「鉄道会社の施設・社宅、官庁、各国領事館、兵営」のある「山の手」で』、『中国人は南崗への居住は許されなかったが、プリスタンには商人の居住が認められた。中国人の多くはプリスタン東側の鉄道付属地外に拡がる河畔の沼沢地に居住するようになり、自然発生的に中国人外が形成された。これが後に傅家甸と呼ばれる地区で、鉄道付属地の外にあるため道外とも呼ばれるようになった』。『ナハロフカ（新安埠）はプリスタンの西側隣接地の低湿地であり、白系ロシア人の難民の貧民街であった。（中略）道路も未整備で、木造家屋が立ち並ぶという住環境の悪い地区で』、『香坊は、田家焼鍋〟という中国人集落があった場所で、「哈爾賓誕生の地であり、（中略）旧哈爾賓（スタールイ・ハルピン）と呼ばれ」る』など、本作を味わうに、非常に貴重な当時のハルピン市街の細部を伝えて呉れて、まっこと嬉しい（久作は行ったこともないハルピンをかなり正確に描写していることが分かる）。なお、本文に各地区の人口が出るが、『ハルビンの人口は、戸籍簿もなくまた調査機関も不備なため、資料および時期によって数字が大きく異なる』として、大正一一（一九二二）年の三つのデータが紹介されている。それによると、「哈爾賓乃概念」なる書には、

ロシア人（十五万五千人）＋中国人（十八万三千人）＋日本人（三千八百人）

＝計三十四万三千人

とし、『哈爾賓日本商業会議所時報』（第五号・大正十一年五月十五日発行）では、

ロシア人（五万五千人）＋中国人（十九万五千人）＋日本人（三千五百四十五人）

＝計二十五万四千人

で、さらに『哈爾賓日本商業会議所時報』（第十一号・大正十一年十一月十五日発行）では、

ロシア人（八万八千人）＋中国人（三十一万五千人）＋日本人（三千二百三十九人）

＝計四十四万四千人

とロシア人・中国人とも各十万人もの差がある数字ではあるが、大正十一年のハルビンはほぼ三十万人都市であって、『中国人の増加とロシア人の減少という激しい人口移動が行なわれた都市であった』と述べられ最後に、但し、この大正十年代の三千から三千五百人という『ハルビンの日本人数は「日本人居留民会」下にある人々であって、旅行者等の一時滞在者や不良無頼の徒、阿片やモルヒネを扱う密売商など、この数値を相当に超える日本人がハルビンに居たと思われる』とあるから、久作の、

ロシア人（十万人）＋中国人（三十万人）＋日本人（五千人足らず）

＝四十万五千人

という数値もこれ、決していい加減なものではないことが分かる。最後に。ここまでで誤解されている方がいるとまずいので言っておくが、作者夢野久作（本名・杉山直樹）は四十七年の短い生涯の中で一度も日本国外に出たことは、なかった。」

ところが、そんな處を丹念に見まはつてゐるうちに、その副産物といふ譯ではないが、市中に在る色色な銀行や兩替店の名前、工場、商店、料理屋の大きなもの、劇場、娘子軍の巣なぞ云ふものを僕はスツカリ記憶え込んでしまつたので、司令部のお使ひと云ふとすぐに「上村」と指名される位、重寶がられるやうになつた。そのたんびにイヨイヨ哈爾賓通になつて行つて、貰ひ集めたり買ひ集めたりした古雑誌の類が、整頓棚と同じ高さになつてゐた。……退屈な、話相手もない、兵卒の中の變り種である文學青年の僕に取つては、讀書以

外の何の慰安もなかつたので……。

［やぶちゃん注：●「娘子軍」娼婦たち（集団）を表わす隠語。ここは所謂、日本人街の「からゆきさん」らのそこだけでなく、ロシアや中国人のそうした生業（なりわい）を成している人々の居住区をも指すものと思われる。］

事實……屋上の展望と散歩を除いた哈爾賓（ハルピン）の生活は、僕に取つて退屈以外の何ものでもなかつた。町のスケールが大きければ大きいだけ、印象がアクドければアクドいだけ、それだけ哈爾賓（ハルピン）の全體が無意味な空つぽなものに見えた。その中に一直線の道路と、申し合わせたやうなモザイク式花壇を並べてゐる露西亞人のアタマの單調さ、退屈さ、それは吾々日本人に取つて到底想像出來ないくらゐ無意味な飽きつぽいものであつた。その中で毎日毎日判で捺した様な當番の生活をする僕……眺望と、散歩と、讀書以外に樂しみの無い無力な兵卒姿の僕自身を發見する時、僕はいつも僕自身を包んでゐる無限の空間と、無窮の時間を發見しないわけには行（ゆ）かなかつた。宇宙は一つのスバラシク大きな欠伸（あくび）である。さうして僕は其中にチヨツピリした欠伸をしに生まれて來た人間である……といふ事實をシミジミと肯定しないわけに行（ゆ）かなかつた。

處（ところ）が九月初旬の何日であつたか。丁度月曜日だつたから、僕達が司令部にはいつてから五週間目だつたと思ふ。その不可抗的に大きな退屈を少しばかり破るに足る事件が持ち上つた。むろんそれは最初のうち僕自身にだけサウ感じられたので、事實はトテモ大きい……西比利亞（シベリア）から北滿（ほくまん）へかけての政局と戰局に、重大關係を及ぼすほどの事件の導火線だつたことが後（あと）になつてから首肯（うなづ）かれた。

［やぶちゃん注：●「九月初旬の何日であつたか。丁度月曜日だつたから、僕達が司令部にはいつてから五週間目だつたと思ふ」本作品内時間は大正九（一九二〇）年であるから、カレンダーを見る限り、九月六日の月曜と思われる（次の月曜は十三日で最早初旬ではない）。従って、彼がハルピンの日本陸軍司令部に着任したのは、八月の第一週目であったことが分

かる。」

それは經理室附きの星黒といふ〇〇主計が公金十五萬圓を竊盜つて、同じ司令部附きの十梨といふ通譯と一緒に逃亡した事件であつた。

［やぶちゃん注：●「星黒」底本ではここは「ほしくろ」とルビするが、以降は「ほしぐろ」となっているので、訂した。●「〇〇主計」「全集」では『二等主計』となっている。●「竊盜つて」「全集」では「かっぱらって」となっている。］

さうした事實が發覺したのは月曜日の午前中であつたが、取調べの結果判明したところによると、星黒主計が朝鮮銀行の支店から金を引出したのは土曜日の午前中であつた。それから何喰はぬ顏で經理部へ來て、平常の通り事務を執つてゐたのだから、行衞を晦ましたのは土曜日の晩から日曜の朝へかけての事らしかつた。なほ帳簿を調べてみると星黒主計は、それまでに千五百圓ばかりの官金を費消して居たと云ふのだから、多分、近いうちに實施の豫定になつてゐる軍經理部の會計檢査を恐れて、毒皿方針を執る決心をしたものであつたらう。

……又、一緒に逃げた十梨通譯は七月の下旬に内地から來た者で、來る匆々からホルワツト將軍の手記を飜譯させられてゐたものだといふ。そのうちに星黒主計とも懇意になつたらしく、よく一緒に何處かへ飮みに行く姿を見かけたものであるが、それが日曜の朝からプツツリ姿を見せなくなつたのでテツキリ共犯と睨まれてしまつたものである。……二人とも戰鬪員では無いので軍人精神が薄弱である。おまけに舊式露人の豪華な生活や、在留邦人の放縱な交際紅接する機會が多かつた關係から、コンナ墮落した心理汚態に陷つたものであらう……と將校連中は云つてゐた。

［やぶちゃん注：●「毒皿方針」老婆心乍ら、毒を食らわば皿まで、一旦、悪に手を染めたからには最後まで悪に徹しよう、というやり方である。］

しかし、かうした憤慨は將校連中よりも兵卒の方が非道かつた。この時の戰爭の特徵として、何處を當てどもなく戰爭して來てゐるやうなタヨリない、荒んだ氣持ちに兵隊達は皆な

つてゐる處であつた。その癖、相手は何時何處でドンナ無茶を始めるかわからないパルチザンや土匪と來てゐるのだから、何の事はない、一種の人間狩みたやうなモノスゴイ氣持ちで毎日毎日ウズウズしてゐる兵隊連中であつた。そこへ思ひがけないハツキリした賣國奴同然の奴が、二人も揃つて、味方の中から飛び出したのだからたまらない。上官だらうが何だらうが構はない。見付け次第にノシちまへと云つた調子でトテモ素晴らしいセンセイションを捲起したものであつた。

［やぶちゃん注：●「土匪」匪賊。老婆心乍ら、土着民の中で武装して集団となって略奪や暴行を行っていた賊の意であるが、特に近代史上の日本語では近代中国に於ける中国人の非正規武装集団を広く指した。］

むろん司令部は大狼狽であつた。事件の發覺した朝のこと、僕たちがまだ何の事か判らないまゝ、眼の色を變へて出入りする特務機關所屬の參謀や、憲兵や、銀行員らしいものの顏を茫然と見まはしてゐるうちに、當番係の上等兵が降りて來て、三階の眞中の一室に積上げられてゐる夥しい椅子を十個だけ殘して、あとを全部四階の大舞踏室へ持つて行けと命令を下した。さうしてそのアトに急設された捜索本部（假りにさう云つて置く）に六人の憲兵がドカドカと詰めかけて來た。上席が中尉で、左右に曹長と伍長、そのはかに上等兵が三名で合計六名であつたが、みんな腕ツコキの連中といふ評判であつた。

［やぶちゃん注：●以下、底本では一行空き。］

あの憲兵の黑い襟章といふものはナカナカ考へたものだ……と其時に僕は思つた。それだけの連中が揃ひの黑襟章でズラリと椅子にかゝつてゐる處を見ると、今にも犯人が捕まりさうな空恐ろしい氣持がした。……むろん僕が犯人では無かつたのだが……。

その連中が詰めかけて來ると間もなく當番係の上等兵の命令で、戰友の一人が當番卒を拜命して行つたが、そのうちに午後になると、上等兵がいくらかフクレ氣味になつて僕を呼び

出した。

「……オイ、上村、濟まんが君代りに捜索本部に行つて呉れ。モツト哈爾賓の事情に明るい者を寄越せつて曹長に怒鳴り付けられたんだ。君が居なくなると司令部が不自由するんだが……」

僕は笑ひ笑ひ身仕度をした。不平どころか……一種の探偵劇でも見るやうな漸新な氣持で、勢よく階段を駈上つたものであつた。

行つてみると捜索本部には、今云つた六人のはかに司令部附の鬚達磨と綽名された歩兵少佐と、特務機關から派遣されたらしい色の生白い近眼鏡の中尉と、それから當の責任者らしい上席の一等主計が控へてゐた。ちやうどセントランニヤ内部の參考人調べが濟んだところであつた。

僕はその部屋の入口に近い當番用の卓子と椅子に納まつて、並居るお國々の諸氏がドンナ捜索をするかを一所懸命に注意してゐた。むろん夫れは大きな退屈の中から絞り出された、つまらない一種の探偵趣味に過ぎなかつたが併し、それでも此部屋に集まつて來る報告は出來るだけ頭に入れて置こう。まかり間違つたら、俺一人で犯人を捕へるのも面白からう……ぐらいの野心は聊かながら持つてゐた事を白状する。とにかく何時も引込み思案の僕が、永い間の退屈病に惱まされてゐたせゐであつたらう。此時に限つて、今までにない生き生きした興味の中に蘇生し始めてゐたのであつた。

捜索本部の手は最早、午前中に八方に伸ばされてゐた。哈爾賓市中は云ふに及ばず、東は露支國境のポクラニーチナヤ、寧古塔、北は海倫、西は齊々瞭爾、滿洲里、南は長春、奉天と嚴重な警戒網が張られていて、今にも犯人が引つかかるか引つかかるかと鳴りを鎭めて待つてゐる形態であつた。

［やぶちゃん注：●「ポクラニーチナヤ」現在のロシア沿海地方、中国国境まで十三キロメートルほどのポグラニチニ（Пограничный）。ハルピンから直線で東南東へ四百十キロメ

ートルに位置する。　●「寧古塔（ニクタ）」（ニングダ／ねいことう）は清代から一九三〇年代初頭にかけて満州東部の牡丹江中流域にあった地名で、清が満州を統治するに当たり重要な役割を果たした場所であった。現在の黒竜江省牡丹江市寧安に相当する。参照したウィキの「寧古塔」によれば、『清代末期になると北京条約などによりアムール川以北やウスリー川以東はロシアに割譲され、毛皮貿易など少数民族相手の交易は衰える。また東清鉄道建設に伴いハルビンなどの街が建設されるが、それでも寧古塔は満州東部の数少ない都市でありロシアなどに対する軍事拠点だった。特に牡丹江沿岸にあたるため水田耕作に適した土地で』、十九世紀終わりから『漢民族や朝鮮人が周辺に移住し稲作や畑作を始めた』。『吉林省設置以降は寧安府、次いで寧安県が寧古塔に置かれたが、寧安県設置以後も寧古塔という名は慣用的に使用されていた。辛亥革命以降の混乱期には、寧古塔は中国人の革命運動や朝鮮人の抗日パルチザンなどさまざまな勢力の拠点となった』。一九三〇年代に『日本が満州国をこの地に建国してからしばらくの間も寧古塔は農林業の集散地として栄えていたが、牡丹江市の建設により農林業上・軍事上の拠点としての地位を譲ることとなった』とある。地図で確認すると街としての牡丹江はポグラニチニのほぼ西百四十キロメートルにあり、現在の牡丹市内の寧安（ここも市）は牡丹江市を貫通する牡丹江の直線で四十キロメートルほど下流にある。

●「海倫（ハイリン）」ハルピンのほぼ北百八十キロメートルにある街。現在の黒竜江省綏化（すいか）市海倫市。ロシア国境まで二百五十～三百キロメートルほど。　●「齊々瞭爾（チ、ハル）」現在の黒竜江省（省直轄市）斉斉哈爾（チチハル）市。ハルピンの北西約二百六十キロメートルに位置する、ハルピンに次ぐ黒竜江省の大都市。　●「滿洲里（マンチュリー）」現在の中華人民共和国内モンゴル自治区ホロンバイル市内の満州里市。ハルピンの北西約八百キロメートルのロシアとの国境直近。モンゴル国境も五十キロメートルほどしか離れていない。　●「長春」現在の省政府が置かれている吉林省長春市。ハルピンの南南西二百三十キロメートルに位置する。　●「奉天」旧中華民国と旧満洲国にかつて存在した現在の瀋陽市に相当する都市。長春をほぼ中間点としてハルピン南南

西凡そ五百キロメートルに位置した。現在の朝鮮民主主義人民共和国国境までは南東に二百キロメートルほど。」

一體この星黒といふ主計は、名前の通りに色の淺黒いツンとした小柄な男で、イヤに神經質に勿體ぶつた八釜し屋であつた。ふだん戰鬪員から輕蔑される傾向を持つてゐる計手とか軍樂手とかにあり勝ちなヒガミ根性が、この男にも執念深くコビリついてゐたものらしい。戰時には餘り八釜しく云はれない缺禮を、この男は發見次第に怒鳴りつけたので人氣が恐ろしく惡かつた。

しかし之に反して一緒に逃げた十梨通譯は格別、憎まれてゐなかつた。ちよつと見た所、何の特徴も無いノツペリした色男だつたので兵卒連中から幾分、輕蔑されてゐる傾はあつたが、それでも外國語學校出身の立派な履歷を持つてゐたさうである。人間が如才ない上に露西亞語が讀み書き共にステキに達者なので、着任早々から三階の連中に重寶がられてゐた事實と、これも如才ない一つであつたらうか、軍隊内で禁物の赤い思想の話が、どうかした拍子にチヨツトでも出ると、忽ち顏色を變へて露西亞の現狀を罵倒し初めるのが、特徴と云へは特徴であつたといふ。尤も「彼奴は露西亞語ばかりぢやないぜ。支那語もステキに出來るらしいぞ」と云ふ兵隊も居たが、しかし本人は絶對に打消してゐたといふ。

其二人は今や全軍の憎しみを引受けつゝ行衞を晦ましてゐる譯であつたが併し、捕まつたといふ情報はなかなか來なかつた。さうしてその日が暮れて、翌る日の火曜日になると、もう、そろそろと大陸特有の退屈が舞ひ戻つて來た。入口の扉に新しく「〇〇〇〇軍政準備室」と貼紙をした以外には何一つ變つた事の無い捜索本部の片隅に腰をかけて、北滿特有の黄色い窓あかりを眺めてゐるうちに、ともすると腹の底から巨大な欠伸がセリ上つて來るのをヂツと我慢しなくてはならなくなつた。

もつとも、それは僕一人ぢやなかつたことを間もなく發見する事が出來た。

僕は最初のうち意兵諸君の行儀のいゝのに感心してゐた。芝居の並び大名と云つた格で、

一列一體に威儀を正したまゝ、いつまでもいつまでもかしこまつてゐる。執務中のつもりであらう煙草一服吸ふ氣色もない。時々思ひ出したやうに「電話はかゝらないか」とか「電信は來ないか」とか云つて一軒隣りの司令部に僕を聞きに遣る。さうかと思ふと又、思ひ出したやうに地圖を引つぱり出したり、一度投げ出した汽車の時間表を拾ひ上げて繰り返し繰り返し檢査したりする。……此邊は汽車の時間表は無い方が正確なのに……と思つたが恐らくこれは退屈凌ぎの積りであつたらう。

此連中が腕ツコキと云はれてゐる理由は、發見された犯人を勇敢に追跡して、引つ捕へて、タヽキ上げて、處刑するまでの馬力がトテモ猛烈で、疾風迅雷式を極めてゐるからであつた。たゞそれだけであつた。だから其の犯行の徑路を推理したり、犯人の遁路を判斷したりするところの所謂、警察式の機能、もしくは探偵能力といつたやうなものは絶無なので、何でも嫌疑者と見れば片ツ端から引捕へて處刑して行く。其中のどれかゞ眞犯人であれば夫れでよろしい……といふところに黑襟のモノスゴサが認められて居るのであつた。これは決して惡口ではない。戰地では内地の警察みたやうな叮嚀、親切な仕事ぶりでは間に合はない事を僕らは萬々心得てゐたのだ。從つて軍政下における「靜寂」とか「戰慄」とか云ふものは實に、かうした黑襟の權威によつて裏書きされてゐると云つてもよかつたのだ。

彼等黑襟の諸君は、だから斯様して威儀を正しながら偶然の機會を待つて居るのであつた。犯人が高飛をするとなれば必ずや鐵道線路を傳ふに相違ない。それ以外の地域はまだ交通、生命の安全を保障されていないのだからその要所要所に網を張つて置けばキツと引つ掛かるに相違ないといふ確信を持つてゐるらしかつた。しかも其要所要所に見張つてゐる黑襟の諸君が矢張りコンナ風に、その要所要所で一團となつて、威儀を正してゐるであらう光景を想像すると何ともハヤたまらないアクビがコミ上げて來るのであつた。

そいつを我慢しいしい向家のカボトキンの時計臺が報ずる十一時の音を聞いた時には最早、トテモ我慢出來ない大きなアクビが一つ絶望的な勢いでモリモリと爆發しかけて來た。

ソイツを我慢しようとして俯向きながら両手を顔に當てようとすると、其時遲く彼の時早く、その欠伸が眞正面の中尉殿の顔に公々然と傳染してしまつた。そこで待つてゐましたとばかり上席から末席に亙つて一つ一つに欠伸玉の受け渡しが初まつたが、併し感心なことに其のやゝこしいアクビのリレーが片付いても笑ふ者なぞ、一人も居なかつた。間もなく元の通りのモノスゴイ、靜肅な捜索本部に立ち歸つてしまつたのであつた。

僕は後悔した。僕を捜索本部の當番の刑に處した上等兵を怨んだ。汽車の通らない停車場の待合室よりもモツト無意味だと思つた。

しまいには自分自身が嚴然たる憲兵に取り巻かれて、第三等式の無言の拷問を受けてゐる犯人みたやうなものに見えて來た。……これぢや、とても辛抱し切れない。いよいよ遣り切れなくなつたら「私が犯人です」と云つて立上つてやろうか知らん。さうしたら、いくらか退屈が凌げるかも知れない……なぞと途方もない事までボンヤリと空想し初めてゐた。そのうちにヤツト晝食の時間が來た。

［やぶちゃん注：●「第三等式」程度の低い、拙劣な、という意味であろう。］

僕は本部の連中に、辨當のライスカレーとお茶を配つた。それから自前の食事を濟ましに地下室へ降りると、そこで又、悲觀させられた。當番連中が一齊に僕の周圍に集まつて來て、

「どうだ。捕まりそうか」

と口々に聞くのであつた。其のまわりを料理人の支那人、雇人頭のコサツク軍曹、耳の遠い掃除人夫の朝鮮人と云つた連中が取巻いて、青や、茶色や、黑の眼に、あらん限りの興味をキラキラと輝やかして居るのであつた。

［やぶちゃん注：●「濟ましに」「全集」では『済まして』となっているが、これは明らかに「濟ましに」が正しい。第一書房版全集の方の誤植である。 ●「コサツク」」かつてウクライナと南ロシアなどに生活していた軍事的共同体であったコサック（kozak）。コサック軍は第一次世界大戦参戦（一九一四年）ではロシア騎兵団の中心を成したが、後の一九一

七（大正六年）年のロシア革命が勃発するとウクライナ・ドン・クバーニに於いてコサック三国は独立を宣言、三国はロシア白軍及びシベリアのコサック諸軍とともにロシア共産党及び赤軍に抵抗したが敗北、一九一八年から一九二〇年にかけてコサック階級は排除されてコサック諸軍も廃軍となった。なおこの後、裕福なコサックの一部は欧米諸国へ逃亡したが、残されたコサックは共産党による弾圧の対象となり、ソヴィエト政権はコサックの大部分とそれらの家族全員を死刑や流刑に処し、ホロドモール（Голодомор：一九三二年から一九三三年にかけてソビエト連邦ウクライナ社会主義ソビエト共和国・カザフスタン共和国・現ロシア連邦のクバーニ・ヴォルガ川沿岸地域・南ウラル・北シベリアなどのウクライナ人が住んでいた各地域で起こされた人工的な大飢饉。ウクライナ人たちは強制移住によって家畜や農地を奪われて、このジェノサイドによって四百万から千四百五十万人が死亡したとされる。これの大飢饉は現在、ウクライナ議会によってスターリンによる計画的な飢餓と認定されている）によって餓死させられた。このため、第二次世界大戦においてはコサック残党はドイツ軍に味方してソ連軍と戦ったが、ドイツの敗北とともにコサックは共同体としての姿を消した（ここは主にウィキの「コサック」及び「ホロドモール」に拠った）。」

僕は手を振つて逃げる様に自分の食卓に就いた。

「……駄目だよ。捕まつたのはアクビだけだよ」

と云ひたいのを我慢しいしい皮のままのジヤガイモを盜泓つた。

食事を濟ました僕は、地獄に歸る思ひで地下室を出た。イヤに長い午後の時間を考へながら、屠所（としよ）の羊よりもモツト情ない恰好で、三つの階段をエンヤラヤツト登つたが、早くも出かゝつた欠伸をかみ殺し、入口の扉（ドア）を押すと同時にビツクリした。出會ひ頭に待構へてゐたらしい、曹長のキンキン聲が機關銃みたいに飛び付いて來たので……。

「オイ。當番。これを第二公園裏の銀月といふ料理屋に持つて行け。知つとるだらう。經理部の取調（とりしらべ）が濟んだから返すのだ。銀月の會計係の阪見（さかみ）といふ男に返すんだ。阪見（さかみ）が居らな

ければ銀月の女將に渡せ、それ以外の人間に渡すことはならんぞ。えゝか」

［やぶちゃん注：●「第二公園」本作の後の描写と、現在のハルビン（哈爾濱）の地図を眺めての印象に過ぎないが、これは松花江の南岸の市街地にある兆麟公園がモデルではなかろうかとも思われる。］

僕は曹長の手から四角い平べつたい、青い風呂敷包みを受け取つた。

「ハッ、復誦します。上村當番はこの帳簿を銀月の……」

「馬鹿……誰が帳簿と云ふたか」

曹長は千里眼に出會つた様に眼を剥いた。

「その包みの内容は極祕密になつとるんだぞ」

僕は情なくなつた。これが帳簿だとわからない位なら一等卒を辭職してもいゝと思つた。

「ハツ。上村は此の四角い箱を銀月に持つて行きます。そこの會計主任か、女將に渡します。それ以外の人間に渡さなければならない場合は持つて歸ります」

「よし……女將の名前は知つとるぢやらう」

「ハイ。知りません」

「富永トミといふのだ。えゝか」

曹長は重大そのものの様な顔をした。

僕は卷脚絆と帶劍を捲附つけて外へ出た。

何を隱そうトテモ嬉しかつた。死ぬより辛い退屈地獄から思ひがけなく救ひ出された愉快さで一パイになつてゐた。相濟まぬ話だが司令部から遠ざかれば遠ざかるほど救はれたやうな氣持ちになつて行つた。

僕は惡い事と知りつゝわざと遠まはりをした。キタイスカヤの雜沓を避けて、第二公園の方向から外れた廣い通りへ廣い通りへと出て行つた。

道の兩側に並んだ楡や白楊の上にはモウ内地の晩秋じみた光りが横溢してゐた。歩道の一

部分に生垣をめぐらした廣い公園だの、白楊の青白い幹が幾十となく並んだ奥に、巨大なお菓子か何ぞのやうに毒々しい色の草花を盛り上げた私人の庭園だの、仙人掌、棕櫚、蝦夷菊、ダリヤなぞ云ふ植物をコンモリと大らかに組合はせた花壇だのが、軒並に續き燈がつてゐるのを、僕は今更のやうにもの珍しく覗いて行つた。その奥に見える病院みたやうな窓の中から、面白さうな手風琴の音が洩れて來るハルピンの午後の長閑さ。なつかしさ……。

［やぶちゃん注：●「白楊」この漢名は本邦では、ビワモドキ亜綱ヤナギ目ヤナギ科ヤマナラシ属ヨーロッパヤマナラシ変種ヤマナラシ *Populus tremula* L. var. *sieboldii* と同ヤマナラシ属ドロノキ *Populus suaveolens* の別名として用いるが、中国東北部では後者を指すと考えてよい。水分の多い土壌を好み、川岸や湿地などに植生する。●「蝦夷菊」キク亜綱キク目キク科キク亜科エゾギク *Callistephus chinensis*。中国北部原産で半耐寒性一年草で、草高は三十センチメートルから一メートルにも達する。茎は直立し、葉は柄があり、長楕円形で互生、茎・葉共に白い毛が生えている。花は花径三センチメートルほどの小輪から十センチメートルを超える大輪のものまであり、頭花は白・ピンク・赤・藍色など多彩で、中心の黄色と美しいコントラストをなす個体も多い。花の形には、一重咲きと八重咲き、重ねの厚いぽんぽん咲きがあり、管弁のものもある（以上はウイキの「エゾギク」に拠った）。］

青い風呂敷包みを抱へた僕は口笛を吹きながらユツクリユツクリ歩いて行つた。さうして茶鼠色の薄い土煙を揚げる歩道をみつめながら、いつの間にか眼の前の退屈事件の事を考へ續けてゐた。

……星黒と十梨は今頃どこに居るだらう。

……二人は果して共犯者だらうか。

假に俺が犯人とすれば、ドンナ風に逃げるだらう。捜索本部の能力を最初から看破つてゐるとすれば左程に怖がる必要は無いかも知れないが、しかし逃げる身になつてみたら左様タカを括る譯にも行かないだらう。否でも應でも、あらん限りの知惠を絞らずには居られない

だらう。捜索本部は果してソンナ處まで犯人の心理作用を警戒して居るだらうか……。

……汽車で逃げるのは一番捕まり易い道を行くやうなもんだ。哈爾賓以西の安全區域だけを上下してゐる、松花江通ひの汽船に乗つても同じ事だ。目下の處日本官憲の手が屆くのは、さうした交通機關の動いてゐる範圍内に限られて居るのだから、其樣なもの利用して逃げるのは官憲の手の中を這い廻るのと同じことになる。それを知らない二人ではあるまい。

……ところで夫れ以外の通路を傳つて哈爾賓の外まはりの茫々たる大平原の起伏に紛れ込んだら何樣だらう。人間も蟲も區別が付かなくなるのだから、たゞ日本の官憲に捕まらないだけが目的なら此方法が一番であらう。

……しかしそこには日本の官憲よりもモツト恐ろしい者が知らん顔をして待ち構へてゐる虞れがある。その第一は西比利亞から北滿へかけた平原旅行に付きものゝ飢餓行進曲だ。難波船の漂流譚を自分の足で實驗しなければならないばかりでなく、日本人と見たら骨までタタキ潰す赤の村が何處に隱れてゐるか解からないのだ。そんな村に片足でも踏込んだら、最後、〇〇支隊でも全滅するのだから敵はない。

［やぶちゃん注：「〇〇支隊」「支隊」は分遣隊・派遣隊とも呼称し、軍隊に於いて特別の作戦任務に基づき、一時的に本来の指揮系統から独立して行動する（行動出来る）部隊のことを指す。参照したウィキの「支隊」によれば、『陸軍の場合、小部隊でも独立した戦闘力を与えるために、戦闘団と同様な諸兵科連合部隊として編成することが通常である。規模は大隊級から旅団級まで任務によって様々で』あったが、特に『日本陸軍の場合、支隊長の名前にちなんで「秋山支隊」のように命名するか、配置された地名にちなんで「ビコール支隊」のように命名することが一般的である』（ビコール部隊はフィリピンのルソン島のビコル半島及びサマール島・カプル島に配置されていた陸軍部隊）とあるから、ここはそうした一種の精鋭部隊を読者にイメージさせ、それでも全滅する、という過酷さを読者に喚起するものである。］

……その次はお膝元の哈爾賓市中に潜り込んで居て、ホトボリの醒めた頃、變裝の高飛を試みる手段がある。ナハロフカだの傅家甸だのにはソンナ潜入孔がイクラでも有るだらう。ナハロフカは横着部落といふ意味だそうだ。だから其處いらにウロ付いてゐる縮緬の上衣を着た唇の眞赤な露西亞女でも、赤いスウエータを着た賭博宿の婆さんでも、十圓札の二三枚ぐらゐ見せたら一週間や十日位はオンの字で奥の室を貸して呉れるであらう……。イヤイヤ、そんな劍呑なところへ飛込まなくとも傅家甸の平康里（娼婦街）に紛れ込んで、釣鐘形に紅い紙の房を下げた看板の下を、煉瓦造の中へ一歩踏込めばモウこっちの物と思つていゝ。支那人が珍重する十二三の子供みたやうな女を買ひ續けて居るうちに、絶對安全の遁道が、自然と判明つて來るものだ……といふ話も聞いてゐる。

［やぶちゃん注：●「支那人が珍重する十二三の子供みたやうな女を買ひ續けて居るうちに、絶對安全の遁道が、自然と判明つて來るものだ……といふ話も聞いてゐる」久作節炸裂の意味深長意味不明なすこぶる妖しく怪しい淫靡隠微なるもの謂いではある。］

……此の三つしか目下の處、抜け路が無い様だ。一方に星黒が想像通り露語通譯を連れて居るものとすれば、その逃亡計畫はかなり遠大なものと見なければならないが、サテどの方法を執つてゐるのであらう。

……捜索本部の連中は夢にもそんな事に氣づいて居ないやうであるが……。

そんな事を考へ考へ司令部からシコタマ溜めて來た欠伸を放散しいしい歩いてゐるうちに僕は、小脇に抱えてゐる帳簿の風呂敷包みが落ちさうになつたので、チヨット立ち止まつて抱へ直した。……と……同時に僕は又、心機一轉して或る重大な想像を頭の中に旋回させ初めたのであつた。

後から考へると僕がこの時に心氣一轉した結果が……モツト端的に云ふと、僕が此時に青の風呂敷包みを抱へ直した一刹那が、今日のやうな重大な政局の變化を東亞の政局にもたらした一刹那だつたとも云へる様に思ふ。……と云つて何も別に氣取る譯ぢやない。僕がソン

ナに偉かつたと云ふ説明には毛頭ならないが、所謂、魔がさしたと云ふものであらうか。

哈爾賓市中を彷徨してゐる巨大な退屈魔の一匹が突然に一種の尖鋭な探偵趣味に化けて僕のイガ栗頭に取憑いた結果、今日のやうなモノスゴイ運命に吾と吾身を陥れる事になつたとも、考へれば考へられるであらう。

僕は帳簿の包みを抱へ直したトタンに或る一つの大きなヒントを受けたのであつた。もしや星黒主計は銀月に隠れて居るのではないか知らん……と……。

これは單なる僕の想像程度のものに過ぎなかつたが、しかし、それでも全然理由のない考へではなかつた。今持つて行く帳簿は、星黒主計が費消した官金の行方を調べ上げる參考にしただけの物である事は解り切つてゐるが、しかし今までチツトも話を聞かなかつた銀月が、犯人の祕密の遊び場所だつたとすると、そこを犯人の有力な隠れ場所の一つとして數へ上げない譯には行かないであらう。これが憲兵だから氣付かないで居るやうなものゝ、内地の警察か何かだつたら、ドンナに鈍感な刑事でも、直ぐに疑ひをかけてみる處であらう。

銀月は哈爾賓切つての一流料理店だといふ。同時に北滿切つての見事な日本建築の室があつて「莫斯科の洞穴」を眞似た祕密の娯樂室が幾室でも在るといふ話だが……待てよ。

［やぶちゃん注：●「莫斯科の洞穴」不詳。モスクワの古伝承か？　それとも、荘厳壮大なクレムリン宮殿の譬えか？　識者の御教授を乞う。］

コンナ風に頼まれもしない事件の眞相をタツタ一人で……恐らく世界中にタツタ一人で眞劍に考へめぐらしながら、覺えず知らず探偵趣味を緊張させてゐるうちに、どこを何樣曲つて來たものか銀月の三層樓閣がモウ向うに見えて來た。何と云ふ式か知らないが、スレート屋根の素敵に大きい、イヤに縦長い窓を矢鱈に並べたカーキ色の化粧煉瓦張りの洋館に、不思議によく似合つた日本風の軒燈。二階三階の窓硝子に垂れ籠めた水色のカーテン……そんなものが氣のせいか妙に祕密臭くシインと靜まり返つて、正午下りの秋日をマトモに吸ひ込んでゐた。

［やぶちゃん注：●「妙に祕密臭くシインと靜まり返つて」底本は「妙に祕密臭いシインと靜まり返つて」であるが、「全集」と校合して訂した。］

僕はチヨット躊躇しながら往來に面した銀色のダイヤグラスの扉を押し開ゐた。わざと玄關へ廻るのを避けて勝手口へ來たのだ。……やはり僕の探偵趣味がさうさせたのかも知れないが……。三坪ばかりの白タイル張の土間の上り口から右に廻ると直ぐに玄關へ出るらしい。一段高くズーツと奥の方へ寄木細工の廊下が拔け通つて右と左に扉が並んでゐる。ちやうど正午過の掃除が始まつた時分と見えて、その扉が一つ一つに開け放されてゐた。

［やぶちゃん注：●「ダイヤガラス」古い建具などで見かける、ガラス表面に有意な凹凸があって、角度が変わるとダイヤのように輝く、本邦製のアンティーク・ガラス。よく似た輸入ガラスに「クリアテクスチャ（ダイヤクリア）」というガラスがある。こんな小道具も美事に大正ロマンを漂わせていることに着目されたい。］

今一度、躊躇しながら上り口の呼鈴を押すと、奥の方からバタバタと足音がして十六、七の小娘が出て來た。その小娘がまだ立ち止まらないうちに僕が敬禮しながら、

「阪見さんは居られませんか。司令部から來ましたが……」

と怒鳴ると、ちやうど待つてゐたかのやうに直ぐ横の應接間らしい扉が開いて、奥様風の丸髷に結つた女が顔を出した。

與謝野晶子と伊藤燁子の印象をモツト魅惑的に取合はせた見目容とでも形容しようか。年増盛りの大きく切れ上つた眼と、白く透つた鼻筋と、小さな薄い唇が水々した丸髷とうつり合つて、あらゆる自由自在な表情を約束してゐるらしかつた。その黑い黑いうるんだ瞳と、牛乳色のこまかい肌が、何とも云へない病的な、底知れぬ吸引力を持つてゐるやうにも感じられた。それが僕の顔をチラリと見ると、すぐにイソイソと出て來て廊下の端にしなやかな三指を突いた。

［やぶちゃん注：●「伊藤燁子」大正三美人の一人で「筑紫の女王」とスキャンダラスに称

された歌人柳原白蓮（明治一八（一八八五）年～昭和四二（一九六二）年）のこと。柳原は旧姓で、本名は宮崎燁子。伊藤は再婚相手で九州の炭鉱王伊藤伝右衛門の姓。宮崎滔天の長男で『解放』元主筆であった社会運動家宮崎龍介との駈け落ち（白蓮事件）は大正一〇（一九二一）年十月二十日のことであるから、作品内時間（大正九年）で「伊藤」姓とするのは芸が細かいとは言える。」

「……あの……阪見はちよつと出かけておりますが……妾はアノ……富永でございますが……」

「あ、左様ですか。富永トミさんですね」

「ハイ……」といふうちに女将は如何にも心安さうに僕の前の板張りへペタリと坐つた。一種のスキ透つた、なまめかしい匂ひをムーツと放散させながら大きな瞳をゆるやかにパチパチさせた。

僕は固くなつた。

「司令部から來ました。……昨日お借りした……帳簿をお返し……しに來ました」

と一句一句石ころみたいな口調を並べた。

「まあ。御苦勞樣。いつでもよござんしたのに……濟みません。たしかに……お受取を差上げましせうか」

「どうぞ。しかし帳簿と書かないで下さい」

「……かしこまりました」

と云ふうちに女將は何かしらニツコリしながら風呂敷を解いた。中からは封印した新聞紙包みが出て來た。

女將の笑顏が一層、深くなつた。

「……では……あの新聞紙包み一つと書いて置きませうね」

「ハイ、結構です」

僕はヤット冷靜になつた。コンナ處でドギマギしてゐた自分の馬鹿さ加減を自覺すると同時に、最初から僕を呑んでかゝつてゐるらしい女將の感度に輕い反感をさへ感じた。

「かしこまりました……ホホ……」

と女將は笑ひ笑ひ立ち上つたが、その序に僕の腕章をチラリと見ると又、立ち止まつた。

「……あの……ちよつとお上りになりませんか。只今お受取をこしらへさせますから……」

さう云ふ女將の言葉が終るか終らないうちに、小娘が飛降りて來て、僕の靴にカバーを押し付けた。

「……や……これは……」

とばかり僕は又も躊躇してドギマギした。むろん平常の僕だつたら此處で九十九パーセントまで御免蒙る處であつたらう。上り口に腰をかけて待つて居ても用は足りるばかりでなく、たゞの當番卒でしかない僕が、公用のお使ひに來て上り込んだりするのは、非常に不自然な行動に違ひ無かつたのだから……。

ところが此時ばつかりはソンナ遠慮氣分や、不自然な感じがチツトもしなかつたから妙であつた。多分それは何か物言ひたげな女將の素振りが、最前から動きかけてゐた僕の、銀月そのものに對する探偵趣味を示唆つたせゐであつたらう。そのうちに一種の勇氣を奮ひ起した僕は、案内されるまにまに默つて左右を見まはしながら、タツタ今女將が出て來た應接間に這入つた。

［やぶちゃん注：●「示唆つた」底本にはルビがない。「全集」には『示唆つた』とルビする。 ●「案内されるまにまに」「全集」では「案内されるままに」であるが、実は言葉としては「ままに」が一見正しいように見えるものの、ここでは上村が「左右を見まはしながら」移動するのであってみれば、私はこの「まにまに」の方が実は正しいと感じる者である。］

それは實に立派な部屋であつた。何もかもがまだ一度も見た事のない風變りな、凝つた物であつたばかりでなく、ヒイヤリとするほど薄暗かつたので、最初のうちは何が何やら見當

がつかなかつたが、よく見るとそれは印度風と支那風を折衷した、夏冬兼用の應接間であつたやうに思ふ。低い緞子の椅子に坐ると彈力に乘せられて思はず背後の方へ引つくり返りさうになつた。トタンに頭の上のバンカアが香水を含んだ風をソヨソヨと煽り出したので僕は思はず赤面させられた。

［やぶちゃん注：●「緞子」繻子織り（経糸と緯糸の交わる点を少なくして布面に経糸或いは緯糸のみが現われるように織ったもの。布面に縦又は横の浮きが密に並んで光沢が生すると同時に肌触りもよい高級織布。）の一つ。経繻子の地にその裏織り組んだ緯繻子によって文様を浮き表わした光沢のある絹織物。室町中期に中国から渡来した。「どん」「す」は孰れも唐音である。　●「バンカア」底本も「全集」も濁音であるが、これは実は「パンカア」が正しいのではあるまいか？　英和辞典によれば、これはインド英語“punka”であって発音は【pʌŋkə】「パンカア」、マハラジャのイメージにありがちなあの、布製で天井から吊して綱で引いて扇ぐ例の大団扇、無論ここは電動のシーリング・ファン、天井から吊された麻布などで覆われた骨組みからなる大きな扇風機のことである。現在は航空機やバスなどで見かける、局所空調・換気用の、あの球面体の一部に吹出し口を設けて球面を回転させることによって吹出し方向を変えることの可能なスポット形吹出し口の一種を“punkah louver”（パンカールーバー）と呼んでいる。］

　すると又、入口の扉が音もなく開ゐたから、モウ受取が出來たのかと思つて腰を浮かしかけると豈計らんや大きな銀盆の上に色々な抓み肴と、果物と、麥酒を載せたものを、白い帽子に白い覆面の支那人が二の腕も露はに抱へ込んで來たのであつた。

　これにはイヨイヨ驚いた。いくら哈爾賓一流の銀月でもアンマリ手廻しが良過ぎる。況んや普通の兵卒がお使ひに來たのに對して此のもてなしは少々大袈裟過ぎる……と内心疑はぬでも無かつたが、そんな考へをめぐらす隙もなく這入つて來た女將は、螺鈿の丸卓子の向うにイソイソと腰をかけた。水蒸氣に曇つた麥酒のコツプをすゝめながら極めて自然に話し

かけた。

「……どうもお待ち遠さま。只今阪見を呼んで居りますから……お一ついかゞ……」

「濟みません」

「どう致しまして、お國の爲に遠いところからお出でになつてねえ。失禮ですけど、お國はやはり〇〇の方で」

「あつ。どうして解ります」

「ホヽ。お言葉の調子でわかりますわ。何時頃から司令部においでになりまして……」

「八月からです」

「ホヽヽヽヽヽ……」

「御苦勞さまですわねえ。これから又ズツト哈爾賓にいらつしやるんですつてね」

「ハア……どうして御存じですか」

女將は生娘のやうに顏を染めて笑つた。

僕はその笑ひ聲の前で身體が縮まるやうな氣がした。こんな風に自由自在に顏を染め得る女が、如何に恐ろしい存在であるかを、僕は知り過ぎるくらゐ知つてゐた。のみならず此の女將の云葉がサツキから非常なスピードで、うち解けた合の子語に變化してゆくに連れて、何かしら僕に重大な事を尋ね度がつてゐるらしい氣はひを感じてゐたが、果して……果してと氣が付くと、油斷なく腹構へをしながら冷たいビールをグツと飲んだ。

[やぶちゃん注:●「合の子語」女将が、妙に仄かに艶めいて親しげな感じで、何か独特の、意味深長の響きを以って語りかけてくることを、かく言ったものであろう。]

「ホヽヽヽヽ。そりやあ存じて居りますわ。商賣の方と關係が御座いますからね。今、日本軍の方が引上げて行かれたら、此店はモウとても……ねえ……さうでせう……」

僕は深くうなづいた。成る程と氣が付いたので又も赤面した。

「……でもねえ。露西亞人仲間に云はせると、日本軍は來年の春になつたら立退くにきまつ

てゐるつて……さう云ふのですよ」

「露西亜人ってオスロフがですか」

今度は女將の方が驚いたらしい。又も、ちよつと顔を赤らめながら衣紋をつくろつた。

「ええ。さうなんです。公然の祕密だつて……さう云っておりますけれどね……」

「そんな馬鹿な事は無いでせう。今更日本軍が引上げるなんて……」

「……ねえ……さうでせう。兵營の設計もチヤント出來てゐるし、飛行機の着陸場も松花江の近くのどこかに買つて在るつて云ふお話でせう」

「それは誰が話したのですか」

「ホヽヽヽヽ。でもほんたうでせう」

「えゝ。僕もその圖面つて云ふのを曹長に見せて貰つたんですが……若しや星黑さんが話したんぢや無いでせうか……こゝで……」

此の質問は僕としては餘りに不謹愼であつた。僕の探偵的興味が如何に高潮してゐたとは云へ、まだ女將が知つてゐないかも知れない……と同時に知つてゐるとすれば尚更危險な十五萬圓事件の急所を、曝露したも同樣な質問をこゝで發したのは、あまりに無鐵砲であつた。

……と直ぐに氣が付いたがモウ遲かつた。

……女將は僕の言葉が終らぬうちにサツと顏色を變へた。眼をマン丸にして僕の顏を凝視したが、間もなく大きな瞬きを二つ三つしたと思ふと、見る見るうつむき勝ちになつて、左右の耳朶をポツと染めた。

「えゝ。さうなんです。ですけど此の事ばかりは後生ですから內密にしといて下さいましね。ドンナお禮でも致しますから……星黑さんばかりぢやありません……妾を……可哀想そうと思し召して……」

女將は顏も得上げないまま螺鈿の卓子の上に石竹色の指を並べた。前髮が卓子の平面にクツつく程お辭儀をしたが、その神妙らしい婀娜々々しい技巧には又も舌を捲いて感心させ

られた。

［やぶちゃん注：●「女將（ぢよしやう）」ここまで「おかみ」であったものの特異点のルビである。この後は「おかみ」にまた戻る。但し、この時代のルビは校正係の担当範囲であったから、単なる誤植の可能性も高いとは言える。しかし、話柄の流れからは確かにここは一種の特異点ではあるのである。●「石竹色」ナデシコ科の植物セキチク（ナデシコ目ナデシコ科ナデシコ属セキチク *Dianthus chinensis*）花のような淡い赤色。ウィキの「石竹色」によれば、『セキチクは中国原産種でおもに観賞用に栽培され、その花は赤や白やそれらの色を組み合わせた模様など多くの種類が存在するが、色名としては桃色に近い花の色のことをさす。撫子色、ピンクとほぼ同じ色合いであり、同様の語源を持つ。英語ではチャイニーズピンク（**Chinese pink**）という』とある。この色である。］

しかし幾分、麥酒（ビール）が廻つてゐたせゐでもあつたらう。愚（おろか）にも僕は女將（おかみ）のかうしたデリケートな技巧を、さほど重大に考へなかつた。

（後から思ひ合はせると此の時に女將は、何處かに隱して在つた呼鈴（よびりん）の釦（ボタン）を押したに違ひないであつたが、それさへも此時には氣づかなかつた）たゞ相手に事件の内容を感付かせないまま圖星（づぼし）？　を指し得たもの……とばかり考へてゐたので、多少の誇りに滿たされながら輕く頭を下げた樣に思ふ。

「……ハハハ……心配しなくともいゝですよ。僕等の眼にはゐる位（くらゐ）のことなら祕密でも何でも無いにきまつて居ますからね。……しかし星黑（ほしぐろ）さんはショツチウ此方（こちら）へ來ましたか」

「えゝ。ほんの時々ですけど……」

「十梨（となし）君と一緒にですか」

「……」

女將は返事をしなかつた。ちやうどその時に最前の小娘が扉（ドア）から覗いたので、女將は何かしらうなづきながら立上つた。

「……あの……ちよつと失禮を……」

といふうちにパタパタと逃げるやうな足音が、重たい扉で遮られてしまつた。

僕はホンノリとした酒を兩手で押へた。今更のやうにフハフハする椅子の中に反りかへつてノウノウと伸びを一つした。久し振りに飲んだせいか麥酒が恐ろしく利いてしまつて、何も考へる事が出來なくなつた。モウこの上に女將から事件の眞相を探り出す方法は無いものかと焦躁りながらも、首のつけ根を通る動脈の音がゾツキゾツキと鳴るのを聞いてゐるばかりであつた。あんまり醉つたので若しや麻醉をかけられたんぢや無いか……なぞと馬鹿々々しい事を考へてゐるうちに何時の間にかホントウに眠り込んでしまつたらしい。

扉の開いた音で眼を醒ますと、女將がお盆の上に紙布を載せながらニコニコしてはいつて來た。

「どうもお待たせしまして……阪見が先から先に廻つて居たものですから……どうぞ司令部の方によろしく……」

僕も慌てゝ眼をコスリながら跳ね起きた。

「ヤ……どうも……」

と頭を下げながら腕時計を見ると三時半近くになつてゐる。先刻から二時間餘りも睡つてゐた譯だ。

「ホヽヽヽヽ御迷惑でしたわねえ。司令部へお電話して置きませうか。阪見が居ないので、お引止めしましたわけを……」

「ハア。どうか……イヤ。司令部から電話が掛つたら、さう云つといて下さい。それでいゝです……」

と云つて女將が差出す紙包みを極力押し除けながら靴カバーを除るなり逃げる樣に表へ飛出した。

……イヤ大失敗々々。捜索本部へ歸つたら曹長に大眼玉を喰ふかも知れないぞ。酒と女に

心許すな……か。イヤ大失敗々々……。」

［やぶちゃん注：●二箇所の「大失敗々々」の「々」はママ。「全集」では孰れも『大失敗、大失敗』となっている。］

云ふ中にも僕は狼狽して帶皮を締め直した。

「……失禮ですけど……これはお小遣ひに……」

と微苦笑しいしい麥酒の醉ひを醒ますべく帽子を脱いでは汗を拭き拭きした。

處がこの時に演じてゐた僕の失敗はソンナ淺墓なものではなかつた。銀月の應接間でウツカリ洩らした僕の一言が、それからタワイもなく居眠りしてゐる間に驚くべき事件を誘發して、東亞の政局の中心にグングンと展開してゐた……それを夢にも思ひ知らないまゝ西日にさゆらぐ楡並木の下をセツセと司令部の方向に急いでゐるのであつた。

僕はセントランの階段を大急ぎで二階へ駈け上つた。今一度帽子を冠り直しながら、捜索本部の扉をノツクしてみたが誰も返事をしない。

僕はチヨツト變に思つた。

思ひ切つて扉を開いてみると誰も居ない。……オヤ……と思つて司令部に引返してみるとここにはチヤント鍵がかかつて居る。鍵穴へ耳を當ててみたがシイーンとしてゐて咳拂ひ一つ聞えない。又……オヤと思はせられた。平生より一時間以上早く引けて居る。

三階へ駈け上つてみると將校以下、下士官の部屋まで一つ殘らずガラ空きになつてゐた。

僕はその時に何かしら胸騒ぎがした。星黒主計が捕まつたにしては少し樣子が變だが……もしかすると夫れ以上の大事件では無いかと氣が付いたので、そのまゝ一階へ駈け降りて、玄關の入口に立つてゐる〇〇連隊の歩哨に樣子を問ひ訊してみると、歩哨も何かしら不安を感じてゐるらしく、妙な顔をしながら眼をパチパチさせた。

「……イヤ。俺は何も知らない。しかし司令部の樣子は、すこし可怪しい樣だ。……何でも俺の前の前の一時の歩哨が立つて居るうちに此の箱（歩哨の背後二三歩の街路に面した壁に

取りつけて在るセントラン専用の郵便受箱）の中から當番係の上等兵が取出した手紙の中に、一通妙なものが混つてゐた。赤い露西亞活字で裏書した、白い大きな西洋封筒で、郵便切手が一枚も貼つて無いのに郵税不足にもなつてゐないので上等兵は歩哨に見せて「何だらう」……と話し合つた。多分ゾロゾロ通つてゐる毛唐の中の一人が、歩哨の氣づかないうちに投げ込んで行つたものだらう。

……ところで上等兵に洋文字は苦手だつたらしい。階段の上を通りかかつた雇人頭のコサツク軍曹を、歩哨の處へ呼び下して讀んで貰ふと「日本軍司令部御中」とだけ書いて發信人の名前が書いて無いことがわかつた。すると又ちやうど其處へ、何處からか歸つて來た憲兵中尉が二人の背後から「何だ」と云つて覗き込んだので、二人は慌てて敬禮した序に、その封筒を見せたものださうな。

……何氣なく受取つた憲兵中尉はスラスラと上書を讀みながら、「フン。又何かの廣告だらう」と云ひ云ひ無茶作に封を切つたさうだ。ところが、その中に這入つてゐる青い露西亞文字の奥の方をチラリと見ると中尉の顔色が少々變テコになつて來た。慌ててその手紙を握り潰したまゝ、默つて二階に駈け上つてしまつたさうだが、それから急傳令が二三人どこかへ飛んだと思ふと、上等兵を殘した當番卒の全部が召集された。さうしてその當番卒と一緒に、何かしら書類の包みらしいのを手に手に持つた司令部の連中が、愉快さうに笑つてゐる旅團參謀を先に立てながら出て行つた……といふ話だが、詳しい事情は知らない。みんな「何だらう。何だらう」と不思議がつてはゐるが、未だにその手紙の正體は判然らずに居る。しかし、そのうちに當番連中が歸つて來たらアラカタ様子がわかるだらう。

［やぶちゃん注：●「旅團參謀」「全集」では『旅団副官』となっている。変えた意味は不明。識者の御教授を乞う。］

……そのほかに變つた事は一つも聞かない。……ウン……それからチヨツとした事だけれども、その後で立つた二時の歩哨が俺と交代するヂキ前の事だつたと云ふ。停車場の方か

らこつちへ曲り込んで來た一臺の立派なタクシーが、向うの辻（キタイスカヤとヤムスカヤの交會點）の眞中で故障を起してしまつた。猛烈なプロペラみたいな爆音と一緒に、眞白な煙を吹き出してヘタバツたので、通りがゝりの人が皆立ち止まつて見物した。するとその中から旅行服、（狩獵服の見誤り？）に黑のハンチングを冠つた背の高い紳士が一人、片手に新聞を持つて出て來たが、それと一緒に見物人の中で帽子を脱ぐ者がチラホラ居たので、變に思つてよく見ると、それは久しく姿を見せなかつたオスロフだつた。……オスロフはニコニコ顏で答禮しながら運轉手に金をやると、自分で鞄を提げて、何か話しかけようとする連中を、手を振つて追ひ退け追ひ退けサツサとセントラルへ這入つて來た。……すると又、そいつを四階の窓から見て居たらしい、眞白にお化粧をした嬶と娘が出迎へて、歩哨の前で飛び付いたり齧り付いたり、長い長いキツスをしたりしながら引込んで行つたので、かなりアテられたといふ話だ。しかし往來に立つてゐた連中は、それを笑ひもせずにヂイツと心配さうな顏をして見送つてゐたので歩哨は妙な氣がしたといふが、オスロフはソレキリ出て來ない樣だ……捜索本部の連中も最前から一人も降りて來ないのだから、みんな居ると思つて居たが、何處へ行つたんだらう。

［やぶちゃん注：●「ヤムスカヤ」は最初に司令部の位置の解説にも出てくるのであるがよく分からない。前に紹介した個人サイト「里村欣三ホームページ」の里村の「放浪病者の手記」についての評論「満州小考」にある地図を見ると、キタイスカヤ街は南の端で西北から斜めに走るより大きな街路にぶつかっているのが分かる。最初に上村は「司令部に宛てられた家はキタイスカヤ大通の東南端に近い、ヤムスカヤ街の角に立つてゐる」と記しているから、これはこの交差点よりキタイスカヤ街を入った一本目の横丁の角ということになろうか（グーグル・マップで推定位置を示す）。なお、この司令部は前に示したサイト「みに・ミーの部屋」の「満州写真館　ハルピン　2」に出る、同じキタイスカヤ大通（但し、位置はもっと松花江寄り）にあった見晴らしのよかった松浦洋行の建物がどうもモデルであるよう

な感じがする。下から八枚目のそれを見ると「セントラン」っぽい「中央ホテル」の看板も見える。　●「セントラル」一貫して「セントラン」であるから、これは誤字か誤植であろう。「全集」では「セントラン」となっている。」

……當番係の上等兵が、もちつと前に司令部附の少尉殿から呼ばれてゐたさうだが、何か知つてゐるかも知れない。聞いてみたまへ。君も宿なしになつちや困るだらう。ハハハ……しかし歩哨の守則（警戒上の注意事項）は平常の通りだから大した事件ぢやないかも知れないよ」

……と答へながらモウ一度眼をパチパチさせるばかりであつた。だから僕も仕方なしに要領を得ないまゝ眼をパチパチさせた。さうして今さつき入りがけに歩哨に見せるのを忘れてゐた「公用外出證」を出して見せた……。

……僕は此處でもウツカリしてゐたのだ。

僕がもし此時に、今少し注意深く其處いらを見まはしたら、僕の背後の階段の陰に、此家の雇人たちの不安相な眼が黑や、青や、茶色を取りまぜて、憂鬱に光つてゐるのを發見したであらう。……表の往來にひしめくキタイスカヤ特有の夕暮の人出が妙に減少して向家のカボトキン百貨店の黃金色の大扉が、今日に限つてピツタリと閉まつてゐるのに氣が付いたであらう……更にモツト以前に歸つて、僕が銀月を出た瞬間から、もう少し注意深く往來を見まはして來たら、此のキタイスカヤを中心とする大通りの辻々に、平服を着た、又は勞働者や支那人に變裝した日本の軍人が三々伍々と配置されてゐて、その連中の一人が片手を擧げると同時に、辻々が機關銃で封鎖されるといふ、オキマリの非常警戒の準備が出來て居ることを看破したであらう。……同時に、司令部が立退いたのは萬一の場合を警戒したものである事を察し得たであらう。……さうして司令部付の當番卒の中でタツタ一人その事情を知つて居殘つてゐる上等兵が、わざと寢臺の上に引つくり返つて眠つたふりをしてゐるのに氣付いたであらう。

しかし遲刻の方にばかり氣を取られてゐた僕は、そんな重大な形勢をミジンも感づかなかつた。それよりも捜索本部が留守になつたお蔭で、豫期してゐた曹長の大眼玉とキンキン聲にぶつからなかつたのを勿怪の幸にして、帶劍を地下室に解き棄てると、何喰はぬ顏で、空つぽの捜索本部に歸つて來たのは吾ながらおぞましい限りであつた。

僕はそれから捜索本部の机の上をグルグルと見てまはつた。拳銃と帶劍と帽子がなくなつてゐる巨大な帽子掛を見上げながら、取調に關係した書類が、どこかに在りはしないかと探しまわつたが、そんな物は何處に片づけられたものか影も形もなかつた。たゞ市内で賣つてゐる、いゝ加減な案内圖だの、洋食屋の受取だの、二三枚の新聞紙が散らばつてゐる切りであつた。

僕はガツカリして入口の横の机に歸つた。その中に連中が歸つて來たら事情が判明するだらうと諦めを付けると、机の上に盜杖を突ゐたまゝ天下泰平の大欠伸を一つした。麥酒の醉ひが醒めかけたせゐであつたらう。女將の媚めかしい眼付だの、薄い唇だの、日本風の襟化粧だの、その上に乘つかつてゐる丸髷の恰好だのを考へてゐるうちに又もグウグウと机の上に寢込んでしまつた。

捜索本部はトウトウ日暮まで歸つて來なかつた。だから僕も眼を醒ますと、すぐにキチンと掃除をして室内を片付けてしまつた。それから地下室に歸つて、襯衣一枚のまゝタツタ一人で夕食を濟ましたが、サテ外出しようか……どう仕様かと思ひ思ひ向うの隅を見ると、僕の外出許可證を預つてゐる上等兵が、書間の彈藥盒を解くのも忘れて寢臺の上に横向きになつてゐる。スウスウと寢息を立てゝ居る氣はひである。ほかの當番連中もまだ歸つて來ないらしく銃架がガラ空きになつて居る。仕方が無いから襯衣一枚の上に帽子を冠つて、スリツパ穿きのまゝ裏口の鐵梯子傳ひに、新しい棕櫚のマツトを踏み踏み、五階の屋上庭園に上つて行つた。これは規則違反の服裝を三階の上官連中に見つからない用心であつた。サツキの

歩哨の話を一寝入りした間にスツカリ忘れてしまつてゐた僕は、習慣的に三階の連中が五人や十人は居るものと思ひ込んで居たのだから……。

［やぶちゃん注：●「弾薬盒」は小銃の弾薬を携帯するための小型の箱（「盒」は蓋附きの容器の意）のこと。通常、陸軍歩兵用は前盒二箇・後盒一箇を帯革に通して携帯した。ウィキの「弾薬盒」を参照されたい。　●「裏口の鐵梯子傳ひに、新しい棕櫚のマツトを踏み踏み五階の屋上庭園に上つて行つた。これは規則違反の服装を三階の上官連中に見つからない用心であつた」「全集」では（恣意的に正仮名正字化した）『裏口の鐵梯子傳ひに迂回して、新しい棕櫚のマツトを踏み踏み、五階の屋上庭園に上つて行つた。この迂回は規則違反の服装を三階の上官連中に見つからない用心であつた』と加筆している。］

屋上に來てみると、黑タイルを張詰めた平面の處々に新しく水を零した痕跡がある。その片端に、濡れたままの如露とバケツが置きつ放しにして在るところを見ると、ニーナが水を遣りかけたまゝ何處へか行つたものであらう。往來に面した木製の棚の上に手入れを濟ましたらしい二三十の鉢が、中途切れしたまゝ三段に並んでゐる。この鉢の並び方が同じになつてゐた事は今までに一度もないので、大きいのや小さいのが毎日のやうに、取換へ引つかへ置き直されて居る事を僕はズツと前から氣づいてゐた。しかもそれが向家の百貨店の時計臺以外に相手のない、高い五階の屋上だから、考へてみると隨分御苦勞千萬な、無意味な趣味ではあつた。

……僕は實を云ふと、此時この屋上に仙人掌を見に來たのでは無かつた。例によつて、哈爾賓を取り圍む大平原の眺望を見廻しながら深呼吸でもして遣らう……序に銀月の方向を眺めて、十五萬圓事件の解決法でも考へて遣らうか……と云つた樣な、至極ノンビリした氣持ちに驅られて上つて來たのであつたが、しかし此時の僕の頭は最前の麥酒の醉醒めと、思ひがけなく有付けた充分な午睡のお蔭で、いつもよりもズツと澄み切つてゐたのであらう。最初は何の氣なしに見て居た此仙人掌の大行列が、いつの間にか世にも不思議な行列に見え

て來たのであつた。

僕は念の爲に、仙人掌の棚の前を、往來に向つた甃の端まで歩いて來た。その蹶躓に在る古風な鐵柵に齒まつて出來る限り頭を低くしてみたが、此の仙人掌の棚を見る場所はどう見まはしても一階低い向家のカボトキンの時計臺しか無かつた。そんな位置に棚を置いた理由が、どうしても解らないのであつた。

僕はだんだん眞劍になつて來た。今日が今日まで斯樣な不思議な事實にドウして氣がつかなかつたんだらうと思ひ始めた。

僕は何でもカンでも此理由を研究してみたくなつた。これも僕の所謂「退屈魔」がさせた氣まぐれに相違なかつたが、どうせ夜は閑散なんだからこの薄明りを利用して一つ研究して遣れ……といふ氣になつてタイルの中央に並んでゐる鉢を四百五十幾個かまで數へ上げた。それから其鉢の一つ一つに立てゝ在る白塗の番號札を一から二、二から三と順々紅に拾ひ探しながら數へ上げてみると又、奇妙な事實を發見した。百以下の番號が二、三十缺けてゐる上に同じ番號の札がいくつも並んでゐる。二百四十二が四ツ、三百八十五が三ツといふ風に……。しかも夫れが同一種類の仙人掌に立てたもので無い事は一目瞭然なのだ。何でもない頭で見たら、コンナ事實は、此札を立てたニーナの氣まぐれとしか考へられなかつたであらう。又は學者か何かの頭で考へたら、斯樣した現象は、ニーナが先天的に數字に對する觀念を持たない、一種の痴呆患者か何かと思へたかも知れないが、しかし此時の僕の頭にはドウシテドウシテ……身體中がシインとなる程の大發見と思へたのであつた。

……すぐに下から紙と鉛筆を取つて來て、この番號の缺けたところと重複したところとを順序よく書き並べてみようか知らん……序に棚の上の行列についてゐる番號札を其の順序に書き並べて、それが何かの暗號通信になつて居るか何樣かを突止めて遣らうか……それとも向家の時計臺から此暗號を讀み取つて居るであらう何者かの正體を探り出すのが先決問題か……

……なぞと色々に考へ直しながら、暗くなつて行く屋上をソロソロと行つたり來たりしてゐた。遙かに西北、松花江の對岸から、大鐵橋を覆うて襲來する濃厚雄大な霧の渦巻を振り返り振り返り立止まつたりしてゐた。

ところが其の中に間もなく、其霧の大軍がグングン迫つて來さうに見えたので僕はトウトウ決心した。とりあへず番號だけ寫しておく積りで、裏の鐵梯子の方へ鋭角の廻れ右をすると、それと殆んど同時に、本階段の方向から不意に、慌しげな靴音が駈け上つて來て、思ひがけない軍裝の憲兵上等兵が眼の前にパツタリと立ちはだかつたのであつた。

僕はギヨツとして一歩退いた。襯衣一枚のスリツパ穿きで屋上に出る事は、風紀上嚴禁してあつたので、扨は見つかつたかと思ひながら、慌てゝ不動の姿勢を執つて敬禮した。

ところが妙なことに、その憲兵も何かしら面喰つてゐるらしかつた。僕の姿を夕闇の中に認めると、ハツとしたらしく、軍刀を摑んで立ち止まつた。眼を据えて僕の顏を見たが、それが顏なじみの當番卒だつた事がわかるとホツと安心したらしい。簡單に敬禮を返しながら其處いらを探るやうに見廻して居る中に、又も僕の顏に瞳を据ゑた。

「オイ當番。此處に誰か來はしなかつたか」

「ハッ。誰も來ません」

と云ひ云ひ僕は敬禮を續けてゐた。

「……よし。手を下せ。……ニーナが來はしなかつたか……此の家の娘だ」

僕は何かしらドキンとしながら手を下した。

「イヤ。誰も來ません」

「フーン。お前は何時から此處に居たんか」

といふ中に、憲兵上等兵はモウ一度、疑ひ深い瞳で屋上を睨みまはした。

「ハッ。上村は一時間ばかり前から此處を散歩して居りました」

「フーム。たしかに誰も來なかつたな」

「ハッ。左様であります」

憲兵は依然として狼狽してゐるらしく、又も大急ぎで本階段へ降りかけたが、途中でチョツと立止まつて振り返ると嚴重な口調で云つた。

「誰か來たらすぐに知らせよ。俺は四階の舞踏室の前にいるから……ええか……」

「ハッ。四階の舞踏室……」

と僕が復誦し終らないうちに軍刀を押へた憲兵のうしろ姿が、階段を跳ね上り跳ね上り下の方へ消えて行つた。

［やぶちゃん注：●以下、底本では一行空き。］

僕は何が何やら譯がわからなくなつた。

居ないとばかり思ひ込んでゐた憲兵が、突然に何處からか湧き出して來て、さうして又何處へ消えて行つたのか……何の爲にニーナを探してゐるのか……第一彼らが用事のあり相（さう）にもない、閉め切つたままの舞踏室の前で、今まで何をしてゐたのか……といふことすらサツパリ見當が付かなかつた。……否。見當が付かなかつたと云ふよりも氣が付かなかつたと説明した方がホンタウであつたらう……。

それは無論、僕の頭が「暗號問題」の一方にばかり集中し過ぎてゐたせいに違ひ無いと思ふ。さもなければ眼の前の仙人掌（サボテン）の不思議と、眼の色を變へてニーナを探してゐる憲兵を結び付けて考へる位（くらゐ）の頭の働きは誰でも持つてゐる筈だつたから。さうして同時に、さうした二つの事實の交錯が生み出す簡單明瞭なクロスワードに氣付いて、肝を潰すか、飛び上るかする位（くらゐ）の藝當は、誰（たれ）でも出來る筈だつたのだから……。

［やぶちゃん注：●「誰（たれ）でも」特異点今まではルビは一貫して「だれ」。老婆心乍ら言い添えておくと、「たれ」の読みは強調形として普通に用いる。個人的には私は清音の「たれ」が好きである。］

ところが此時に限つて僕の頭はそんな方向にチツトも轉換しなかつた。ちやうど下へ降りようとする出鼻を挫かれた形で、呆然と突立つたまま憲兵の背面姿を呑み込んだ暗い、四角い階段の口を凝視して居るばかりであつたが、やがて又、吾に歸ると、急に氣拔けした樣な深いタメ息を一つした。柄にもない大きな難問題に、夢中になりかけてゐた僕自身をヤツト發見したやうな氣がしたので……。

……馬鹿々々……俺は何と云ふ馬鹿だつたらう。俺はタカの知れた當番の一等卒ぢやないか。特務機關の參謀連中が考へるやうな仕事を、手ブラの俺が思ひ付いたつて、誰も相手にして呉れない事は解り切つて居るぢやないか。俺はコンナ仕事に頭を突込みに出て來たのぢや無かつたではないか……。

［やぶちゃん注：●「俺はコンナ仕事に頭を突込みに出て來たのぢやなかつたではないか」「全集」では（恣意的正字正仮名で示した）『俺はコンナ仕事に頭を突込みにこの展望臺へ出て來たのぢや無かつたではないか』と加筆している。］

……第一いくら俺が暗號を研究しようと思つたつて、萬一それが露西亞文字で出來てゐたらドウするんだ。英語しか讀めない俺には到底、解讀出來ないにきまつてゐるぢやないか。……さうかと云つて出鱈目同樣な數字の排列を、これが暗號で御座いと云つて捜索本部に擔ぎ込んでも果して感心して貰へるかどうか。……タカの知れた二等卒の俺が、屋上の仙人掌と、十五萬圓事件との間に重大な關係が在るなぞと主張しようものなら物笑ひの種になる位が落ちだらう。……又、果してソンナ重大な暗示が、この仙人掌の排列に含まれてゐるか居ないかも、よく考へてみると大きな疑問と云つていゝのだ……。

……あぶないあぶない。今日はよつぽどドウカしてゐるらしいぞ、先刻から飛んでもない大それた事ばかり考へてゐるやうだ。コンナ時に屋上から飛び降りてみたくなるのぢやないか……ケンノンケンノン……ソロソロ下へ降りて行くかな……。

氣の弱い僕はソンナ風に考へ直しながら、モウ一度ホーツと深呼吸をした。タツタ今憲兵

が降りて行つた本階段の前に立止つて、中央の煙突の附根に、こればかりは動かされた事のない等身大の仙人掌（サボテン）の藥の間に暮れ殘る、黄色い花をジイツと凝視してゐるうちにトウトウ眞暗になつてしまつた……と思ふうちに向家（むかひや）のカボトキンの時計臺の中へポツカリと燈が入つた。それがいつもよりも三時間以上遲れた九時半前後であつたと記憶してゐる。

その時であつた。

不意に僕の背後で、又もや何かしら人の來る氣はいがした……と思ふ間もなく、僕は夢中になつて右手を振りまはした。

僕は喧嘩なぞした事は一度も無い。銃劍術でも駈足（かけあし）でも、中隊一番の弱蟲であつたが、この時は殆んど反射的な動作であつたらう。手應へのあつた黒い影を引つ毟んで、思ひ切り甃（タイル）の上にタヽキつけて捻ぢ伏せると、間もなくモジヤモジヤした髪の毛が左右の指に搦み付いて居るのに氣が付いた。

相手が女だとわかると、弱蟲の僕は急に氣が強くなつた。卑怯な性格だが事實だから仕方が無い。何だか劍劇の親玉みたやうな氣持になつて、肉付きのいゝ女の右手をグイグイと背後に捻ぢまはしながら、指の間にシツカリと握つてゐる露西亞式の短劍を無理矢理に毟（も）ぎ取つてしまつた。そいつを口に咬（くは）へて片膝で背中をグイグイと押へながら、左手でモジヤモジヤした髪毛を掴んで、首から上を仰向（あふむ）かせてみると眞白にお化粧をした顔だ。眉毛の長い……眼と鼻の間の狹い……オスロフの令孃ニーナに相違ないのだ。

僕は仰天した。實際面喰（めんくら）つた。

早くも二人を包みかゝつた霧の影をキヨロキヨロと見まはした……「一體、何だつてコンナ事を」……と云はうとしたが、生憎、一夜漬の軍用露西亞語がなかなか急に思ひ出せない。確かに冷靜を失つて居たらしい。仕方がないからニーナにも多少わかる筈の日本語で、

「……靜かになさい……」

と云ふと、組敷（くみし）かれたまゝのニーナが案外にハツキリとうなづいた。そこで僕は少しばか

り手を緩めて、霧の中に立たせて遣らうとした……が、その僅かな隙(すき)を狙つたニーナは突然にビツクリする程の力を出して跳ね起きた。兩手を顔に當てたまゝ、濃い霧の中に身を飜して消え込んだ。階段を飛降りて行く跣足(はだし)の足音だけが耳に殘つた。

［やぶちゃん注：●以下、一行空き。］

……開(あ)いた口が塞がらないと云ふのは此時の僕の恰好であつたらう。ちよつとの間に讐敵(かたき)同志と思へる日本の憲兵と露西亞娘が、互ひ違ひに飛び出して來た……と思ふうちに、その二人を又も鮮やかに吸ひ込んでしまつた階段の口を、手品に引つかゝつた阿呆(あほう)みたやうに見下ろしながら、長いこと突立つてゐた様に思ふ……が、そのうちにフト氣が付いてみると、僕は右の手にニーナが落して行つた短劍をシツカリと握つて居るのであつた。

……僕はハツとした。トタンに氣持がシヤンとなつた様に思ふ。

向家(むかひ)の時計臺から、霧に沁み込んで來る光線に透かしてみると、血はついていないようである。身體(からだ)をゆすぶつて見ても別に怪我はしてゐない様であるが、其代りにゾクゾクと寒氣がして來た。日が暮れると同時に急速度で寒くなるのが此邊(こゝいら)の大陸氣候だ。北の方から霧が來ると、尚更さうだ。

その肌寒い暗黑の中に突立つてニーナの短劍をヒイヤリと凝視して居るうちに僕は、色んな事が次第次第にわかつて來る様に思つた。今の今まで逃げ出さうと思つてゐた恐ろしい問題の渦の中へ、正反對にグングン吸ひ込まれかけてゐる僕自身を發見したやうに思つた。さうして思はずブルブルと身ぶるひをしたのであつた。

……ニーナは僕が、此の仙人掌(サボテン)の祕密を看破(みやぶ)つた……もしくほ看破りかけて居るものと思ひ込んで襲撃したものに違ひ無い。此の仙人掌(サボテン)の中に、或る恐ろしい祕密が匿されて居ることは最早(もはや)、疑ふ餘地が無いのだから……。

……しかも……もし左樣とすればニーナの家族は、此の司令部の上の四階に陣取つて日本軍最高幹部の嚴重な監視を受けながら、何處かと内通してゐるに違ひない事が考へられる。さうして其の内通の相手と云へば、目下の處、赤軍以外に在り得ない事が、あらゆる方面から推測されるではないか。

……さうして又、さうとすれば、星黑(ほしぐろ)、十梨(となし)の兩人の非國民、非軍人的行爲と、オスロフの陰謀的性格と、その双方から色々な祕密を聞いてゐるらしい銀月の女將(おかみ)との間に、何らかの三角關係式(しき)の絲(いと)の引つぱり合ひが存在して居ないとはドウして云へよう……此三人の間を疑問の線で結び付けて見るのは此場合たしかに自然である。僕の知つてゐる限り此三人の間以外(あひだ)に疑問符(クエスチヨンマーク)を置く處は、哈爾賓(ハルピン)市中に無いのだから……。

［やぶちゃん注：●「此三人の間を疑問の線で結び付けて見るのは」底本は「此三人の間を疑問の線を結び付けて見るのは」。「全集」で訂した。］

……捜索本部はむろん、夢にもソンナ方向へ視線を向け得ないで居るのだ。世界中にタツタ一人俺だけが氣づいて居る事を彼等は……と言つてもまだ正體がハツキリしてゐないのだが……少なくともニーナだけはチヤンと看破して居るのだ。だから俺をタツタ一突で沈默させようとしたのだ。

……俺は自分でも氣付かないうちに、今までの興味本位とは全然正反對の意味で、是非とも此事件を解決しなければならない立場に追ひ詰められてしまつて居る事がタツタ今判つたのだ……。

……ニーナの一擊によつて……。

僕は斯うした事實に氣がついて來るに連れて全身を縮み上らせた。短劍を握つたまゝ其所いらの暗黑を見廻した。今にも何處からかピシリピシリとニツケル彈丸が飛んで來さうな氣がした。諸に聞いた名探偵の勇氣なぞは思ひも寄らない。ただゾクゾクと襲ひかゝつて來る強迫觀念を一生懸命に我慢しながら、出來る限り神經を押しつけ押しつけ本階段を降りて行つたが、その途中から又氣が付いたので、スリツパの足音を忍ばせて、用心しいしいソロソロと四階の廊下へ降りた。なほも息を殺しながら、ニーナの家族の部屋の前に來て見ると、鍵の掛つた扉の中は眞暗で、話聲一つ聞えない。ニーナが逃込んだものかドウかすら判然としないのだ。

……をかしいな。こんなに早く寢る筈は無いが。それとも居ないのかな……。

と氣が付くと、僕は又も一つの不思議に行當つた氣持になつてドキンとした。刹那的に……今まで考へてゐた推理や想像は、みんな間違つて居たのぢや無いか知らん……とも考へて少しばかり氣を弛めかけて居た樣にも思ふ……が、さう思ひ思ひフト向うを見ると、はるか向うの廊下の外れに在る大舞踏室に、カンカンと燈火が付いてゐる樣子である。ピツタリと閉された緋色のカーテンの隙間から、血のような光の曲線が一筋、微かに流れ出して居るのが見える。

［やぶちゃん注：●「曲線」「全集」は『直線』。］

……僕は其時に驚いたか、怪しんだか記憶しない。その神祕めかしい赤い、微かな光線をドンナ性質の光線と判斷したかすら思ひ出せない。氣が付いた時には、其の光線の洩れてゐる緋色の窓掛の隙間にピツタリと眼を當てゝ、二重に卸された分厚い硝子越しに見える室内の光景を一心に見守つて居た。

窓掛の隙間から辛うじて横筋違ひに見える、右手の壁のズツト上の方に、巨大な風車の在る風景畫がかかつて居る。筆者は誰だかわからないが、多分、和蘭あたりの古典派であらう。その下の赤と、黄金色の更紗模様の壁に向つて三個の廻轉椅子が並んで居て、その上に白い布で眼隱しをされた人間が一人宛、やはり壁に向つて腰をかけて居る。その人間の風采をよく見ると中央が茶革製の狩獵服を着た鬚武者の巨男で、その右手が白髪頭のお婆さん。それから巨男の左手が瘠せこけた鷲鼻の貴婦人……オスロフ夫婦とその母親に間違ひないのだ。

その中で毅然として居るのはオスロフだけであつた。あとは射たれたのか氣絶したのかわからないが、死んだやうにグツタリとなつたまゝ椅子に縛り付けられてゐた。露西亞では死刑になる事を壁に向つて立たせると云ふさうであるが、これは壁に向つて腰かけさせられて居るのであつた。相手は窓掛の蔭になつて居るから見えないが、見えなくとも解つてゐる。捜索本部の連中に相違ないのだ。

僕は何もかもない、釘付けにされてしまつた。夢の様だとよく云ふが、この時の氣持ばかりは、たしかに夢以上であつた。ツイ今しがたまで西比利亞政局の大立物だつた巨人が、その妻子と共に銃口を向けられてゐる。白い眼隱しをされたまま、石の様に固くなつて居る。宮殿のやうな大舞踏室の中で……二重硝子の遮音裝置の中で……惡夢だ……惡夢以上の現實だ……。

僕の頭の中から判斷力がケシ飛んでしまつた。夢にも想像し得なかつた事實が、あまりに

突然に眼の前に實現されたので……。

むろん僕は、さうした頭の片隅でニーナの事を考へないではなかつた。捜索本部の連中が、これだけの斷乎たる行動を執りながらニーナだけを見逃して居る。自由行動を執らしてゐる……といふ不可解な事實に氣付いて居るには居た。しかし、そんな事を突詰めて考へてみる餘裕がその時の僕の頭にどうして在り得よう。……ダララッ……といふ拳銃の一齊射擊の音が、今にも二重硝子を震撼する……とばかり思つて息を殺して居たのだから……。

ところが僕の豫期に反して、そんな物音はなかなか聞えて來なかつた。たゞ左側の窓掛の蔭から、微かな蟲の啼くやうな日本人の聲が、時々斷續して聞えて來る。それに對して背中を向けてゐるオスロフが蓬々となつた頭をゆすぶりながらバタバタと顎鬚を上下するのが見える。……と思ふとその胴間聲の反響が遠い風の音のやうに、あるか無いかに仄めいて來るばかりであつたが、それは此晩に限つて近所界隈が妙にヒツソリとしてゐたお蔭で辛うじて聞き取れたものであつたらう。意味なんかはむろん判明りやうが無かつたが、それだけに室の中の形容に絶した物凄さが、惡夢以上の切實さでヒシヒシと總身に感じられた。さうしてその中のタツタ一言でもいゝから聞き分けて遣らう……それによつてオスロフが赤軍のスパイだつた事實がどこから發覺したかを判斷して遣らう……自分の推理が如何に正しいかを證明して遣らうと焦躁りに焦躁つてゐる僕の顏を、一層強く硝子板に引き付けたのであつた。

……ところが此時のかうした僕の推理や想像の殆んど全部が間違つてゐた。……同時に日本の官憲がこの時にオスロフに對して執つてゐた、かうした態度が甚しい見當違ひであつた……僕とおんなじやうな推理の間違ひから、オスロフが赤軍に通じてゐるものとばかり結論し切つてゐた官憲は、此の時に西比利亞中で行はれた過失の中でも最も大きな一つを演じかけてゐた事實が、ズツト後になつてニーナの實話を聞いた時に身ぶるひするほど首肯かれた……と云つたらこの事件の關係者は皆ビツクリするであらう。恐らく僕の神經だと云つて、

極力打ち消さうとするであらう。

しかし僕は構はない。嘲笑でも何でもいゝ。話の筋を混亂させない爲に、僕が後から聞き出した事實の眞相なるものを此處にサラケ出して置く。

僕が後で當番係の上等兵や、ニーナから聞き集めた話の要點を綜合すると、二重硝子の中の事件の正體は、あらかた次のやうなものであつた。

［やぶちゃん注：●「僕が後で當番係の上等兵や官憲の取り調べを直接に見聞したニーナから聞き集めた話の要點を綜合すると」「全集」では「僕が後で當番係の上等兵や、官憲の取り調べを直接に見聞したニーナから聞き集めた話の要點を綜合すると」と加筆されてある。なお、以下、一行空きである。］

僕が銀月から歸つて來た時に、捜索本部がガラ空きになつてゐたのは當前であつた。

けふの午後一時半頃（僕が出て行つてから約一時間後）に、先刻の歩哨が話してゐた赤いタイプライターの露西亞文字で表書した差出人不明の手紙が一通、司令部に屆くと間もなく、司令部と捜索本部の連中が妙にソハソハと動き出して、〇團の幹部や、特務機關の首腦部宛に十十十符號の自轉車傳令を飛ばし初めた。そのうちに司令部の連中が、何事もなささうに三人四人と談笑しながら、一人殘らず出て行つたと思ふと、最後に殘つてゐた古參中尉が、當番係の上等兵を本部の事務室に呼び付けて次のやうな嚴重な注意を與へた。

［やぶちゃん注：●「〇團」「全集」では『旅團』（正字化した）。●「十十十符號」不詳。「式符」か？　陰陽道や神道の呪符に描く記号をこうも言うようである。単に数「式」のような暗号「符」のことかも知れない。識者の御教授を乞うものである。］

一、明朝までオスロフの雇人を一歩も外へ出ない様に命じて監視せよ。萬一彼等の態度に些しでも怪しい處があつたら直ちに、歩哨と協力して引つ捕へて、四階の廊下に立つてゐる憲兵上等兵に引渡せ。

一、萬一危急と思はれる事燈を發見する様な事があつても絶對に、銃劍を使用したり大聲を發したりしてはいけない。沈着した態度で歩哨の前の街路に出て、帽子を脱いで上下に二三度動かせ。

一、御用商人、オスロフの知人、その他セントラン宛の訪問客があつた場合、及、電話がかゝつて來た場合には、此の部屋の扉をノツクして自分の指揮を仰げ。歩哨と協力して何者も司令部内に立入らせない様にせよ。

［やぶちゃん注：●「自分」「全集では『自分（古參中尉）』（正字化した）と加筆。］

一、其他、司令部内の状況に關しては、一切の祕密を嚴守して、出來る限り注意を拂ひつゝ、且、出來る限り平常通りの勤務形態を裝ひつゝ明朝まで徹夜せよ。

と言つた様な奇妙な命令を下すと、自身に窓の鎧戸を卸ろして部屋の中を眞暗にしてしまつた。それから上等兵を廊下に閉め出して、内側から鍵をかけてしまつたので、上等兵は面喰つたまま暫くの間、廊下に突立つて、命令の意味を考へてゐたといふ。

［やぶちゃん注：●「自身に」「全集」は『自身で』とある。］

その上等兵が翌る朝、僕に話した處によると、この日、哈爾賓駐劄の日本軍が非常警戒を始めたのが、急傳令の復命によつて司令部が引上げたのと同時刻の、二時チヨツト前ぐらゐであつたらしい。上等兵が司令部附の少尉から注意命令を受けたのが矢張り同時刻で、地階の張出窓から見える辻々に警戒兵らしい姿が見え始めたのが三時前後で、それから十分と經たないうちに向家のカボトキン百貨店の大扉が閉鎖されて店の中がシンカンとなつてしまつた。それに連れて、さしもに賑やかであつた表の人通りが、次第々々に疎らになり始めた……と云ふのだから、殆んどアツと云ふ間もないうちに哈爾賓全市を押へ付ける準備が整つたものらしい。白軍と赤軍が束になつて騒ぎ出してもビクともしないと同時に、オスロフの審問を極力祕密にしてミヂンも外部へ洩らさない手配りが、それこそ疾風迅雷式に遂行されたものらしい。……しかも斯様した物凄い事實の全部が、先刻の奇怪な手紙の内容を如何

に雄辨に裏書きしてゐたか。その文面の事項が、吾軍の首腦部を首肯させ、且、驚かすべく、どの程度までの眞實性を帶びて居つたかといふ事實を、如何に有力に實證してゐたかは説明する迄もないであらう。

オスロフは、そんな事とは夢にも知らないまゝ、二週間ばかり滯在してゐた露支國境のポクラニーチナヤから汽車に乘つて歸つて來た。程近い停車場から自動車に乘つて新聞を讀み讀みヤムスカヤの近くまで來ると、偶然に故障を起したので、氣輕に車から降りてセントランまで歩いて來た。妻子の出迎へを受けて三階に上つたのが三時ちよつと前であつたと云ふが、其の時既に、極度の緊張裡に手筈をきめて待ち構へてゐた捜索本部の一團は、否應なしに其の足を押へてしまつた。同人の全家族……と言つても白髪頭の母親と、オスロフ夫妻とニーナを入れた四人切りであつたが……を舞踏室に連れ込んだ。さうして廊下と裏口の見張りの爲に一人の憲兵上等兵を扉の外の窓際に立たせたまゝ、例の手紙を突き付けて、嚴重な審問を開始したのであつた。

その手紙の内容は大略次の通りであつたといふ。（細かい點はニーナも記憶してゐなかつたが……）

一、オスロフは歐露における過激派軍の優勢に鑑み、今年の春以來、白軍を裏切つて赤軍に内通し、哈爾賓奪取の計畫を立てて居たところ、既にその氣勢が充分に熟し、優秀なる赤軍スパイを全市に配備して日本軍の動向と配備を詳細に亙つて探らせてゐる形跡がある。キタイスカヤに在る日本軍司令部の祕密命令が、時々赤軍に洩れるのは此の爲である。

一、オスロフは日本軍が、亞米利加上院の壓迫外交に押されて、遠からず西比利亞を引上げるに違ひ無いと云ひ觸らしてゐる。日本軍が哈爾賓に永久的な軍事施設を施すべく準備して居るといふのほ、不意打ちに撤兵を斷行する爲の逆宣傳に過ぎないとも強辨して居る事實がある。これは日本軍の權威を無視して自分の勢力を張る一方に、人心を動搖させて一仕事しようと試みてゐる一種の策動と認め得べき理由がある。

一、今度の十五萬圓事件も實にオスロフが黑幕となつて決行したものである。彼は此の十五萬圓を以て家族をどこかに避難させると同時に、一擧に日本軍の司令部を殲滅し、北平（ペーピン）と上海（シャンハイ）に根據を置く共産軍の首腦部と呼應して事を擧げようと企んで居る者である。

右御參考までに密告する。

日本贔屓（びいき）の一白系露人より――

［やぶちゃん注：●「北平（ペーピン）」北京（Běijīng：カタカナ音写では「ベイジン」「ベイチン」に近い）の旧称。ウィキの「北京」によれば（下線やぶちゃん）、現在の北京は『春秋戦国時代には燕の首都で薊（けい）と称された。周の国都洛陽からは遠く離れ、常に北方の匈奴などの遊牧民族の侵入による被害を受ける辺境であった。秦漢代には北平（ほくへい）と称されるが、満州開発が進み、高句麗など周辺国の勢力が強大となると、戦略上、また交易上の重要な拠点として重視されるようになった』。『唐末五代の騒乱期、内モンゴルから南下してきた遼朝は、後晋に対し軍事支援を行った代償として北京地方を含む燕雲十六州を割譲された。遼はこの都市を副都の一つ南京と定めた。その後金朝が遼を滅ぼし支配権を獲得すると、金は北京に都城を定め中都とした。更にモンゴル帝国（元朝）が金を滅ぼすと大都として元朝の都城とされた』。『朱元璋が元を北方に駆逐し明朝が成立すると、名称は北平に戻され、都城は南京に定められた。しかし、燕王に封じられ北京を拠点とした朱棣（後の永楽帝）は』、一四〇二年、『建文帝に対し軍事攻撃を行い政権を奪取。皇帝に即位した後北京遷都を実行し地名を北京に改めた。辛亥革命後も中華民国は北京を首都と定めたが、南京を首都と定めた蒋介石を中心とする国民政府は、「政府直轄地域」を意味する直隷省を』一九二八年六月に『河北省へ、北の首都を意味する北京を北平（ほくへい、ベイピン Běipíng）へと、それぞれ改称した』。一九三七年から一九四五年まで続いた『日本軍占領期は北京の名称が用いられ』（公式には一九四〇年に改名とする）、『日本の敗戦によって再び北平に改称された』。一九四九年十月一日の『の中華人民共和国成立により新中国の首都とされた北京（北平）は

再び北京と改称され現在に至っている。しかし、中華人民共和国の存在を承認せず、南京を公式な首都として大陸地区への統治権を主張する中華民国（台湾）では、現在でも公式名称として「北平」の名称』を用いているとある。」

ところで其の審問には、武裝した捜索本部の全員のほかに、オスロフも顔を知らないらしい、相當の年輩をした背廣服の二人が立會つてゐたさうである。二人とも額が白くて露語が達者だつたと云ふから、多分それは日本軍の參謀か何かであつたらう。實に鋭い突込み方で、流石のオスロフも最初のうちは少々、受太刀であつたといふ。

しかし其中にだんだんと様子がわかつて來ると、其處は千軍萬馬の陰謀政治家だけあつて、グングンと二人に逆襲し始めた。

［やぶちゃん注：●「千軍萬馬」原義は無論、非常に大きな軍隊であるがそこから転じて、その勢いが異様に強いことの形容となり、別に、数多くの修羅場を経験していること、さらに転じて、豊富な社会経験があること、多くの苦労を重ねているしたたかな老練の人の形容としても用いる（三省堂「新明解四字熟語辞典」に拠る）。］

一、劈頭の赤軍スパイの件に關しては、近來市中に噂が高まつてゐる事だし、自分からも度々、日本軍の上官諸君に御注意申上げた事だからここには別に辨解しない。願わくば一日も早く、一擧に殲滅せられん事を希望するに止めて置く。

［やぶちゃん注：●「劈頭」最初。冒頭。オスロフを告発する密告書の最初の項を指すが、そこに書かれている彼自身の裏切りや内通の部分は馬鹿馬鹿しくて話にならないから取り立てて何も言わない、という謂いである。］

一、自分の家族は御覽の通り、軍事や政治には全然無理解な老人と病人と、女の兒である。假拷問にかけられても知らない事は知らないと云ふより外は無いばかりでなく、そんな正體の知れない一片の投書によつて、諸君が狼狽して居られると、窮極する處、日本軍の權威

に影響して來はしないか。

一、自分が日本軍と緊密な握手をしてゐる周圍に、どれだけの嫉妬深い、盲目の幽靈が渦巻いてゐるかを諸君は今日まで氣付かずに居られたのか。

一、如何にも日本軍の機密に關する事項が、赤軍に洩れてゐるのは事實と認むべき理由がある。三週間ばかり前にも畠の向うのホルワツトと病床で面會した時に、同人からコンナ話を聞いた。「オスロフ君、君の手を通じて白軍に渡るべき日本軍の祕密通牒が、どこかで洩れてゐるのぢやないかと疑はれる事がよくあるぞ。ことに後方勤務で、日本軍と協定して糧食買込みの豫定地が、先廻りをした赤軍のスパイに荒されてゐる事がたびたびなので、實は此の間から不思議に思つてゐる次第だ。日本軍でも時々ソンナ眼に遭ふらしいが、一つ氣を付けてみたらどうか」云々と不平を並べてゐた。變だと思はれるならばホルワツトに問うて御覽なさい。まだ畑の向うの舊哈爾賓の自宅に寢てゐる筈だ。自動車で行かれても十分とかゝらないであらう。

一、何を隱さう今度の旅行は、其事實を實地調査に行つたものに外ならない。日軍と白軍に對する自分の信用を、根底から覆す大問題と思つたから、此の一週間半に亙つて、眞劍な調査と研究を遂げて歸つて來たものである。論より證據、滿州と西比利亞の地圖を持つて來て御覽なさい。此のノートに控へて來た場所と、時日と、司令部から命令の出た日附とを對照して、赤軍スパイの活動狀況を探り出すと同時に、祕密の漏洩してゐる場所を的確に推理してお眼にかけるから……。

一、もし御面目に關しないならば、モウ一つ別に哈爾濱市街の明細圖を持つて來て頂き度い。私が今日まで眼をつけてゐるスパイの隱れ家らしい建築物の位置を一々指摘して印をつけて差上げるから。但し、その中には貴官方が非常に意外とされる建築物が在るかも知れないから豫め御立腹の無い樣に、お斷りして置きます。

一、尚それから序に、十五萬圓事件の眞相は、此の密告書の出所と一緒に、大凡の見當

が付くやうに思ふ。第一、この文章の語法が、露西亜人らしく無い上に、日本贔屓の白系露人などと、云ふまでもない無用の斷り書がして在る處から察すると、これは一種の敵本主義から出た奸策で、私といふ人間の存在を恐れてゐる、白軍赤軍以外の、或る一個人の所業ではないかと思ふ。甚だ抽象的な議論のやうであるが聲より姿だ（論より證據の意）。お差支へなければ詳細に事情を承つた上で、犯人の行動と、十五萬圓の所在を突き止めて遣り度いと思ふ。つまり犯人の恐れてゐる事態を實現さして、私の無罪を證明さして頂き度いと思ふがどうですか。私の部下は哈爾賓の裏面といふ裏面のあらゆる方面に潜り込んでゐるのだから……たゞ日本軍の内部に立入つていないだけだから……。萬一此金が赤軍の手にでも這入つたら由々しい一大事だと思ひますが……ドンナものでせうか……

［やぶちゃん注：●「敵本主義」目的が他にあるように見せかけて、途中から急に本来の目的に向かうやり方。言うまでもなく、明智光秀の名台詞「敵は本能寺にあり」に基づく語。］

と言つた様な調子で、スツカリ煙に捲いてしまつたものだといふ。

尤もコンナ風に纏めて説明すると譯はないが、此の間の押問答がタツプリ三時間ぐらゐかゝつたさうである。それからオスロフは帳面を出して地圖の上に一々印を附けながら、赤軍スパイの連絡網と活躍狀態を説明し初めたが、それが又二時間位かゝつたらしく可なり詳細を極めたものであつたといふ。

ところでその説明を聞いてゐたニーナは、その間ぢう巨大な父親の傍へヘバリついて、それとなく圖面を覗いてゐた。さうして時々、話の切れ目切れ目に、

「サボテンが枯れる」

と云つては父親から睨まれたり、鉛筆で頭をタタカレたりしてゐたさうであるが、しまひには泣き面になつて、

「……ねえ……お父さんてばよう……水をやりに行つていゝでしよ。ぢきに歸つて來ますから……ねえ。いゝでせう……お父さん……」

と甘たれかゝるので、母親が無理に引取つて自分の膝に腰かけさした。ニーナは前にも云つた通り子供らしいお化粧をしてゐたばかりでなく、その態度が如何にもネンネエらしかつたので、ホントの年を知らない憲兵連中の眼には十四、五位にしか見えなかつたであらう。

その中にオスロフの説明がだんだん細かになつて來て、赤軍のスパイの活躍の中心は、どうしても此の哈爾賓市中の、しかも司令部の中か、もしくは其の付近になくてはならぬ。十五萬圓事件といふのも、其奴等の手で巧まれたものでは無いかと疑われる節（がある。これは自分が、奉天に滯在してゐる留守中に發せられた司令部の命令が洩れてゐる事實や、今度の不在中に、十五萬圓事件が起つた事によつても、朧氣ながら立證され得ると思ふ……云々と云ふ處まで來ると、モウ堪らなくなつたニーナがイキナリ母親の膝に突伏してワツとばかり泣き出してしまつた。

「……サボテンが枯れるよう。水を遣りたいよう……」

とオイオイ大聲をあげ始めたのであつた。

さすがの參謀や憲兵たちも、これには見事に引つかかつたらしい。生憎と仙人掌の栽培法に通じた者が一人も居なかつたばかりでなく、最早、外が眞暗になりかけて居るのだから、ドンナに聞き分けのいゝ子供でもお腹が空いてゐるに違ひない。それだのに自分の事は忘れて仙人掌の事ばかり云つて居るのだから、可なりのイヂラシイ要求と考へられたであらう。睨み付けてゐたのは話の邪魔をされた父親だけで、お祖母さんも母親も、ハンカチを顏に當てたまゝギクギクとシヤクリ上げ始めたので、とうとう審問が中絶してしまつた。

參謀らしい背廣服の二人はそこで、何かしらヒソヒソと打合せをしてゐたが、やがて若い方の一人が舞踏室の扉をあけて、下へ降りて行つた。それは多分、上官と電話で打合せに行つたものと思はれたが、間もなく歸つて來ると、

「今夜の十時に〇〇少將閣下が此處へ來られて再審問をされるから、それまでに皆、食事を濟ましておく樣に……それから其子供の事は別に許可を得なかつたが、直に歸つて來るなら

出してもよからう。そんなに泣かれちや第一審問が出來ない。いゝかね。ニーナさん。直ぐに歸つて來るんだよ。御飯が來るんだから……」

と云つた樣な事で、ニーナが外へ飛出したのが八時半頃であつたといふ。そこでニーナは水を遣るふりをしいしい、此の大事件を赤軍に報道すべく、大急ぎで仙人掌を並べ換えてゐると、突然に裏梯子から僕が上つて來る足音がしたので、素早く煙突の陰に身を潛めて樣子を覗つた。すると又、意外千萬にも、平凡な當番卒とばかり思つていた僕が、仙人掌の祕密を知つてゐるらしく、熱心な態度で鉢の數を勘定したり、向家の時計臺を凝視したりし始めたので、彼女は思はずカーツと逆上してしまつた。

仙人掌通信はオスロフ一家の知つた事ではなかつた。彼女一人が、極祕密の中に受持つてゐた仕事だつたのだから堪らない。同時にオスロフを密告したのも此の當番卒に違ひない。ことによるとこの當番卒は、この司令部の中でも一番恐ろしい任務を帶びてゐる密偵かも知れないとまで思ひ込んだ彼女は、僕に氣づかれない樣に煙突の蔭を出て、張番の憲兵の眼を忍びながら四階の物置に潛り込んだ。その奥の古新聞の堆積の間に隱して置いた短劍と、ピストルと、お金と、寶石を取出してシツカリと身に着けたが、出がけに物置の扉に取付けた星形の硝子窓から覗いてみると、今まで舞踏室の廊下に張番をしていた憲兵が、廊下の角を大急ぎで曲つて來る樣子だ。しかもそのキヨロキヨロしてゐる態度が、どうやら自分を探しに來てゐるらしい樣子である。

［やぶちゃん注：●「彼女一人が、極祕密の中に受持つてゐた仕事だつたのだから堪らない」は「全集」では（正仮名正字化した）『彼女一人が、赤軍に賴まれて極祕密の中に受け持つてゐた仕事だつたのだから堪らない』と加筆されている。］

彼女は、そこで息を殺して樣子を窺つた。そのうちに同じ憲兵が、今度は階下の方を探す可く駈降りて行つたらしいので、遣り過して置いて階段に飛出して、前後に氣を配りながら僕を狙ひ始めた。さうしてイヨイヨ暗くなつたのを見濟まして、飛びかゝつて來るまでの間

が前後を合わせて約一時間……それを失敗して、裏階段から行方を晦ましたのが向家の大時計によると九時半前後であつた。

ところが其のチヨツト前の九時前後と思はれる時分に、モウ一つニーナに取つて致命的な事件が發覺してゐた。それは向側のカボトキン百貨店を閉鎖さして、變裝の輕機關銃隊を詰め込んで、萬一を警戒させてゐるうちに、展望哨に立ちに行つた二人の歩哨が、時計臺の下の鐵梯子の蔭に頭を突込んだまゝガタガタ震へてゐる、若い露西亞人を發見した事件であつた。

その青年は案外、意氣地の無い男であつた。ズラリと並んだ銃劍を見まはすと一も二もなく手を合はせて泣出しながら、白状しなくともいゝ事まで饒舌つてしまつた。

［やぶちゃん注：●「ズラリと並んだ銃劍を見まはすと」「全集」では（正字化した）『自分の頭の周圍にズラリと並んだ銃劍を見まはすと』と加筆。］

彼はアブリコゾフといふ貴族出の美青年で、相當の學問があつた上に一種の畸型的な頭の冴えを持つてゐたらしい。時計の玉や、指環の寶石スリカエの熟練家であつたばかりでなく、暗號解讀の天才だつたので、赤軍の細胞に捲込まれて非常に重寶がられてゐた。それが此の二三年、カボトキン百貨店の三階に在る貴金屬部に雇はれて、懷中時計の修繕と、大時計の係を引受けて居たものであつたが、そのうちに窓越しのニーナと顏を見合はせて笑ひ合つたり、顏を赤らめ合つたりする様になつたものであつた。

けれども二人は話をする事は愚か、手紙の遣り取りすら思ふ様に出來なかつた。アブリコゾフの背後には赤軍の監視の眼が光つてゐるし、ニーナの蔭には年老つた女が二人も附いて居るので何様にも仕様が無かつたが、そのうちにアブリコゾフの方が思ひ付いて、當時大流行の仙人掌を應用した暗號通信法を、僅かの機會を利用してニーナに教へると、これが見事に成功した。ニーナの神速な記憶力と、持つて生まれた冒險癖が、見る見る驚くべき作用を

現はし始めたので、其のお蔭で二人はヤツト自由自在に媾曳の出來る嬉しい仲になつたのであつた。

ところが最近に到つて日本軍の司令部が、ニーナの足の下に引越して來る段取りになると、此の仙人掌通信の甘つたるい内容が俄然として一變し始めたのであつた。冒險好きのニーナの眼と耳が、司令部の中を飛び廻はつて拾ひ集めて來る、物凄い「殺人用語」ばかりが、仙人掌の行列の中に勇躍し、呼號するやうになつた。一方にアブリコゾフも毎日正午になると時計臺の上に昇つて、時計の時差を計る。そのほかイツ何時でもニーナの合圖を受け次第に、便所に行くふりをしてはコツソリと時計臺に登つて、文字板の横の隙間から、精巧な望遠鏡を使用しながら、向家の屋上に並んでゐる仙人掌の番號を、右から左の順に書き取つて來る、そいつを往來から合圖する通行人や、お客の風をして來るスパイの手に渡さなければならないので、トテモ忙しくなつてゐた……現にタツタ今もニーナから受けた、

「オスロフが殺されさう……全赤軍のスパイ網が暴露した。十五萬圓……」

といふ意味の中途半端な暗號通信を傳票の裏面に書き取つて、下を覗くと同時に帽子をウシロ向きにした通行人に投付けて、その續きを待つて居た處であつた……云々といふのがアブリコゾフ青年の告白の大要であつたらしい。

此の告白を聞いた軍人たちが「テツキリこれはオスロフの仕事」と思ひ込んだのは無理も無い話であらう。そこで此報告が一直線に特務機關に飛込む……

「……猶豫なくオスロフ一家を捕縛せよ。事態切迫の虞あり」

と云つた様な命令が出る……といふ順序になつたものであらう。ちやうど僕を殺し損ねたニーナが裏階段を駈降りて行く姿を、いつの間にか歸つて來てゐた憲兵が認めたので、又も獨斷で追駈けて行つた留守中に、食事を終つたはかりのオスロフ一家が、有無を云はさず椅子に縛付けられて拷問されることになつた。さうして、その拷問が始まつたばかりの光景を、僕が外から覗いてゐたのであつた。

だからその瞬間は、後から考へると實に恐ろしい瞬間であつたのだ。單に眼の前の光景が恐ろしかつたばかりでない。哈爾賓市に横溢してゐる最も重大な危險な諸要素が、眼にも見えず、耳にも聞えない戰慄的な波動を作つて、二重三重の渦巻を起しかけてゐる。その中心の息苦しい無風帶に、僕は何も知らずに突立つてゐるのであつた。

事實、僕は何も知らなかつた。否、そんな事を察するだけの餘裕が無かつた。二重硝子の中に生きた活人畫とも形容すべきモノスゴイ光景を、タツタ一眼見ただけで、僕はモウ、驚きと恐怖を通り越した心理狀態に追ひ上げられてゐた。二重硝子の外側に顔の半面を押しつけながら今にも左側の窓掛の陰から……ダダーン……といふ大音響の火花が、迸り出るか迸り出るかと石の様に固くなつて居るばかりであつた。

しかし僕がさうして居た時間は、物の五分間と經過しなかつたであらう。間もなく更に更に驚くべき事件に僕は襲はれた。その固くなつて居る僕の右手から突然に、ニーナの短劍を奪ひ取つて行つた者が在つた……と思つて振り返る間もなく、誰だか解らない疾風のやうな人影が、ヒラリと眞暗な屋上の方へ消え失せて行つたのであつた。

その時に僕は何かしら奇妙な聲を揚げた様に思ふ。しかし其聲は幸か不幸か、舞踏室の内部に反響しなかつたらしい。

僕は氣が遠くなりかけた様であつた。舞踏室内の光景も何も全然忘れてしまつて居たやうであつた。さうして間もなく、何者かゞ飛蒐つて來るやうな次の瞬間を、暗黑の廊下で想像すると、思はず身を飜して長い廊下を一走りに、四ツの階段を駈け降りて、地下室に轉がり込んだ。そこでやつと少しばかり氣を落付けて、冷め切つた白湯を二三杯飲むと、そのまゝ自分の寢臺に潜り込んで、頭から毛布を冠つてしまつた。臆病者と笑はれても仕方が無い。

［やぶちゃん注：●「飛蒐つて來る」見かけない熟語で辭書的にもよく分からないが、泉鏡花の「古狢」に『黑雲の中から白い猪が火を噴いて飛蒐つる勢で』という用例があった。］

だから僕はオスロフ一家の運命が、それから先ドウなつたか知らない。たゞ……其翌る日

からセントランの雇人が、金聾同様の朝鮮人とその妻を殘して、一人も居なくなつた事を知つてゐる。さうしてその代りに日本兵の伍長以下四名の兵卒が入り込んで來て兵營式の炊事を始めたこと……オスロフ一家が、それから後一度もセントランに姿を見せなかつたこと……さうして、それから間もなくセミヨノフとホルワツト兩將軍の反目が露骨になつて、白軍の勢力がバタバタと地に墜ち始めた事をズット後になつて聞き及んでゐるだけである。

……とは云へオスロフの一家がコンナ悲慘な運命の坑に急轉直下して行つた原因だけは、その夜の中にスツカリ見當を付けてゐた……東亞政局の中心に穿たれた底無しの坑に、彼等一家を突落した、白い、冷たい手の動きにチヤント氣が付いてゐた。

……と云つたら僕がトテモ素晴らしい名探偵に見えるだらう。又は性懲りもなく、この事件の外殻を包む探偵趣味の第二層へ、突入して行つた勇者とも思へるだらう。……ところが實は、それどころの沙汰ではなかつたのだ。けふの出來事に魘え切つてゐた僕は、一刻も早く事件の眞相を發見しなければ、安心して眠れない位、神經が冴え返つてゐたのであつた。……とてもヂツとしては居られない位たまらない脅迫觀念に襲はれてゐたのであつた。

これは氣の弱い、神經質な僕が、永年囚はれて來た惡癖だつた。何でも變つた出來事にぶつかるたんびに、すぐに其の原因を考へて、結論を付けてしまはなければ安心出來ない性分だつたのだ。想像でもいゝ。假定でも構はない。又は文學青年にあり勝ちな空想的ローマンス病と笑はれても仕方がない……。

但……僕は其時まで仙人掌暗號通信を、オスロフの指導を受けたニーナの仕事とばかり思ひ込んでゐたものであつた。……アブリコゾフの捕縛事件を全然知らなかつたのだから……。又、哈爾賓市の大警戒の狀況も、翌日の朝になつてから上等兵に聞かされて初めて驚いた位の事であつた。だから僕は、其時までに見聞した十五萬圓事件とか、銀月の女將の印象とか、仙人掌の不思議とか、ニーナの怪行動とか、舞踏室の戰慄的光景とか云つた樣な表面的な印象ばかりを毛布の中でガタガタ震へながら、頭の中でグルグルグルと走馬燈の

やうに空轉させた結果に過ぎないのであつたが、それでも其中から辛うじて臆測し得た事件の眞相なるものは實に身の毛も悚立つ性質のものであつた。

それはその「臆測の中の臆測」とも云ふべき最後の結論を先にして説明すればすぐにわかる。

此事件の中心になつて居る者は誰でも無い。やはり彼の銀月の女將に相違ないと思へるのであつた。此の事件の表面に交錯して居る直線や、曲線の出發點を求心的に探つてゆくと、縦から見ても横から見てもかの女將の魅惑的な、自由自在な表情の上に落ちてゆくのであつた。凡を操る眼に見えぬ糸が、彼女の白い指の先に歸納されてゆくのであつた。

彼女に對する僕の第一印象は誤つていなかつた。彼女は哈爾賓と名づくる北滿の美果の核心に潜み隱れてゐる一匹の美しい蟲であつた。その果實の表面に、一見別々に見える巨大な病斑を描きあらはして居る……。

［やぶちゃん注：●「一匹の美しい蟲」「全集」では「一匹の美しい毒蟲」である。これはもう、後者でなくてはいかん。］

彼女は流石に、哈爾賓一流の豪華建築の女主人公として、人氣の荒つぽい北滿の各都市に雄視するだけの、アタマと度胸を持つてゐる女性であつた。彼女はその冷靜、透徹した頭腦でもつて、變幻極まり無い當時の北滿の政情の動きを豫測して、銀月の經營方針と一致させることを怠らなかつた。銀月と名づくる豪華壯麗な浮草の花を、何方の岸に咲かせようかと、明け暮れ覺え占つて居たに違ひなかつた。何故かといふと、その當時までは哈爾賓の將來が、日本軍と、赤白兩軍の何れの支配下に置かれるか……殊に日本軍の駐屯期間がいつまで續くかといふことは、哈爾賓全市……否、北滿全局の生命がけの疑問として、各方面の注視の焦點となつてゐたものだから……さうしてこの問題に關する日本政府の態度に就ては、肝心カナメの日本軍の司令部自體すら、云ひ知れぬ不安を抱いてゐるらしく見えたのだから……。

［やぶちゃん注：●「雄視」威勢を張って他に対すること。］

しかし其間にタツタ一人、彼女だけは窮しなかつた。彼女は、彼女一流の知惠を絞つて、どつちに轉んでも間違ひの無い方針を執ることにきめた。日本軍と一緒に引上るにしても、亦は踏み止まつて第二期の發展を計畫するにしても、決定的に必要な、軍機の祕密と、資金を鬻む手段を考へ始めた。さうして其の解決を女性のみが實行し得る非常手段に訴へた。

彼女はオスロフと星黑の双方に彼女自身を任せたに違ひないのだ。さうしてその結果オスロフからは軍機の重大祕密を……又、星黑からはその正反對な機密事項と同時に、多額の資金を獲得したものに相違無いのだ。しかも其機密と巨萬の金とが、之を道に利用する時は、同時に二人を別々にノツクアウトするに足る程の恐ろしい性質のものであつた事は云ふ迄もない。

しかし極度に用心深いと同時に、あく迄も機敏な彼女は、此處でモウ一つ感覺を緊張さした。問題の根本になつてゐる日本軍の進退についてオスロフの豫測と、星黑の口占とのドチラが眞相に觸れてゐるかを、全然違つた方面から當つて見る可く苦心してゐた。それによつてオスロフと星黑の兩人を如何に活殺したらいゝかを決定すべく、全神經を尖がらしてゐる處であつた。

ところが、そこへ司令部の内情と、捜索本部の形勢と、哈爾賓市内の實情に通じてゐるらしい僕が、公用でやつて來る事を早くも聞き知つたので彼女は、迅速に準備を整へて待ち構へた。さうして何喰はぬ顔で應接間に引入れて、さり氣ない問答をしながら樣子を探つてゐるうちに、僕が不用意にも洩らした兵營と、飛行場に關する一言から、彼女は早くもオスロフが、最早トツクの昔に日本軍から見離されて居るらしい……日本軍が白軍を度外視して、滿州と西比利亞に雄飛しようとして居るらしい事實を推測する事が出來た。

彼女は大膽にも此推測を確信する事にきめた。さうしてすぐに手を廻してオスロフを排斥にかかつた。しかもその排斥の手段たるや、古來の女流政治家とか毒婦とか云ふ連中が、必

ず一度は使つてみる事にきめて居る世にも冷血、邪悪な逆手段であつた。彼女はオスロフから軍機の祕密を聞き出した事實を逆に利用した誣告文を誰かに打たして（もしくは打たして置いたものを）僕が、銀月の應接間で眠つてゐる間に、司令部の郵便受箱に投げ込ましたものと考へられる。ところがその誣告文の内容が又、そこに暗示されてゐる通りの軍機漏洩の形跡に惱まされ續けて來た（ニーナのいたずらとは氣づき得なかつた）日本軍最高幹部の注意の焦點を、忽ちピタリと合はせる事に役立つた。「成る程、ほかに疑ふべき人物は居ない」といふ事になつた……ものと見れば、前後の事實が殆んど完全に、一貫した筋道で説明出來るではないか。……タツタ一つニーナの短劍に關する不思議を除いては……すべてが合理的に首肯かれて行くではないか。

僕はかうして推理とも想像ともつかない……もしくはその兩方をゴツチヤにした怖ろしい結論を、ホコリ臭い毛布の中で長いこと凝視してゐた。さうしてオスロフ一家の運命が、全然オスロフの自業自得であると同時に、全然僕の責任でもあるといふ不思議な結論の交錯を、何度も何度も考へ直してみた。

それからモウ一歩を進めた萬一の場合に、銀月の女將、富永トミの致命的な祕密を齧んでゐる僕……あの邪悪な露語の誕告文が、僕の想像通りに彼女の手から出たものに相違ない事實が、何等かの理由で彼女の立場を危くしさうになつた場合に、最も重要な生き證據となるかも知れない僕……彼女がオスロフと星黑から軍機の祕密を聞き出してゐる事を知りすぎる位知つてゐる僕を、彼女がドンナ風に處理するか……といふ問題に考へ及んだ時、僕は思はずドキンとして寢返りを打たせられた。頭を抱へて縮み上らせられた。僕の想像が的中して居るとすれば、彼女がキツトさうするに違ひ無いであらう手段と、それに對抗する手段を、あゝか斯樣かと取越苦勞しない譯に行かなかつた。さうして彼方へ寢返り、此方へ寢返りして居るうちにその取越苦勞が、いつの間にかタツタ一つ、最後に殘る重大な疑問に向つて集中して來たのであつた。……この事件に對する僕の臆測の全體が、確實であるか無い

かを決定するもののらしく見えるタツタ一つの疑問の鍵……。

それはニーナの短劍が描きあらはした不可思議現象に對する疑問であつた。

ニーナの短劍に關する不可思議現象……此の事件の中心の中心とも見るべき時間と、場所を選んで突發した奇怪事……事件の根本に觸れてゐるらしいデリケートな怪事件……あの嚴重な警戒の中で、あの戰慄的な場面を眼の前にして、僕の手から、あの短劍を奪ひ取つて行つた不敵な人間は何者か。赤の手か……白の手か……それとも夫れ以外の人間の手か……あんな大膽不敵な行動を敢へてした原因が何處に在るか……さうして、あれだけの冒險を敢へてしながら僕を殺さうとしなかつた理由は如何……といふ疑問は、この事件に對する僕の結論では、どうしても説明し切れない疑問であつた。言葉を換えて云ふと、この疑問のタツタ一つが、僕の結論の眞實性の全部を裏切つてしまつて居るとさへ思へるのであつた。此のタツタ一つが説明出來ない以上、僕の結論は一片の空中樓閣になる……。

……ニーナの短劍を奪つた者は、僕の味方か……敵か……。

といふ簡單な疑問が、この事件の全體を解決する最後の鍵としか思へなくなつたのであつた。同時に、その手によつて助けられるか、殺されるかが僕の運命の分れ目だとしか考へられなくなつたのであつた。

かうした煩悶と迷ひが、要するに、事件全體の恐ろしさに脅え切つて、疲れ切つてしまつて居た僕の神經細胞から生み出されたところの、一種の笑ふべき幻覺であつた事は改めて説明するまでも無いであらう。……とは云へ、かうした思ひもかけない大事件にぶつかつて、徹底的に面喰らはせられた意氣地の無い人間が、コンナ樣な幻覺的な結論をドンナに一所懸命になつて固執し行くものか……さうして見す見す大事を誤つて、悲慘な運命に陷入つて行くものかといふ事實は實地の體驗を持つた人でなければ首肯出來ないであらう。

毛布の中で縮こまつた僕は、此の幻覺的な結論を解決すべく、あらん限りの想像を逞しくしてみた。しかし、これはかりはイクラ考へてもわからなかつた。ドンナ想像を附け加へて

も説明が出來なくなつて行くうちに、とうとう頭が古い鏡餅みたやうに痺れ上つて、固結して、ピチピチとヒビが這入りさうな感じがして來た。

そのうちにニーナの顏や、銀月の女將の笑顏が、オスロフの無表情な瞳や、その母親の白髮頭の横顏などと一緒に、眼の底の灰色の空間をグルリグルリと廻轉し始めた。さうしていつの間にかグツスリと眠つてしまつたものらしい。

［やぶちゃん注：●以下、一行空き。］

あくる朝は馬鹿に早く眼が醒めた。

氣が付いてみると當番の連中は、いつの間に歸つて來たものか、僕の左右にズラリと枕を並べてグーグーと眠りこけて居る。

便所に行つた序に歩哨の前から、表口の往來を覗いてみると素敵にいゝ天氣である。昨日の出來事は嘘のやうな感じのする青空が、時計臺の上に横たはつてゐる。

歩哨に聞いてみると「司令部の連中はツイ今しがた、當番連中を引き連れて、どこからか歸つて來たところだ。昨夜は何らの異狀も無かつた」と云ふ。辻々の警戒も最早、解かれて居たのであらう。朝の人通りはいつもの通りで、向家のカポトキンの大扉も開かれて、四、五人の人夫が方々の窓を拭いて居る。

僕は何だか馬鹿にされて居る樣な氣持ちになつた。しかし、さうかと云つて文句を附ける處は何處にも無いので、少々睡むいのを我慢しいしい捜索本部の掃除を濟ましたが、その序にチヨット四階のオスロフの居室の樣子を覗きまはつてみると、どの部屋もどの部屋も窓掛が卸されて鍵が掛かつて居る上に、向う側のブラインドが卸してあるらしく、眞暗で何も見えない。そのシンカンとした氣はいに耳を澄まして居るうちに、又も、昨夜と同じやうな寒氣がして來さうになつたから、慌てゝ階下へ駈降りた。

下へ降りてみると食事がモウ出來てゐるのに驚いた。むろんこれは炊事係が入代つたせい

であつたが、その時に初めてさうした事實に氣が付いた僕は今更のやうに、オスロフ一家がどうなつたかと考へて暗然となつた。何だか自分が意氣地が無い爲に見殺しにしたやうな、たまら無い責任觀念に囚はれながら、タツタ一人で箸を取つたが、久し振りに喰つた軍隊飯の不味かつたこと……オスロフ一家の事が胸に悶へてゐたせゐばかりではなかつた。

そのうちに上等兵が起上つて煙草を吸ひ初めたので、早速、昨夜からの出來事をコツソリ話し合つたが、双方が双方とも眼を丸くして驚き合つた事は云ふ迄もない。それから夫れへと煙草を吹かしながら聲を潜めて居るうちに、いつの間にか時間が經つたらしい。突然に、いつもと違つた長靴の音がポカポカポカとコンクリートの階段を降りて來た……と思ふうちに、いつの間にか出勤したものか、憲兵上等兵の一人が僕の顔を見るなり

「オイ。何をしとるか。早く來んか」

と階段の途中から怒鳴つた。又も大事件らしいのだ。

僕は退屈だつた昨日の午前中が戀しくなつた。タツタ一晩考へただけで、頭がくたびれてしまつたものらしい。實に意氣地の無い名探偵だ……と自分で思ひ思ひ上衣を着て二階へ駈上つて、捜索本部の中を一眼見ると、思はずサツと緊張してしまつた。……十梨通譯が歸つて來て居るのだ。星黒と一緒に行方を晦まして居た十五萬圓事件の片割れが……。

十梨は僕と向ひ合つた、室の隅に近い籐の肘掛椅子に、グンナリと腰をかけてゐた。女のやうに小肥りした男だつたが、二、三日の間に薄汚なく日に燒けて、ゲツソリと蟲を瘠かしてしまつてゐる。靴もズボンも泥だらけになつて、此邊の草原に特有の平べつたいヌスト草の實が處々にヘバリ付いてゐる。何處からか生命からがら逃げて來た恰好で、口を利く力も無いくらゐ疲れてゐるらしい。大勢の視線に睨み付けられながら、片肘を椅子に掛けて、ウトウト睡りかけてゐる樣子である。

［やぶちゃん注：●「ヌスト草」マメ目マメ科マメ亜科ヌスビトハギ連ヌスビトハギ亜連ヌスビトハギ属 *Desmodium* の *Desmodium podocarpum* ヌスビトハギ（盜人萩） *Desmodium*

podocarpum subsp. *oxyphyllum* 或いはその仲間であろう。」

……これは、どうした事だらうか……と思ふ間もなく僕は、曹長の命令で一階へ飛んで降りた。まだ殘つてゐるオスロフ家の冷藏庫の中から白パンを半斤と、牛乳を三本持つて來た。そいつを十梨の鼻の先に突付けると、ヤツト氣がついたらしかつたが、それからホコリだらけの瞼を開いて飲むこと飲むこと喰ふ事喰ふ事。牛乳をモウ二本と、パンをモウ半斤追加して、あとから熱い茶をガブガブと飲んでゐるうちに、みるみる大粒の汗を、ホコリだらけの顏に浮かべた。それから憲兵中尉に貰つた煙草を一本吸つてゐるうちに、又も安心したらしく、グツタリと椅子に凭れかゝるのを、引きずり起し引きずり起し審問が開始されたのであつた。

僕は十梨の一言一句に耳を澄ました。昨夜、僕が毛布の中で築き上げた理屈と想像の空中樓閣は、十梨の出現によつてアトカタもなく粉碎されるかも知れない……さうして昨夜の事件と、十五萬圓事件とを同時に解決するホンタウの鍵が、十梨の口供の中から發見されるかも知れないのだ。……ことに依るとニーナの短劍の行方まで推定され得ないとどうして云へよう。……しかも、それを探り出すのは僕の正當防衛を意味する大きな權利に違ひ無いのだ。世界中に僕一人が持つて居る祕密の特權……と云つたやうな興味を極度に高潮させて、胸をドキドキさせながら、ボンヤリした十梨の表情を凝視して居た。

十梨の口供は、如何にも弱々しい……それこそ夢うつゝのやうな聲で續けられた。

「御承知か知りませんが、私は此間から、面倒な飜譯の仕事でスツカリ疲れて居りましたので、土曜日の晩に外出を願ひまして、日曜日の朝早くから、傅家甸に靴を買ひに行きました。御覽の通り皮が固くなつて穴が開いて居りますので、哈爾賓へ參りますとすぐから、買はう買はうと思つて居たものでありました。

ところが、第八區の筋かひ道を通つて居りますと、背後から私を呼ぶ聲がします。振返つてみますと、支那馬車の中から星黑主計殿が顏を出されました。いつもの通りの服裝で、膝

の間に新しいリユツクサツクを挟んで居られました。

「何處に行くのか」と問はれましたから、「傅家甸へ」と答へて敬禮しますと、「さうか。俺も其方へ行くから此車に乘れ」と云はれましたので一緒に乘つて行きました。

ところがまだ鐵道踏切を越えないうちに、主計殿がニコニコ笑ひながら「お前は松花江の下流に行つた事があるか」と問はれましたのでチヨツト困りました。私は露西亞の地理ならば内地で研究して居りましたお蔭で少々自信がありますが、滿州方面は後まはしにして居りましたので西も東も知りません。殊に當地に來る匆々の八月の初めから飜譯ばかりして居りまして、一歩も市外へ出ずに居りましたのでどの道が何處へ行くのか、どの方向にドンナ町があるか、況して何處いらから先が、馬賊や赤軍のゐる危險區域になつて居るのか、全然白紙も同樣なのです。ですから萬一案内でも賴まれては大變と思ひましたので「イヽエ」と答へますと「さうか俺は今から行く處だ。露西亞人の友達と一緒に行く約束をして居たんだが、そいつが風邪を引いて寢てしまつたので、俺一人で行つて呉れと云つて、案内を知つてゐる支那人を雇つて呉れた上に、御馳走をコンナに遣した。ナアニ。危險區域と云つたつて心配する程のものぢやない。……日本軍の居ない處を全部、危險區域とばかり思つて居るのは日本人だけだ……と云つて其露人が笑つて居た。酒もちやうど二人前ある。それあ景色のえゝ處があるさうだぞ」と云はれました。後から考へますとこれは眞赤な嘘で、郊外の地理に暗い私が外出することを、前の晩からチヤント睨んで、計畫を立てゝおられたものに違ひありません。しかし其時は全く氣付きませんでしたので、非常に喜んでお禮を申しました。ステキな日曜にぶつかつたものだと思つて、靴の事も何も忘れて居りました。

支那馬車は傅家甸を抜けて東へ東へと走りました。腕時計を修繕に出して居りますので時間がわかりませんでしたが、同じ樣な草原や耕地の間を隨分長い事走りましたので、ツイ飜譯の疲れが出たのでせう。ウトウトしておりますと、正午近いと思ふ頃から、小さな川の

流れに沿うて行くうちに、廣い廣い草原の向うに、松花江の曲り角が見える處まで來て馬車が停まりました。

主計殿はそこで馬車を降りられました。さうしていつの間に勉強されたものか流暢な支那語で、駁者と話して居られましたが、そのうちにニコニコしながら此方へ來られますと「此處から向うの丘の上まで歩いて行くのださうだ。あそこが一番景色がいゝさうだからね。濟まないが其の背負袋を荷いで呉れないか。駁者は泥棒が怖いからと云つて車を離れないからね」といふ頼みです。私は「何だ。そんな目的で自分を連れて來たのか」と少々馬鹿々々しくなりましたが、今更、仕様がありませんでしたから、リユクサツクを擔ぎ上げて、道の無い草原を、河の方向へ分入つて行きました。

［やぶちゃん注：●「支那語」「全集」では（正字化した）『滿州語』。全集編者が他を差別言辞として「支那語」を「中国語」に書き変えていると思われる中（推測。差別表現書換注記は全集当該巻にはない）、これは久作による書き換えと考えてよい。］

私は直ぐ鼻の先に見えてゐる河岸が、案外遠いので弱りましたが、それでも二十分位歩きますと、すこし小高い、見晴しのいゝ處へ來ました。あたりに人影もありませんでしたが、主計殿が「イヤ御苦勞だつた。此處らで休もうか」と云つて腰を卸されましたので、私も草の中に尻餅を突きました。それから主計殿はリユクサツクを引寄せて、白い新しい毛布を引つぱり出して、自分の手で草の上に擴げられました。

「一杯飲め」と云つて差出されたのを見ますと封印したウヰスキーの小瓶でした。主計殿も新しいのを持つておられましたので、私は遠慮なしに咽喉を鳴らしました。それから主計殿は、リユクサツクの中からサンドウヰチだのサアヂンの罐だのを二つ三つ出して、毛布の上に並べられました。

［やぶちゃん注：●「サアヂン」老婆心乍ら、サーディン（sardine）でオイル・サーディンのこと。］

私はトテモいゝ氣持ちになつてしまひました。眞青な空から涼しい風がドンドン吹いて來ます。珈琲色の河に區切られた綠色の海みたやうな草原が、見渡す限り雲の下で大浪を打つて居ります。その向うを薄黑い船が音もなく、辷つてゆくのを見て居りますうちに、いつの間にかウヰスキーの瓶が空になりました。そのまゝ横になつて睡つてしまひました。

私は其時に火事の夢を見て居りました。哈爾賓のホルワツト將軍の邸だつた樣です。私は將軍の白い髯が燒けてはならぬと思つて頭からバケツの水を引つ冠せて居る積りでしたが、そのうちにアンマリ噎せつぽいので、眼を擦つてよく見ますと、ツイ鼻の先に鼠色の背廣を着た男がウロウロして居ります。ハテ、何者か知らんと起上つて見ましたら、それが意外にも主計殿で、遙か離れた川岸から拾つて來られたらしい流木を集めて燃やして居られるのでした。しかし、御承知の通り流木は濕つて居ります上に、火力が弱くてなかなか燃え難いので、煙に噎せながらシキリに世話を燒いて居られる樣子でしたが、そのうちに何だかヤタラにキナ臭いのでよく氣を附けてみますと、どうでせう。其煙の中で燻つて居るのは、今まで主計殿が着て居られた軍服ではありませんか。

［やぶちゃん注：●老婆心乍ら、久作の確信犯か、夢から醒める部分をぼかしてあるので注意されたい。「そのうちにアンマリ噎せつぽいので」が覚醒前後で実感、「眼を擦つてよく見ますと」が覚醒時の十梨の行動である。］

私は其時に初めてドキンとしました。

「軍服を燃やすのですか」と思はず大きな聲を出しましたが、主計殿は返事をされませんでした。たゞ私を振返つてジロリと睨まれただけでしたが、其の顏付のスゴかつたこと……臆病者の私はガタガタとふるへ出しました。道路の方向を見ますと私達を乘せて來た支那馬車は、影も形もありません。見渡す限り草の波です。

「主計殿、歸らうではありませんか」

私は思ひ切つて、さう云ひかけてみましたが、まだ云ひ切つてしまわぬうちに、スツクと

立上つた主計殿は、煙の向うからギラギラ光る拳銃を差付けられました。さうして白い歯を出して笑ひながら近付いて來られましたので、私は草の中に四ツン這ひになつて終ひました。

「オイ、十梨。俺はお前に頼みがあるのだ。默つて其のリユクサツクを擔いで三姓まで從いて來て呉れんか。えゝ」

［やぶちゃん注：●「三姓」松花江の下流にある現在の黒竜江省ハルビン市依蘭県。地図上で計測してみると、ハルピンの東北東直線で二百三十キロメートル、松花江の河川実測で凡そ三百キロメートル上流、ハルピンから松花江右岸（南岸）にある現行の道路で試みに実測してみると、約二百七十キロメートルの位置にある（グーグルマップ使用）。ウイキの「依蘭県」によれば、『満州族の古くからの居住地であり、清室祖宗発祥の地』で、『依蘭とは「依蘭哈喇」の略称であり、満州語で「三姓」を意味する「イランハラ」の音写。意訳した三姓という旧称も存在する』とある。地名の由来は、満洲国が編纂した「依蘭紀略」によれば、盧・葛・舒の三つの姓を名乗る一族が『居住していたことより三姓の地という地名が発生したと記載されている』という。清代より『この地域に居住する諸民族が貢納する毛皮と絹布を初めとする中国物産との交易が行われ、三姓は松花江水運の要衝として発展していった』ともある。ここから更に松花江を下ると（直線距離で東北四百八十キロメートル）、ハバロフスクに着く。］

私はモウ一度そこいらを見廻しましたが、河を通る船すら見えません。太陽がズツト西に傾いたせゐでせう。哈爾賓の町が黑い一線になつて上流の方向に見えて居りました。

「俺は司令部の金を持つて逃げて來たんだ。明日の今頃は大騒ぎをやつて居ると思ふんだがな。ハハ……。幾日かゝるか知らんが三姓まで來てくれたら、持つて來た金の三分一だけ分けて遣る。それでも五萬圓だ。惡くないだらう。嘸ぢや無い。此通りだ」と云ふうちに主計殿は、右手のピストルを私の方に向けたまゝ、左の手をリユクサツクにかけて口を大きく開かれました。さうして底の方に在る新聞紙包を片手で破いて、チラリと見えた分厚い札束の

中から、よい加減に抜出した二十圓札を口に銜(くは)へて數へられました。

「三百二十圓ある。當座の小遣ひに分けて遣る。よく調べてみよ。一枚も贋札なんか無いから……」

「ありがたう御座います。行(ゆ)きませう」

と私は答へました。容易に逃げ出せないと思ひましたから、わざと金に眼が眩んだふりをしたのです。

「ウム。一緒に飲んだ馴染甲斐(なじみがひ)があるからな。無茶な事はせぬ積りだが……俺もタツタ一人の仕事だからナ」と星黑(ほしぐろ)主計殿は獨言(ひとりごと)のやうに云はれました。

私は默つてリユクサツクの革紐に兩手を突込みました。さうして、たまらない恐ろしさと不愉快さとを我慢しいしい、主計殿の指圖に從つて、草原(くさはら)の中を歩き出しました。主計殿はいつの間にか此邊(このへん)の地理を詳しく調べて居られたらしいのです。

そのうちに日が暮れて、五日ばかりの細い月が出ておりましたが、間もなく引込んでしまひましたので、私は星黑(ほしぐろ)主計殿の懷中電燈で足元を見い見い草原(くさはら)を分けて行(ゆ)きました。すると、又、そのうちにリユクサツクが堪らなく重くなつて來ましたが、それでも私の姿だけが懷中電燈に照(てら)し出されて居るのですから、逃げる素振りなどミヂンも見せられません。三姓(せい)に着いたら殺されるかも知れない……とも思ひましたが、今更どうにも仕樣が無い私でした。

［やぶちゃん注：●「五日ばかりの細い月」私（藪野）は先に、この十万円の横領事件が発覚した日を大正九（一九二〇）年九月六日の月曜と推定したが、これによって私の推理が正しかったことが証明された。但し、気になることが一つある。調べてみると、この夜は月齢二十二で翌日が下弦の月、半月より膨らんでいて逆立ちしても「細い月」ではない。……この話、実は――月が嘘だ――と語っているのではなかろうか？……］

そのうちに何處だかわかりませんが、松花江の向う岸の大きい星空の下に、人家の燈火がチラチラ見え始めますと、荷物を擔いで居ながらも可なりの寒さを感じて來ました。

「何處にも泊らないのですか」と云ひながら振返りましたら、俯向いて何か考へ考へ歩いてゐた主計殿が顔を上げて見廻されました。「ウム。支那人の家が在つたら泊らう」と云はれましたが、そこいらは人家の影すら見當らない、河沿ひの高原地帶らしく見えました。

それから又一里も歩きますと、肥つた私はもうヘトヘトに疲れてしまひましたから、立止つて暗闇の中を振り返りました。

「こゝいらで休まして下さい」と悲鳴をあげますと、主計殿も疲れて居られるらしく案外柔和な聲で「さうだな。人家は却つて物騒かも知れん。今夜は此處で野宿とするかな」さう云はれるうちにリユクサツクを下した私は、あんまり寒いのでガタガタ震へ出しました。「主計殿。あそこに小舍が見えますよ」

二、三町向うの河岸に、歪んだ掘立小舍らしいものが見えて居る様でした。主計殿もうなづかれました。

[やぶちゃん注：●「二三町」二百十九～三百二十七メートル。]

「ウン丁度えゝ。行つて見よう」

近づいて見ますとそれは渡船場の番人小舍でした。一間幅に二間ぐらゐの極く粗末な板造りで、向う側の破れ穴から松花江の水の光が見えました。

[やぶちゃん注：●「一間」は一・八メートル。]

「中に這入つて見よ」と主計殿が命令しながら懐中電燈を私に渡されました。さうして自分は拳銃を持つたまゝ、家の背後にまはつて小便をして居られる様です。

……今だ……と私は胸を躍らせました。其儘家の中に這入つてリユクサツクをドシンと卸して、其上に點けつ放しの懐中電燈を乘せました。すぐに戸口から這ひ出して、丈高い草の中を下流の方へ十間ばかり這ひ込みましたらうか……。

「オイ。十梨。何處に居るのか」

といふ聲が風上から聞えました。拳銃を片手に持つた向う向きの背廣姿が、上流の方を透

かしてゐる恰好が、星あかりでよく見えました。私は立上つて一散に走りました。

……ズダーン……ズダーン……

といふ大きな音が私の肩を追ひ越して行きましたので、私は夢中になつてしまひました。帽子は其時に落したのでせう。草の中を轉けつまろびつして行きましたが、そのお陰で彈丸が當らなかつたのかも知れません。三發目の爆音が可なり遠くに聞えましたので、チヨツト振返つてみますと、四五十 米 ばかり離れて追蒐けて來る黒い姿が見えました。

［やぶちゃん注：●「追蒐けて來る」既注。「飛蒐つて來る」を参照。「蒐」には狩り・狩猟・探すの意があるから、その辺りからの用字であろうか。］

私の左手は仄白い松花江の水で、右手は丘つゞきの涯しもない高原らしいのです。その中をピストルの音がアトカラアトカラ縫うて行くのです。そのうちに右手の方から川縁へ降りて來る小徑らしいものを見つけましたから、構はずに其中へ走り込みまして、小高い處へ駈上りました。拳銃の音はソレツキリ聞えなかつた樣です。

左右から生えかゝつて來る草を押分け押分け、三十分ばかりも走りますと息が切れて堪らなくなりましたので、倒れる樣に草の中へ坐りましたが、坐つてみると又寒いのに驚いて立上りました。さうして寒さと空腹と睡むたさとに責められながら夢うつゝの樣に當てどもなく狹迷つて行きました。

翌る日の正午頃、何處かわからない廣い通りへ出ると間もなく支那人の部落に着きました。しかし露語が通じませんので手眞似で高粱飯を喰はして貰つて物置の藁の中に寢ました。さうして昨日の正午頃になつてヤツト眼を醒ましましたが、それからお禮に銀貨を一枚遣つて「哈爾賓々々々」と云ひますと支那人の老爺がわかつたらしく、撞木杖を突張りながら廣い畠の中を案内しいしい通抜けて、大きな道路のマン中に私を連れて來ました。さうして西の方を指して見せながら幾度も幾度も頭を下げて見せましたが、それが一昨日來た道だつたかどうかは今でも私にはわかりません。モウ一度行つてみたら往き路も歸り路もハツキリす

るだらうと思ひますが……。生憎、馬車が通りませんでしたので徒歩で引返しましたが、折より夕方になつて一臺捕まへまして、夜通しがゝりの全速力で走らせました。居睡(ゐねむ)りしいしい來ましたので、幾つ村を通つたか記憶しませんが案外、道程(みちのり)が遠いので驚きました。しかし其夜(そのよ)のほのぼの明けに哈爾賓(ハルピン)の燈火を見た時には、その爲に氣が遠くなりかけました。

［やぶちゃん注：●「しかし其夜のほのぼの明けに哈爾賓(ハルピン)の燈火を見た時には、その爲に氣が遠くなりかけました」非常に重大な事実であるが、一九六九年第一刷一九八九年第九刷第一書房刊「夢野久作全集」第三巻の「氷の涯」のこの前後は以下のようになっている。

《引用開始》

居睡りしいしい來ましたので、幾つ村を通ったか記憶しませんが案外、道程が遠いので驚きました。しかしその為に気がとおくなりかけました。

《引用終了》

この『しかしその為に気がとおくなりかけました』というのはおかしくないか？　「道程が遠いので驚」き、「その為に気がとおくなりかけ」たという順接なら、いい。逆接の「しかし」は明らかにおかしい。そこでよくみると、この底本の方が実に自然な叙述になっていることが分かる。即ち、ほっとして、思わず、かえって「その爲に氣が遠くなりかけ」たというのである。――これは本当に久作が単行本化の際に削除したのであろうか？――これは素人が見ても、悪しき改稿であることは言を俟たない（「しかし」もカットすれば問題はない）。私は彼の単行本化された方を現認していないので何とも言えないのであるが……これ……もしや――「全集」自体が「其夜のほのぼの明けに哈爾賓(ハルピン)の燈火を見た時には、」をまるまる脱字させてしまったというあり得ない可能性も捨てきれない――のである。どなたか単行本をお持ちの方、是非ご確認戴けると助かる。」

……ハイ。貰つたお金はこれです。……二十圓札十六枚です。……ズボンのポケツトに這入(はひ)つて居たのです。……疲れて居りますからモウ一度よく睡らして下さい」

さう云ふうちに、十梨はモウ、ぐつたりと籐椅子の中に凭れ込んだ。僕が點けてやつた煙草を、手を振つて拒絶しながらウトウトとなりかけた。

［やぶちゃん注：●以下、一行空き。］

僕は今でもさう思つてゐる。

この十梨の言葉を疑ひ得る者は、餘程の名探偵でない限り絶無であらう……と……。

十梨は眞實、正體も無いくらゐ疲れて居たのだから。……さうして恐ろしい憲兵の前に、絶望と無力とを一緒にした身體を曝露しに歸つて來たのだから……。

その中でも僕は此話を最も深く信じた一人だつたらしい。……と云ふよりも十梨の立場に哀心から同情を寄せてゐた一人と説明した方が適當だつたかも知れない。實に意外極まる

口供の爲に、昨夜、毛布の中で、あれだけ苦心して築き上げて居た推理と、想像の空中樓閣をドン底から引つくり返されながらも、十梨から煙草を拒絶されると直ぐに一階へ飛んで降りて、熱い澁茶を一杯、酌んで來て遣つた位であつた。

憲兵連中も無論の事であつた。彼等の顏は十梨の口供の途中から見る見る輝き出してゐた。捜索本部が開設されてから三日目に、早くも勝利の端緒を攫んだ喜びを、互ひに目顏で知らせ合ひながら點頭き合つて居た。

十梨が熱い茶を飮み終るのを待ち兼ねた憲兵中尉は、僕をさし招いて自動車を呼ばせた。一刻も猶豫ならんといふ風に……さうして早くもスウスウ眠り始めて居る十梨を搖り起して、

「オイオイ。十梨通譯。起きろ起きろ。處罰されるのではないぞ。いゝか、貴樣は殊勳者に違ひ無いが、一應現場を調べる迄は許す譯に行かんからな。氣の毒だが、えゝか」

十梨は搖ぶられながら小兒のやうにグニヤグニヤとうなづいた。

自動車が來ると皆立上つた。何でも全員一齊にやるのが憲兵の習慣らしい。さうしてめいめいは自分の机の曳出しを開けて、いくらも無い書類や文房具を抱へ込んだのは、捜索本部の仕事がモウ是切りになつた事を豫感して居たのであらう。

「オイ。當番。モウ此處へは來んかも知れんが、しかし今二三日の間、當番を解除することはならんぞ。捜索本部を解散する時には此方から通知すると上等兵に云ふて置け」

と憲兵中尉が宣告した。

「ハ……モウ二三日間當番を解除する事はならんと上等兵殿に云ふて置きます」

と復誦をすると今度は珍しく曹長が笑顏を作つた。

「フフフ。うまい事をするなあ貴樣は……フフン。慰勞休暇のやうなもんぢや。……ウン。それから新聞紙を一枚持つて來い。イヤ。封筒がよからう。一枚でえゝぞ……」

「ハツ封筒を一枚取つて來ます」

といふうちに僕は部屋を飛び出して司令部から白い横封筒を一枚貰つて來た。皆はその間に玄關に出てゐたので、僕は追つかけて、自動車の外に立つてゐる曹長に、封筒を手渡した。

曹長は封筒を受取ると自動車に乘つた。グツタリと顏を伏せてゐる十梨の横に坐りながら、ポケツトから札束を出して數へ始めたが、三百二十圓在る事を確かめると、「ヨシ」と云ひながら扉を閉めた。同時に二人の憲兵上等兵が左右のステツプに飛乘ると、舊式のビツクがガツクリと後退しながらスタートした。その拍子に、札束を横にして封筒に入れようとした曹長の手許が狂つて、外側の一枚の裏面がチラリと見えた。

［やぶちゃん注：●「ビツク」私は免許を持たない化石のような男で、車には冥いが、これは恐らく、アメリカのゼネラルモーターズ（GM）が製造販売する乘用車のブランドの一つ、ビュイック（Buick）であろう。］

「……アッ……」

と僕はその時に叫んだやうに思ふ。敬禮するのも忘れて自動車の跡を追つかけ樣としたが、追付けなかつたので、又立ち止まつて額を押へた。不思議さうに僕の顏を見て居る歩哨の視線から逃げる樣に、地下室へ駈降りて、自分の寢臺に引つくり返つた。猛烈な勢いで活躍し始める僕の腦細胞を、押し鎭めよう押し鎭めようと努力しながら兩手をシツカリと顏に當てた。

僕は自分の耳を疑はなかつた。今、曹長が數へてゐる三百二十圓は、たしかに十梨が、机の上に投げ出したソレであつた。星黑が、公金の包みの中から引出して呉れたたものだと十梨が説明してゐた二十圓札の十六枚に相違なかつた。……しかも同時に僕は自分の眼を疑はなかつた。タツタ今、其一番上の一枚の裏面がチラリと見えた瞬間に、その裏面の片隅に二つ並んだ赤インキの斑點の恰好をハツキリと僕は認めたのだ。

僕はその赤インキの斑點に見覺えがあつた。忘れもしない前月の初めに、星黑主計が供の前で、自分の俸給を勘定して居るうちに、誤つて赤インキの附いたペン先を跳ね返した時に、

くつ付いた斑點だつたのだ。

僕は、其時に大急ぎで吸取紙を持つて行つて遣つたので、其インキの恰好をハツキリと印象して居る。大きい方が吸取紙に押へられて象のやうな歪んだ恰好になつてゐた。そのお尻の上に小さい方の一滴が太陽の形に光線を放射してゐた。ちやうどお伽話の插繪か、印度の壁畫みたやうな赤い影繪の形になつた事を、不思議にハツキリと印象して居たのだ。其時に吸取紙を投げ返した星黑が珍しく「有難う」と云つたせゐかも知れないけれども……。

若し世の中に、同じ形の赤インキの斑點をつけた二枚の二十圓札が、絶對に存在し得ないものとすれば、かの一枚の札は確かに前月の初めに、星黑主計が自分の俸給として受け取つて、舊式な博多織の札入に挾んで、内ポケツトに納めた札の中の一枚でなければならぬ。それが丸一個月經つた二三日前の土曜日に銀行から引出したまゝの公金の札束に挾まつて居る理由は絶對にあり得ない。金扱ひの嚴格な星黑主計が自分の紙入の中の金を、公金の札束の中へ突込むといふのは、どう考へても不自然である。

星黑は殺されたのだ。十梨が掘つた陷穽に陷つて死んだのだ。

オベツカ上手で色男の十梨は、星黑を誘ひ出して公金を費消さした……その窮況に乘じて星黑に官金を盜み出さした。さうして其金を奪ひ取つたのだ。そのポケツト・マネーと一緒に……。

十梨は其様な事實の一切を晦ます爲に、二日二夜がゝりで恐ろしく骨の折れる芝居を打つて居るのだ。星黑が生き返つて來ない限り絶對にわかる氣づかひの無い芝居を……。

十梨の知惠には頭が下がる。實地檢分に行つた憲兵は河岸で星黑の軍服の燒殘りを發見するであらう。それから河岸の一軒屋を檢分するであらう。さうして十梨の言葉の眞實性を認めたが最後、猛然として三姓の方向に突進するであらう。さうしてその結果は十五萬圓と、星黑の行方を、永久に諦めて歸つて來る事になるであらう。十梨の放免もそれと同時であらう。

かくして十梨は官憲の保障の下に十五萬圓の持主となり得るであらう。

……僕はイキナリ起上つて駈出したい衝動に駈られた。すぐにも憲兵隊に駈込んで十梨の奸策を發いて遣らうか……と思つたが、又、思ひ直して寢臺の上に引つくり返つた。……イヤイヤイヤ。まだ早い。まだ早い……と氣付きながら……。この事件が放射してゐる、すべての謎の焦點を解決してしまはなければ……さうして動きの取れない實物の證據を押へた上でなければ……と考へながら……。

彼の二十圓札は星黑を殺した時に、十梨が奪つた者に相違無いのだ。さうして他の持合はせの札と合はせた三百二十圓を、正直さうに憲兵の前に提出した一種の餌に外ならない事がわかり切つて居るのであるが、しかし是は僕だけがタツタ一人認めて居るに過ぎない極めて偶然の事實である。死んだ星黑が生き返つて來て、それに相違ない事を白狀しない限り、絶對に確實な證據とは云へないのだ。かうした證據の性質を考へないでウツカリした事を云ひ出しでもしようものなら、相手が無鐵砲な憲兵の事だから、あべこべにドンナ嫌疑をかけられるか知れたものでない。

［やぶちゃん注：●「奪つた者」はママ。「全集」は『物』と訂する。］

さう氣がつくと同時に僕は思はずブルブルと身ぶるひをした。この事件を仕組んだ人間の頭のヨサに今一度舌を捲いて感心しない譯に行かなかつた。

見たまへ……。

つい今しがたまで十梨の陳述によつて木葉微塵に打碎かれてゐた僕の想像の空中樓閣が又も、巍々堂々たる以前の形にモリモリと復活して來るではないか。

［やぶちゃん注：●「巍々堂々」はママ。「ぎぎだうだう（ぎぎどうどう）」が正しい（「全集」は『ぎぎ』と訂されてある）。「巍巍」は「魏魏」とも書き、高く大きいさま、厳かで威厳のあるさまを言うから、そうした厳かな様態を少しも隠すところがなく、公然としているさまをいう。］

しかも生き生きとした現實となつて眼の前に浮き出して來るではないか。

此事件の背後から糸を操つて居る者は、やはり銀月の女將に相違ないのだ。銀月の女將は表面上オスロフや星黑に好意を表しながら、内實は、十梨と肝膽相照し合つて居るに違ひ無いのだ。あの年増盛りの女將の男妾、兼、番頭として十梨は何と云ふ適任者であらう。彼の露西亞通と露西亞辨と、持つて生まれた愛嬌とは、銀月の女將に取つてドレ位重寶なものであらう。

［やぶちゃん注：●「露西亞通と露西亞辨」悪知恵に長けた十梨の持つ、客観的なロシア政局の情報通としての冷徹な分析力と、通訳としての堪能なロシア語の語学力の駆使を、実に上手く、皮肉に表現している部分である。］

彼は最初から彼女の手先となつて仕事をして居たもので、しかも目下が其の大活躍のクライマクスに違ひ無いのだ。彼は、彼が司令部の内情に精通してゐる知識を利用した、事實無根の露西亞文を彼女の註文通りにタタキ出して、一氣にオスロフを葬り去る手段を彼女に與へると同時に、一命を賭して十五萬圓の金儲を巧らんでゐるのだ。捜索本部の視線を他の方面に轉向させる可く、巧妙を極めた芝居を打つて居るのだ。十梨の様な男に取つては、あの女將の魅力が、ソレ程の苦勞に價するに違ひ無いのだ。犯罪の裏面に女……何といふ古めかしい解決であらう。さうして又……。

「オイ、上村。手紙だぞ」

かう呼ばれた僕は、ビツクリして寢臺の上に起上つた。見ると眼の前に上等兵が立つて居る。

「晝間から寢る奴があるか。どこか悪いんか。」

［やぶちゃん注：●末尾句点はママ。］

「ハ。すこし風邪を引ゐた様です」

と答へながら僕は手紙の上書を見た。「哈爾賓、第二公園裏、銀月事、富永トミ方、阪見

芳太郎――電二七――」とゴム印が捺してある。

「前文御めん下さいませ。先日は失禮致しました。早速ですが其節お忘れになりました銀側の巻煙草入れを只今發見致しました。御屆け致しませうか。それとも御都合よろしき時お出で願はれませうか。まことに恐れ入りますが、御ついでの時お電話をお願ひ致します。取りあへず右まで御意を得ます。

敬具

上村作次郎様

阪見芳太郎」

といふ邦文タイプライターの文句が其中味であつた。

「何だ。貴様は銀月なんぞへ行つて遊んだことがあるのか」

と上等兵は眼を瞠いて尋ねた。僕は震へる手附を見せまいと苦心しいしい辛うじて答へた。

「イーヤ、此のあひだ公用でタツタ一度行つたことがある切りです」

「その時に忘れて來たんか」

「そんな記憶は無いのですが……銀の巻煙草入れなぞ持つて居た事は無いのですが……」

「ハハハ……いゝぢや無いか貰つて來たら……」

「外出してもいゝでしせうか」

「捜索本部は引上げたんぢや無いだらう」

「ハイ。モウ二三日當番を解除しない様にと中尉殿が云つて行かれました」

「フーン。そんなら外出はお前の勝手次第ぢやろ。俺の權限ちう譯ぢやあるまい」

「ハイ。それぢや是から出かけて來ます。少し買物がありますから」

「また書物買ひか。まあチツト面白い奴を買うて來いよ。讀んで遣るから。ハハハ……」

と冗談を云ひながら上等兵は出て行つた。

僕はすぐに外出の支度を始めた。しかし夫は上等兵の手前だけで、實は息苦しい程の氣迷ひの中に鎖されて居たのであつた。

……正直のところ……僕は青天の霹靂に打たれたのであつた。噂をすれば影といふが、タツタ今、考へてゐたばかりの當の本人から、コンナ風に巧妙を極めた呼出しをかけられた僕は、ちやうど自分の想像通りの幽靈にぶつかつた様な脅迫觀念に襲はれたのであつた。

見たまへ……僕の想像が想像でなくなりかけて居るではないか。

……かうした人知れぬ手段で僕を引つぱり出して片づけようとしてゐる……もしくはこの事件に一と役買はせようとしてゐる……らしい彼女の計畫が、此手紙の書き振りを通じてアリアリと窺はれるではないか。

……彼女は僕が、兵卒らしくないアタマの持主である事を、タツタ一眼で看破してゐるのだ。同時に彼女は僕が、此事件に關する幾多の重大な祕密を握りながら、野心滿々の虎視眈々たる態度で、司令部の當番に頑張つてゐる人間であるかのやうに、想像してゐるに違ひ無いのだ。ことに依ると彼女は、僕の身體がタツタ今閑散になつた事實と一緒に、その理由までも、憲兵隊の大袈裟な行動によつて察知してゐるかも知れない……だからコンナ詭計を平氣で使つて僕に呼出しをかけて居るのぢやないか……僕が十梨や何かと同樣に二つ返事で飛んで來るであらう事を確信して……。

さう氣が付いた僕は、猶豫なく此の手紙を持つて特務機關の參謀の處へ行かうか知らん。さうして一身の處置を仰がうか知らん……と思ひ、震える手で脚絆を卷いてゐた。

……これは俺みたいな人間の手に合ふ事件ぢや無い。いくら文學青年でも、兵卒は兵卒の仕事しか出來ないものなんだ。そればかりぢや無い。此間、銀月の應接間でウツカリ軍機の祕密を饒舌つて居る以上、俺はモウ國家の罪人ぢや無いか。自訴して出る資格は充分に在るのだ……。

と云つた樣な事實に後から氣付きながら、帶劍の尾錠をギユーギユーと締め上げて居た。

［やぶちゃん注：●「尾錠」尾錠金。帶劍ベルトのバックルのこと。］

恐らく其時の僕の顏は血の氣を無くして居たであらう。屠所の羊とでも云ひ度い氣持ち

で、うなだれうなだれ地下室の階段を登つて行つた事を記憶して居る。さうしてソンナ氣ぶりを察しられないやうに帽子を冠り直して歩哨に外出證を見せると、其儘こそこそキタイスカヤの人ごみに紛れ込んだ事を記憶してゐる。實はキタイスカヤの人通と云ふと、十人が十人外國人ばかりと云つてよかつたので、却つて人眼を惹く爲に紛れ込んだやうなものだつたが、それでも、そんな人混雑の中に揉まれて行つたら、その中に何とか決心が付くかも知れない……と云つたやうな心細い空頼みの氣持から、さうしたのであつたかも知れない。……さうしてまだ決心が付かないまゝ、何處を當てともなく歩いて行くうちにトルコワヤ街か何處かであつたらう。偶然に眼に付いた立派な理髪店に這入り込んで、フラフラと椅子に腰をかけたまゝ、正面の鏡に映つて居る病人じみた自分の顔を、いつまでもいつまでも凝視してゐたことを記憶してゐる。

［やぶちゃん注：●「トルコワヤ街」先に引かせて戴いた「里村欣三ホームページ」の里村の「放浪病者の手記」についての評論「満州小考」によれば、『「トルゴワヤ街」はハルビン随一の繁華街キタイスカヤ街に並行する「売買街」』（商店街の意）とあり、「埠頭区拡大図」を見ると位置が分かる。しかも現在の哈爾濱でも簡体字でズバリ、「売買街」という街路名であることが地図で分かった。］

それから先の事が僕としては實に書きにくいのだ。何とも申譯無い、面目無い事ばかりが連續して起つて來るのだから、成らう事なら割愛したいのが山々だが、しかし、それを書くのが此遺書の眼目なんだから、しかたがない。

眼の玉の飛び出る様な料金を取られながら、格別驚きもせずにトルコワヤ？　の理髪店を出た僕は、ショーウヰンドを覗いたり、のろい貨物車に遮られてゐる踏切を眺めたり、公園の劇場の看板を見上げたりして長い事考へたあげく、ついフラフラと銀月の玄關に立つてしまつたのであつた。

［やぶちゃん注：●「トルコワヤ？　の理髪店」このクエスチョンは二段前で「トルコワヤ

街か何處かであつたらう」と行った先の街路が不確かであったことに基づくもの。●「踏切」「満州小考」の地図を見ると、トルゴワヤ街の東北直近、一区画隣に平行して鉄道が走っているのが分かる。」

その時の僕の氣持ちは僕自身にも記憶して居ない。しかし何れにしても持つて生まれた臆病者の僕が、自分でもハツキリした自信のない證據物件をもつて、〇〇機關の首腦部の足下へ飛込んで行く勇氣を出し得なかつたのは當然であつたらう。さう云つて自分の卑怯さを云ひ逃れる譯では無いが、そんなにしてドンドコドンドコのドン詰まで考へまはして……イツタイ俺はホンタウに此事件に關係があるのか……無いのか……ある樣に思ふのは俺の氣の迷ひぢや無いか……とまで迷ひ詰めて、氣が遠くなる程、思ひ惱んだ僕が、結局、最後に殘る事件全體の「不可思議の焦點」に引掛つて動きが取れなくなつてしまつたのは止むを得ない歸結であつたらう。「ニーナの短劍」に關する疑問を唯一の心頼みにして……銀月の女將が僕の味方か敵かを確かめて見る氣になつて來たのは、自然の結果として見逃して貰へるであらう。

［やぶちゃん注：●「〇〇機關」「全集」では伏字を外して（正字化した）『特務機關』となっている。］

勿論それは實にタヨリナイ雲を攫むやうな想像……と云ふよりも寧ろ空想に近いヤマカンであつた。非常識と云ふよりも寧ろ馬鹿々々しいくらゐ情ない「空頼み」式の心理状態であつた。けれども其時の僕としては、さうしたヤマカン式の「空頼み」よりほかに辿つて行く道が無いのであつた。此の疑問を解決してから自首して出ても遅くは無い……此の疑問を解決する爲には何もかも犠牲に供しても構はない……と云つたやうな絶體絶命の氣持になつたまま、色硝子と、茶色の化粧煉瓦と、蛇紋石で張詰めた、お寺のやうな感じのする銀月の玄關に茫然と突立つて居たのであつた。

［やぶちゃん注：●「蛇紋石」serpentine（サーペンティン）。マグネシウムの含水ケイ酸

塩からなる鉱物で橄欖石や輝石が水と反応して変質したもの。岩石の表面に蛇のような紋様が見られ、高級装飾石材。」

それは多分午後の二時か三時頃であつたらう。間もなく誰か奥へ知らせたものらしい。奥の方から昨日の通りの水々しい丸髷姿の女將が、如何にも驚いた恰好で走り出て來た。さうして大きな聲で、

「いらつしやいませ。よくまあ…」と云つた。

［やぶちゃん注：●「…」ママ。単なる誤植であろうが、特異点。「全集」は通常の『……』。］

それから僕は其夜の十一時頃まで一歩も外へ出なかつたのだ。銀月の大建築の中でも、これが哈爾賓の市中かと思はれる位もの靜かな、茶室好みの粹を盡した祕密室の見事さと、調度の上品さと、それに相應しい水際だつた女將の魅力に、隙間もなく封じ籠められて居たのだ。東洋の巴里を渦巻くエロ、グロのドン底の、芳烈を極めた純日本式情緒を滿喫して居たのだ。

もちろん夫れは此方から註文した譯ではなかつた。しかし昨日から一生懸命になつて突詰めた氣持が、生れて初めて口にした芳醇な酒のめぐりに解きほごされ始めると、自分でも不思議なくらゐ大きな氣持になつて來たやうに思つた。ちつとも醉つたやうな感じがしないまんまに、恐ろしいものが一つもなくなつた様な……。何でも思ふ通りにしていゝ様な……。

さうしてその氣持ちが更に女將の技巧によつて解放されると、いよいよスツキリとした、冴え返つた醉ひ心地に變化して行つた。二度ばかり湯に入つて、冷めたいシヤワーを浴びて居るうちに、頭が切り立ての氷のやうになつて、何もかもを冷笑してみたいや様な……平生の僕とは全然正反對な性格に變化してしまつて居ることを、自分自身に透きとほるほど意識して居ることまでも自分自身に冷笑して居るやうな……。

しかも女將は其の間ぢう、一度も事件に觸れた話をしなかつた。だから、僕も銀の莨入れの話なんかオクビにも出さなかつた。これが銀の莨入れと思つてゐたから…。

二人はお互ひの身上話を、面白をかしく打明け合つた。平生無口の僕が妙にオシヤベリになつて、今までの投げ遣りな生活の話を、投げ遣り式にブチマケたのに對して女將は、長崎を振出しにして東京、上海と渡り歩いて來た間に經驗した色々な男の話をして聞かせた。さうして年の若い割に女に冷淡な男は、年を老つてから情が深くなるものである。さうして、そんな男こそは一番頼もしい男だと聞いてゐたが、けふが今日までソンナ人間に一人も出會はなかつたと云つて笑つた。だから僕も笑ひながら彼女に杯を差した。

「それぢや十梨が可哀さうだよ」と口元まで出かかつたのを我慢しながら……。

ところが其時だつた。僕が凭りかゝつて居た背後の床柱の中で……ヂヂヂ……ヂイヂイヂイ……ヂヂヂ……と妙な音がしたのは……

……・・・――――――・・・……SOS！……

［やぶちゃん注：●「……・・・――――――・・・……SOS！……」は底本では中間部の最初の「――」が二分の一で切れて、後に短いダッシュが続くが、これはモールス信号を文字化したものである以上、これは植字の際のカスレと見做した。「全集」は上記と同じである。］

僕はビツクリして振り返つた。萬一の時の用心に床柱の中へベルが仕掛て在る事を、タツタ今聞いたばかりだつたから……。

しかし女將は驚かなかつた。

「待つて居なさいよ」

と眼顏で押へつけながら立上つて手早く帶と襟元を直した。

「ここは妾だけしか知らない地下室だからね。平氣で丹次郎をきめて居なさいよ」

［やぶちゃん注：●「丹次郎」為永春水作の人情本「春色梅児誉美」の主人公夏目丹次郎。色白の美男の高等遊民で徹頭徹尾の優男。複数の女性に愛されることから江戸末期の柔弱な色男の代名詞となったが、現在は廃れた。一見文弱な上村を比喩して妙。］

と云ひ云ひ先刻這入つて來た押入の中の廻轉壁から出て行つた。

僕も直ぐに落付いてしまつた。……女將は俺を味方に付けて何かの役に立てる積りだな…俺を片付ける積りならコンナ馬鹿念の入つたもてなしをする筈は無い……という事を最初の女將の素振りから百パーセント感付いて居たのだから……さうしてアトは十五萬圓の在所と、ニーナの短劍の行方を探り出せば、一切合財が放了になるんだ……と度胸をきめながら立上つて室の隅のガソリン煖爐の火を大きくした。すこし醉ひ醒めがして來た様に思つたので……。それから元の座へ歸つて、膳の横に置いて在るカツトグラスの水瓶へ手をかけて居る處へ、思ひもかけない次の間の衣桁の蔭から、幽靈の様に女將の姿が現はれたので、ちよつと眼を瞠らせられた。

［やぶちゃん注：●「放了」車の免許を持たぬだけでなく、賭け事やゲームにも私は疎い迂闊な人間である。多分そうだとは思ったが、ウィキの「和了」から引いて注とする。『和了（ホーラ）とは、麻雀において、手牌を一定の形に揃えて公開すること。他のゲームにおける「あがり」に相当する。このため、一般的にはあがりと呼ばれ、これを動詞化して「和了る」「和がる」「和る」のように表記されることもある』。『最も典型的な得点方法であり、基本的には、各プレイヤーは自身の和了を目指すとともに、他のプレイヤーの和了を阻止するよう摸打する』（「摸打」は「モウダ」「モウター」と発音し、自摸と打牌からなる一連の行為を指す。ここはウィキの「摸打」に拠った）『和了によりその局は終了し、次の局に移る』とある。］

「何だつたかね」

と僕は水を飲み飲み問うた。

しかし女將は答へなかつた。崩れた丸髷をうつむけて下唇を噛んだまゝ、僕の前まで來てペタリと坐り込むと、イキナリ僕の手に在つた水瓶を取上げてゴクゴクと口から口へ飲んだ。それから氣を落付けるらしくフーウツと一つ溜息をすると、僕の顏を眞正面から見い

見い大きな眼をパチパチさせた。

「どうしたんだ。一體……」

女將はちよつと舌なめずりをした。

「お前さんは此處へ來る事を誰かに云つて來たの」

「ウン別段云つた譯では無いが……あの手紙を上等兵が見て居たからね」

「……まあ……あの手紙つて何の事……」

「君が會計係の名前で出したぢやないか。銀の莨入を渡すから來いと云つて……だから來たんぢや無いか」

女將は又、眼をパチパチさせた。シンから呆れたやうな表情で僕を見て居たが、やがてヂツと眼を閉じてうなだれた。何か考へて居るらしく肩で息をしてゐたが、そのうちに其呼吸がだんだん荒くなつた。

僕はその間に冷えた盃を干してゐた。また何か芝居を始めるのかな……と思ひながら……。

その眼の前で女將は一切を否定する樣な恰好で、丸髷の頭を強く左右に振つたと思ふと、やがてパツチリと眼を見開ゐた。冴え切つた顏色と据わつた眼付で、今一度ヂイツと僕の顏を見た。空恐ろしい魘えた聲を出した。

「あんたは欺されて居るのね」

僕は返事をしなかつた。モウ一パイ冷めたい酒を干しながら次の言葉を待つた。

「あんたは憲兵を馬鹿にしてゐたでしよう。何が出來るかと思つて……」

僕は默つてうなづいた。

「……それが、いけなかつたんだよ」

「どうして……」

と僕は冷笑した。女將は鬢のホツレ毛を掻き上げたが、急かホントかその指がわなないて

居た。やはり靜かな魘えた聲で云つた。

「……笑ひ事ぢや無いんですよ。憲兵は最初から、あの司令部の中に赤軍のスパイが居ると思つて疑ひをかけて居たんだよ。さうして其のスパイがイヨイヨあんたに違ひ無い事がわかつたから、わざと實地調査にかこつけて捜索本部を引上げたんだよ。さうして、あんたを僞せ手紙で追ひ出して置いて、あんたの私物箱から何からスツカリ捜索したに違ひ無いんだよ」

「どうしてわかる」

「あんたはわからないの」

「わからないね」

「うちの會計の阪見はその筋のスパイに違ひ無いんだよ。お金を取り立てに行くふりをして、色んな人達と連絡を取つて居るに違ひ無いんだよ。妾はズツと前から感付いてゐたんだけど……」

女將の言葉は何處までも靜かに魘えて居た。

僕はヂツと腕を組んで考へた。此處が生死の瀬戸際だと思つて……。その間に女將は話し續けた。一々念を押す樣に繰り返して……

……十梨と阪見は、どちらも特務機關の參謀に直屬する軍事探偵で、十五萬圓事件は單にオスロフを葬るための芝居に過ぎなかつたらしいこと……。

……星黑はキツト無事でゐて、何處かに隱れて居るに違ひ無いこと……

……オスロフ殺しの陰謀連中は、無理にも全體の責任を僕……上村當番卒の仕事にして發表して、白軍と哈爾賓市中に居るオスロフの乾兒たちの不平を押へ付けようとして居るに違ひ無いこと……。

［やぶちゃん注：●「乾兒」音「ケンジ」で、中国語で子分・手下の意（他に男の養子の意もある）。本邦では専ら、極道の用語として用いられた。］

……ツイ今しがた會計の阪見が家の中をグルグルまはつて誰かを探してゐるらしかつた

が、間もなく司令部から電話が掛つて、女將へ直接に、僕の行方を問合(とひあ)はせて來たこと……。

……だから女將は取りあえず「モウお歸りになりました」と返事して置いたが、しかし司令部が、そんな事で納得したかどうかわからない。……だからモウ銀月の周圍には、水も洩らさない網が張つて在るに違ひ無いこと……。

……だからその網が解けるまで此の部屋に隱れて居なければならないこと……。

そんな話を聞いて居るうちに僕はニヤニヤ笑ひ出した。……笑はずには居られなくなつたからだ。さうして無言のまゝ立上つて、部屋を出て行(ゆ)くべく押入れの襖(ふすま)を明(あ)けた。

その時の僕の冷靜だつたこと……氣の強かつたこと……今思ひ出しても不思議な位(くらゐ)であつた。

流石の女將も、さうした僕の態度を見るとハツとしたらしい。長襦袢(ながじゅばん)の裾を亂しながら中腰になつた。

「何處へ行(ゆ)くの……あんたは……」

「ウン。司令部へ歸るんだ」

「そのまゝで……」

「あゝ。何なら軍服を出して呉れ給へ」

「……出して……上げてもいいけど何しに歸るの」

「わかり切つてゐるぢやないか。自首して出るのさ」

女將は毒氣(どくき)を拔かれたらしくペタリと坐り込んだ。今度こそホンタウに驚いたらしい。ホツと太い息を吐いた。

「……まあ……殺されてもいゝの」

僕は冷笑し續けた。ヤツト芝居氣(しばゐき)の拔けた女將の態度を見下ろしながら……。

「むろん。覺悟の前(まへ)さ。僕が銃殺される前に何もかもわかるだらう。ホントの事實が……」

「……」

「僕は贔屓をつくのは嫌いだ」

「……まあッ……」

と女將が僕に飛びついて來た。色も飾りも無い眞劍な泣き預匠なつた。

「……あんたは……妾を棄てて行くの……」

「ああ。その方が早わかりと思ふからさ。なるべく身體を大切にして、餘計な氣苦勞をし無いやうにしてね……か……ハハハ……」

女將の顏色がサッと一變した。僕の兩腕をシッカリと掴まえたまま、限を剥き出して振り仰いだ。その顏を見ると僕は何かしら、あらん限りの殘忍な言葉を浴びせてみたくなつたから、不思議であつた。

「ハハハ。何も驚く事は無いさ。女の知惠つてものは底が知れてゐるからね」

「……」

「阪見は要するにお前さんのオモチヤさ。骨拔人形さ。モットはつきり云へば男妾さ。まだ會つた事は無いが、大概寸法はきまつてゐるね。……さうだらう。僕に出したアノ手紙はこの家に在る器械で打たせたんだらう。お前さんが大急ぎで阪見に口うつしにしてね……さうだらう……女の文章はぢきにわかるんだよ……僕には……」

「……」

「それで何もかも判然るぢやないか。十五萬圓事件の邪魔になるオスロフは十梨が打つた密告文で片付いた。星黑主計も、十梨とお前さんの知惠で始末してしまつた。日本の憲兵はどこまでも日本の憲兵で內地の警察とは違ふんだから、絶對に筋書が曝れる氣遣ひは無い。アトは十梨か僕かと云ふ寸法だらう。浮氣なお前さんの事だからね。ハハン…」

「……」

「僕はね。僕のアタマの良さに愛憎が盡きたんだよ。何もかも解らなくなつちやつたんだよ……タツタ今」

眞白になるまで歯を噛み締めてゐた女將の唇の兩端がビクビタと震へ出した。兩方の白眼がギリギリと釣上つて血走つた。

「……だから……僕が銃殺されたら何もかもわかるだらうと思つてね……ハハハ……」

僕の兩腕をシツカリと握つてゐる女將の手の戰きが明瞭に感じられた。さうして血走つた白眼が、みるみる金屬じみた光をキラキラさせ始めたと思ふ間もなく、女將は、素早く僕の兩腕を離して、黑繻子の帶の間に指を突込んだ。

［やぶちゃん注：●「黑繻子」「繻子」は「緞子」に既注済み。このシーンではグーグル画像検索「黑繻子」をリンクしておくに若くはあるまい。］

豫期してゐた僕は、その手を引つ攫んで思ひ切り引寄せた。キラリと光るピストルを引つたくりざま力任せに突飛ばした。

女將の身體にはニーナの半分程の力もなかつた。ヒヨロヒヨロと背後へよろめいて行く拍子にガソリン煖爐を蹴返すと、細いパイプで繋がつてゐたタンクがケシ飛んで青い焔がパツと散つた。女將の白い膝小僧のまはりから、水色のゆもじの裾にかけて飛び付いた……と思ふうちに慌てゝ起上りかけた女將の顏の前を、ボロボロとオリーブ色の焔が流れ擴がつた。

「アレツ……助けてツ」

と叫びながら女將は火の海の中を僕の方へ這ひ出して來た。燒けた片鬢の毛をブラ下げながら……。

「……お金を……お金を……みんな上げるから……アレツ……」

その地獄じみた表情を見ると僕は一層殘忍な氣持になつた。……何だ腐つた金……と云ひ度い氣持ちでその顏を眼がけて力一パイ短銃をタヽキ付けると、立上りかけた女將の胸に當つた。それを慌てゝ拾ひ取りながら彼女は、僕に狙をつけようとしたがモウ駄目だつた。

その執念深い、青鬼のやうな表情が、みるみる放神したやうに佛顏になつて行つた……

と思ふと、白い唇を力なくワナワナと震はしながら、黒焦げの斑紋を作つてゐる疊の上にグツタリと突伏してしまつた。

僕は悠々と押入れの中紅這入つて、襖をピツタリと閉て切つた。這入りがけに見て來た通りに正面の廻轉壁を拔けて、木の香の籠もつた湯殿へ拔けて、何の苦もなく地下室の階段に出た。

その階段の上の廊下へ出て、マツトの下の落し戸をキチンと閉めてしまつた處へ、知らない女中が一人通りかゝつたから何喰はぬ顏で、

「僕の軍服を出して呉れないか」

と賴んでみると、

「ハイ。かしこまりました」

と云ふなり大きな鏡の在る西洋間に案内した。芳ばしいお茶と一緒に番號札の附いた亂籠(みだれかご)を出して呉れた。

……ナアンダイ……と思はせられながらチヤンと着換へて玄關を出た。

往來を一町ばかり歩いてみたが、誰も咎める者が無い。張番(はりばん)らしい人影すら見えない。星の光りが大空一パイに散らばつてゐるばかりである。

［やぶちゃん注：●「往來を一町ばかり歩いてみたが」は「全集」では（正字化した）『往來を司令部の方向へ一町ばかり歩いてみたが』と加筆している。なお、以下、一行空きである。］

人間の運命といふものは大抵、一本調子の直線か弧線を描いてゐるものだが、それでも時々人を驚かす。だから、それが放物線なぞを描いて來ようものなら、ドレ位(くらゐ)、人を不思議がらせるかわからない。

ところが僕の場合は、それが突然にポキンと折れ曲つた鋭角を描きあらはして來たのだ。

それから一時間ばかり後(のち)の僕は、快速らしい白塗のモーターボートに乘つて、松花江(しようくわかう)を下流へ下流へと滑走していた。運轉をしてゐるのは一昨夜、僕を刺さうとしたニーナで、時速七、八哩(マイル)も出して居たらうか。

［やぶちゃん注：●「時速七、八哩(マイル)」時速十一・三～十二・九キロメートル。］

「このボートは英吉利(イギリス)の石炭屋さんが置いて行つたソアニー・クロストの十二シリンダーよ。素人(しろうと)に扱へないから買手(かひて)が無かつたんですつて……七十五哩(マイル)まで出るつて云ふのにタツタ八百五十弗(ドル)だつたのよ」

［やぶちゃん注：●「ソアニー・クロストの十二シリンダー」商標らしいが不詳。私はメカにも冥い。識者の御教授を乞う。それにしても十二気筒というのが凄いぐらいは分かる。●

「七十五哩（マイル）」時速百二十一キロメートル（！）。●「八百五十弗（ドル）」ネット上の情報によれば、一九二〇年代（本作の作品内時間一九二〇年）の一米ドルは当時の日本円で二円で、凡そ現在の六百円相当とあるから、五十一万円相当となる。十九の娘の台詞としては法外な金額を「タツタ」と言うことを含め、台詞全体、完全にステキにイッてる！」

とニーナが説明したが、しかし萬一を警戒するためにランタンを消して、成る可く岸沿ひに走つてゐたので、微かな機械の音とダブリダブリと岸を打つ暗い波の音しか聞えなかつた。細い月はもうトツクに上流の方へ落ちて居たが、それでも河明りがタマラなく恐ろしかつた事を考へると僕は、いつの間にか酔ひから醒めてゐたらしい。

ニーナは片手で巨大な日本梨（にほんなし）を齧（かじ）つてゐた。ガソリンの罐（くわん）を蔽（おほ）うたアンペラの上に、新聞紙（しんぶんし）に包んで並べてあつた一つを、ニーナが云ふ通りに丸剝（まるむき）きにしてやつたものであつた。

［やぶちゃん注：●「アンペラ」アンペラの茎を打って編んだ筵。アンペラはイネ目カヤツリグサ科アンペライ属 *Machaerina* の多年草。湿地に生え、葉は退化して鱗片状をなし、高さは〇・五～二メートル。茎の繊維が強い。熱帯地方原産。アンペラ藺（い）。呼称はポルトガル語〝ampero〟又はマレー語〝ampela〟に由来する。］

それを受け取つたニーナは暫くジイツと考へて居た様であつた。何が悲しいのか梨を持つた右手の黒い支那服の袖で、シキリに眼をコスリまはして涙を拭いて居る様にも見えたが、やがてガブリと梨の横つ腹に齧み付いて、美味（うま）さうに溢を膨らますと、汁を飲込（のみこ）み飲込み話し出した。案外に平氣な投げやりな口調で……。

［やぶちゃん注：●「何が悲しいのか梨を持つた右手の黒い支那服の袖で、シキリに眼をコスリまはして涙を拭いて居る様にも見えた」この涙が――いい――。この涙の意味は、後に続くニーナの長い台詞の最後の方になって明らかにされる。●「支那服」「全集」も同じく『支那服』である。本作から脱線するが一言言っておく。私は本作でここまで『支那人』を『中国人』と断りなしに書き換えてきた「全集」編者が『支那服』を書き換えないことを

正当とする論理を全く以って認めない。おかしい。」

「……何處までもアンタと一緒に行くわ。アンタの様な何も知らない正直な人間を、仕事の邪魔になるから殺す……なんて決議をした奴等は、モウ決議した時から妾の敵だわ。日本の官憲だつて白軍だつて何だつてアンタに指一本でも指した奴はミンナ敵にして遣るわ。だつてアンタを怨んだり罰したりする法なんて何處にも無いんだもの。

……イイエ。アンタは何も知らないの。無頼漢街と、裸體踊りと、陰謀ゴツコが哈爾賓の名物だつて事をアンタは知らないで居るのよ。殺される譯が無いつたつて殺される時には殺されるのが哈爾賓の風景なんだもの。だから何が何だか見當がつかなくなる筈よ。間違ひ無いのはお太陽様と松花江が、毎日反對に流れて居ることだけなの。さうして其の中で妾がタツタ一人ホントの事を知つてゐるだけなのよ……さうぢや無いつて云ふならアンタの手から短劍を奪り上げて行つた人間の名前を云つて御覽なさい。當つたら豪いわ……ホーラ。ネ。知らないでせう……ホホホ……

［やぶちゃん注：●「無頼漢街」ナハロフカ。既注。プリスタン西側隣接地の低湿地帯で古くからの白系ロシア人難民の貧民街であった。志賀直哉に師事した女性作家池田小菊（明治二五（一八九二）年～昭和四二（一九六七）年）の、昨年発見された未発表小説の題名は「ナハロフカ（無能者）」である。池田が満州事変直前にハルピンを旅行した体験を素材に昭和七（一九三二）年に執筆したものとニュース記事にあった。ロシア語の綴りは探し得なかった。なお「全集」は『ナハロハ』とルビする。●「裸體踊り」ニーナが上村に「アンタは何も知らないの」と前置きして言うのだから、これは非合法の秘密会員制のストリップ小屋のことだろうか？］

……だから妾の云ふ事をお聞きなさいつて云ふのよ。馬鹿正直に人の云ふなりになつて、何が何だか解ら無いまゝマゴマゴウロウロして居るうちに、ヘツドライトもサイレンも番號札も何にも無いトラツクの下に敷かれつ放しになつたら、ドウするの……誤解の解けるまで

どこかに隠れて身の明りを立てなくちゃ嘘だわよ。……捕まりさうになつたら構はない。此の河をハバロフスクまで行つて、あそこで油と食料を買ひ直して、それからニコライエブスクまで下つて行く。そこから汽船で樺太に渡つて日本に逃げ込むだけの事よ。妾日本が見たくて見たくてたまらなかつたんだから丁度どいゝわ。

［やぶちゃん注：●「明り」「全集」は『証』（證）。ルビはないが、普通に読む者は「あかし」と訓ずるはずである。　●「ニコライエブスク」「全集」は『ニコライエフスク』。現在のニコラエフスク・ナ・アムーレ（Николаевск-на-Амуре）はロシア極東部の文字通りの極東の町で間宮海峡の北を挟んでサハリン（樺太）の北部と対峙する。アムール川河口から八十キロメートルほど上流左岸（北岸）にある港湾都市で、ハバロフスク地方ニコラエフスキー地区の行政中心都市。漢字では「尼港」と表記された。ハバロフスクからは九百七十七キロメートルとウィキの「ニコラエフスク・ナ・アムーレ」にはある。因みに地図上で単純に直線計測すると直線でもハバロフスクからここまでが六百五十キロメートル、ハルピンからではやはり直線で千三百キロメートルを超え、気の遠くなるような涯である。そこへ行くことを隣町に行くように語るニーナ……そこから樺太へ行って、日本へ行きましょうよ！私、日本、大好きよ！……これまたステキな少女！］

……妾は主義とか思想とか云ふものは大嫌いだ。チツトも解らないし面白くも無い。「理屈を云ふ奴は犬猫に劣る」つて本當だわ。

……妾には好きと嫌いの二つしか道が無いのだ。妾はその中で好きな方の道を一直線に行くだけだわよ。

……妾が赤軍に加勢して居たのは、アブリコゾフを好いてゐたからだ。妾はツイ二三日前まで赤軍がドンナ事をして居るものなのかチツトも知らなかつたのだ。たゞアブリコゾフを生命がけの男らしい仕事をしてゐる人間と信じ切つて居ただけだ。それ以外に何の意味も無かつたのだ。

……今だつてオンナジ事だ。妾は何がなしにアンタを救ひ出さずには居られなくなつたのだ。赤とか白とか云つて卑怯な陰謀の引つかけくらばつかりしてゐるサナカに、アンタみたいなお人好しの正直者を放つたらかしておくのが恐ろしくてたまらなくなつたのだ。コンナ危なつかしい馬鹿々々しい鬼ゴツコの中から、とりあへずアンタを引つぱり出してしまひた度くなつたのだ。さうして二人でコツソリと事件のドン底に隠れてゐる十五萬圓を探り出して、日本の官憲と、白軍と、赤軍を一ペンにアツと云はせてみたくなつたのだ。

［やぶちゃん注：●「引つかけくら」引っ掛けっこ。掛け合い。「くら」は「競」で、所謂、「くらべ」の略。「にらめっくら」「かけっくら」、即ち、「にらめっこ」「かけっこ」の「～こ」と全く同じで、動詞の連用形或いはそれに促音の付いた形につけることで、そうしたある種の競争をすることの意を添える接尾語である。］

……妾はブルジヨアでもプロレタリアトでもない。だからブルジヨアでもプロレタリアトでも乞食でも泥棒でも構はない。正直な一本調子の人間が好きだ。だから賄賂を取らない。贔屓をつかない。ニユーとしてゐる日本の官憲は、地下室にモグリ込んでゴヂヤゴヂヤした策略ばかり考へて居る露西亜人だの、ジヤンクの帆みたいに贔屓のツギハギをしてゆく支那人なんぞよりもドレくらゐ好きだか知れやしない。

……だけども惜しい事に日本の軍人はアンマリ正直過ぎる様だ。人の良い、職務に忠實な日本の軍人は悪い知恵にかけてはトテモ普通の日本人に敵はない様だ。銀月の女將と十梨通譯が書いた筋書に手もなく乗せられてオスロフをどうかしてしまつたのを見てもわかる。それが大間違ひだつた事は、赤軍の連中が肩を組み合つて喜んで居たのを見てもわかる。星黒だつてさうだ。軍人だけに正直過ぎたから殺されたのだ。日本の軍人は普通の日本人と人種が違ふのぢや無いかと妾は思つてゐる。

……その日本の軍人の中でも妾はアンタが一番好きになつちやつた。妾はアンタが銀月の中に這入つた事を知つてゐたけど、チツトも心配なんかしなかつた。アンタは外の軍人と

おんなじくらゐ正直な上に、赤の連中がピリピリするくらゐ頭がよくて、おまけにスゴイ勇氣と力を持つて居るんだからね……銀月の女將の手管なんかに引つかゝる氣づかひは絶對に無い。キツト無事に切り抜けて銀月を出て來るに違ひ無いと思つてゐたんだからね……。

……イヽエ。オベツカなんて云つたら妾、憤るわよ。妾はモウ其のズツト前からアンタを見貫いて居たんだよ。……妾がアンタを殺さうとしてタタキつけられたでしよ。あの屋上でさ。あの時からよ……あの時から妾はアンタを殺すのを止めたんだよ。アンタが弱蟲弱蟲つて云ふ評判を聞いて居たから、眞實かと思つてたら、トテモ強いんだもの……おまけに彼の素早さつたら……トテモこの人には敵はないと思つたわ。だから助けて貰つた時には、ずゐぶん極りが悪かつたわ。

……アンタの手から短劍を奪ひ取つたのほ、ヤツパリ妾よ。……ナアニ……何でもなかつたの……妾はあの時に追つかけて來た憲兵をモウ一度裏梯子の蔭に隱れてやり過したの。どこの憲兵でも、あんなボコボコした長靴を穿いてゐるから駄目よ。犯人を逃がす爲に穿いてゐるやうなもんよ。だけど其の憲兵が行つてしまつた後で、妾はフト短劍の鞘だけ握つて居るのに氣が付いたから、惜しくなつて引返したのよ。キツト其處いらに落ちて居るに違ひ無いと思つてね……たゞ夫れだけの事だつたのよ……だつてアノ短劍は、モスコー出來の上等なんだもの。惜しいぢや無いの、今こゝに持つてるわ……アンタだつて拔身のまゝ持つて居たら怪我するぢや無いの……ホホホ……。

ところが引返してみるとアンタが大舞踏室の窓から覗き込んで居るでせう。今にも飛込みさうな恰好で、妾の短劍を逆手に握つて居るでせう。だから妾もソーツとアンタの背後から室の中を覗いてみたら、タツタ一眼で、何もかもが駄目になつた事が判明つたの。それと一緒にアンタが斯樣な處へ飛込んで、オスロフを助けようとするのは危險いと思つたから、思ひ切つて短劍を引つたくると其のままモウ一度、屋上から裏階段へ拔けて駈け降りたの。さうして通りかゝつたタクシーに飛乘つて、埠頭に來て、そこから向う岸のコサツク部落に

住んで居るドバンチコつて云ふ花造りの爺やのところへ遁込んだの。

……そのドバンチコつて云ふのは、ズツト前に妾の處に居た掃除人でね、妾の身の上をよく知つて居て、蔭になり日向になり可愛がつてくれた、トテモ信心深い爺やなの。それだのに銀月の女將の意地惡が司令部の内情を探らせ度いばつかりにオスロフを欺して、アノ馬鹿聾に化けた朝鮮人夫婦を妾んとこへ押込んだお蔭で、とうとう追ひ出されてしまつたのよ。妾はお母様から聞いてチヤント知つてゐたけど、爺やが云つちやいけないつて云つたから默つて居たのよ。それあ可哀想な、正直な爺やなの……妾その爺やにアンタの話を聞かせてビツクリさせて遣つたわ。妾もずゐぶん無鐵砲だけど、アンタの向う見ずに負けちやつたわ。あのサナカに飛込んでオスロフを助けやうなんて……。

……ドバンチコ爺さんは妾の話をトテモ感心して聞いてゐたわ。マン丸く見開いた眼に涙を一パイに溜めてね。さうして、「其の上村といふ兵隊さんこそホンタウの勇者だ。キツト正教會の信者に違ひ無い」つて云つて眼をシヨボシヨボさして居たわよ。何故つて云ふとね。正教會のお説教の本にコンナ文句があるんですつて……「一羽の雀だつて決して無駄に殺しちやいけない。神様が其の雀にお附けになつた價値は、殺した後でなければわからないものだ。さうして其時に殺した人間はキツト後悔するものだ」つて云ふのよ。だから無暗に人を殺さうとしては可けないつて云つて、妾は昨日から散々お説教を聞かされちやつたのよ。

……妾は其のお説教にスツカリ降參しちやつたわ。感心しちやつたわ。だつてチヤンとその通りになつて來たぢや無いの。ね。……アソタは一羽の雀よ。いゝこと……ホホホ……。

……妾と夫婦約束して居たアブリコゾフが捕まつた事は、ドバンチコの處へ行つてから聞いたのよ。お蔭で赤軍の祕密がバレてしまつたと云つて、其話を知らせに來たレポーターが憤慨してゐたわよ。妾はそれつ切りアブリコゾフに愛想が盡きてしまつた。あんな意氣地なしの襤褸男とは夢にも知らなかつた。

［やぶちゃん注：●「レポーター」この場合の“reporter”は左派運動家の中の「通信員」の意。］

……けれど妾は口惜しがる隙なんか無かつた。今度はアンタを救ひ出さなければならなかつたから……。十五萬圓事件の陰謀と、赤軍の計畫して居る哈爾賓の嗤きまはし計畫と、オスロフ一家の祕密死刑に對する白軍のヒドイ怨みの中から、どうしてアンタを救ひ出さうかと思つて一生懸命になつて居た。

……妾は其爲に思ひ切つてバリカンで頭を刈つてしまつた。それから中學生に化けたり、メツセンジヤーボーイの自轉車を乘逃げしたりして、町中に散らばつてゐる赤軍のスパイから情報を聞き集めて居るうちに種々な事がわかつて來た。

……何よりも先に哈爾賓附近の赤軍には「日本軍が遠からず滿州を引上げるに違ひ無い。だからそれを機會に哈爾賓を中心にして滿州を赤化してしてしまへ」といふ指令が來てゐたので、各地方から、あらゆる優秀なスパイを集中させて居た。だから今度の事件でも赤軍の方から探らなければトテモ眞相が攝めなかつたに違ひ無い。その中でも朝鮮銀行から出て行く日本軍の軍資金は、ズツト前から赤軍が涎を垂らして居たもので、それに連れて金費ひの荒い星黑主計と十梨通譯の行動なんかが、スパイ連中の注意の焦點になつて居たのだから堪らない。何もかも手に取るやうにわかつて居た。

……星黑と十梨が十五萬圓を拐帶して土曜日の晩に逃げ込んだのは、やつぱり彼の料理屋の銀月だつた。それまで二人は何處かに隱れて飮んで居たらしい。日が暮れてからテイルランプを消した自動車に乘つて銀月に乘付けた二人の姿が、張込んでゐたスパイの眼にチラリと止まつたのだ。

……だけど星黑は可愛さうに、その晩から、そのあくる日の日曜の晩にかけて、殺されるかドウかしてしまつたらしいの。

……何故つて云ふと星黑は、その土曜日の晩から月曜日の夕方まで一度も姿を見せなかつ

たのに、十梨は土曜日の夜遅く、一旦、司令部に歸つて、その翌る朝早くモウ一度銀月へ行くと、スツカリ姿を變へて裏口から出て來た。カーキ色の飛行服に身を固めて、大きな塵除けの眼鏡をかけて、大型のトランクを積んだサイドカーを押してゐたので、ちよつと誰だか見當が付かなかつたが、それでも背丈の高さと猫背の恰好が、どうやらソレらしく見えたので、もしやと思つた張込みの赤の一人が、自轉車で一生懸命に追ひかけてみた。すると、そんな事とは氣付かないらしいサイドカーが、意外千萬にもグングン傅家甸を突き拔けて、格別用事の在りさうにも無い河沿いの堤防の上を、一直線匠下流の方へ飛ばし始めたので、スツカリ面喰らはせられてしまつた。さうして、とうとう途中で遲れて見失つてしまつたが、それでもヤツト四十露里ばかり下流の河岸で、飛行服を脱いだ通譯姿の十梨が、先刻のトランクとサイドカーを河に沈めている處に間に合つたから、その位置を間違はない様に見定めた。

［やぶちゃん注：●「四十露里」約四十キロメートル。「露里」はメートル法以前のロシアの長さの単位の訳語で、単数形は“верста”（versta：ヴィルスター又はヴェルスター、ベルスタ、エルスター等と表記）、複数形は“вёрсты”（vyorsty：ビョールスティ又はヴョールストイ）であるが、日本ではカタカナ表記では複数形でも「ヴィルスター」表記が普通である。しばしば日本の「里」に比して「露里」と訳される。但し、日本の律令制の「一里」が三・九二七キロメートルであるのに対し、1верста（＝500саженьサージェン。ヴィルスターの下位単位）は約一・〇六六八キロメートルに過ぎず、現在の我々の感覚的にも、一ヴィルスターを一キロメートルと言った方がすっきりするし、間違いがない。］

……それから十梨は、そこいらに落ちてゐる流木を拾ひ集めて一露里半ばかり隔たつた處に在る小高い丘の上に登つて行つた。そこで手に持つた包みの中から、軍服らしいものを取り出して、流木と一緒クタに石油を振りかけながら燒いてゐる様子であつたが、距離が遠かつたから、その軍服の肩章や、襟章なんかはよくわからなかつた。そのうちに十梨は立ち上

つて、地圖らしいものをポケツトから出して照し合はせながら、四方八方を見まはし初めたので、見付かつては大變と思つて、草の中に潜りながら引返して來たが、十梨の姿は、そのまま下流の方向へ、草を分け分け消え失せて行つたやうであつた。……といふ報告が、その日の午後になつて、ナハロフカの舊教會に隱れてゐる、赤軍の首腦部の處に來た。

［やぶちゃん注：●「一緒クタ」底本では「一緒コタ」。誤植と断じ、「全集」に従った。●

「十梨の姿は、そのまま下流の方向へ、草を分け分け消え失せて行つたやうであつた」次の段で赤軍の連中が不思議がっているが、ここは「下流」であることが大きな意味を持っている。十梨はデッチアゲをリアルに見せるため、時間稼ぎは無論、何よりも実際に自身を疲労困憊させるために、わざわざ松花江の下流方向へ向かい、それからご苦労にもまた上流のハルピン市街へと戻るルートを敢えて採っているのである。」

……赤軍の首腦部の連中は、かうした十梨の怪行動について、ずゐぶん頭をひねつてゐた。星黑が自分で軍服を燒ゐたやうに見せかけてゐるらしい事は、アラカタ推測が付くが、それから徒歩で、下流の方向に行つた理由がどうしてもわからないと云つて困つてゐた。前の日の土曜の晩に、コツソリ星黑を誘ひ出して、其處まで連れて來て殺したのぢや無いか。さうしてモウ一度空つぽのトランクを持つて、後始末をしに行つたんぢや無いか……と云つたやうな細かい説明をつける者も居たが、しかし、どつちにしても其のトランクの中味が、お金ぢや無いかと云ふ疑ひはみんな十分に持つてゐた。

……赤軍の連中は、だからその晩の七時半頃に、四五人でサイドカーとオートバイに飛乘つて、現場に行つてみた。妾も其の中に混つて居たが、案内に立つた赤の一人が、「ここだ」と指した川隈に小さな碇の付いた綱を投げ込んで、サイドカーと結び合はせて沈めて在つたトランクを草の中に引上げて、細い月あかりの下で開いてみると、中からは、後頭部と下腹部を背後から射拔かれた星黑主計の、丸裸體の變色屍體と、十梨が脱いで行つたらしい飛行服と、重たい鐵片が出て來た。それはずゐぶんスゴイ見物であつたが、しかし、お金は

一文も這入つていなかつたから、そのまゝ元の通りに暗い水の底へ沈めて來た。

［やぶちゃん注：●「河隈」川の流れが折れ曲っている箇所。蛇行部。　●「後頭部と下腹部を背後から射抜かれた星黑主計の、丸裸體の變色屍體」「全集」では「裸體」の箇所を除いてルビがない（本全集は全体が異様にルビに禁欲的で、久作の味なルビ打ち部分が著しく減衰させられている）。私はこれと「後頭部と下腹部背後から射抜かれた星黑主計の、丸裸體の變色屍體」という文字列とはこれ、読者に全く異なった印象、ルビありの方が頗る凄惨な遺体の印象を与える、と思う。これは全く別な表現である。］

……だから……さうした事實から考へ合はせてみると、十五萬圓のお金は、十中八九まで銀月の中のドコかに隱して無ければならぬ。つまり銀月の女將と、十梨通譯だけが知つてゐる祕密の場所に仕舞つてなければならない筈であつたが、さうした場所は今の處、銀月の家の中よりほかに考へられない……と云ふのが、みんなの一致した意見だつた。

……銀月の女將がカタリナ皇后にも負けない大惡黨で、十梨が其のお先棒になつてゐる證據は、あれだけの事實で百二十パーセントに裏書きされてしまつた。……もつともモウ一人、阪見つて男が、銀月の男妾になつて居るつて話だけど、此の男は、大變な飮み助で、いつもグウグウ寢てばかり居るので、赤軍ではテンデ問題にしてゐなかつた。打つちやつて置いたら今にキツト、十梨が銀月に入り込むに違ひないつて云つてゐた。

［やぶちゃん注：●「カタリナ皇后」ロマノフ朝第八代ロシア皇帝である女帝エカチェリーナ二世アレクセーエヴナ（Екатерина II Алексеевна　一七二九年～一七九六年）のことであろう（ドイツ語や英語由来の“Katharina II.”は「カタリーナ」と音写される）。第七代皇帝ピョートル三世（一七二八年～一七六二年）の皇后であったが、一七六二年六月二十八日（皇帝在位約六ヶ月）にして自らを支持する近衛部隊のクーデターによって女帝となった。参照したウイキの「エカチェリーナ2世」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、

『私生活面では生涯に約十人の公認の愛人を持ち、数百ともいわれる男性愛人を抱え、夜ご

と人を変えて寝室をともにしたとする伝説もある。孫のニコライ一世には「玉座の上の娼婦」とまで酷評される始末であった』とある。」

……銀月の女將はアンタを味方につけて、何かの役に立てようと思つて御馳走をしたに違ひ無いのだ。萬一、十梨が裏切りさうな素振りを見せた場合に、アンタの手で片づけてて貰はうと思つたのかも知れない。それともアンタを殺すか、お金を遣つて逃がすかして、司令部の中の事を銀月に内通してゐたのはアンタだと思はせようとしたのかも知れない。それともモツト都合よく行けば、自分と十梨の罪をスツカリ、アンタに塗り付けて今までの陰謀の尻拭ひをする計畫だつたのかも知れない。

……銀月から出た邦文タイプライターの呼出し手紙がアンタに屆ゐた事は、赤の一人が化けてゐた郵便配達夫から、直ぐにナハロフカの首腦部へ通知して來た。すると陰謀に狃れ切つてゐる首腦部の連中はタツタそれだけで、今云つた様な底の知れ無い女將の計畫を察して、その頭のスゴサに驚いてゐたが、又、その中に間もなくアンタが、ハルピン一流の床屋でお化粧をして、銀月に乘込んだ事を見張りの者が知らせて來たので、赤軍の連中は今更のように女將の魔力に驚いてゐた。さうして直ぐにも其計畫の裏を調いて、十五萬圓を此方の物にする爲に、アンタを赤軍に引入れようか、どうしようかと相談を始めた。

［やぶちゃん注：●「狃れ」「狎れる」に同じいが、「狃」は文字通り、犬が人に馴れ親しむを原義とする。］

……妾は赤軍の首腦部がアンタの事をあんまり詳しく知つてゐるので、氣味が惡くなつてしまつた。それはアンタが、司令部のお使ひを一人で引受けてゐるばかりでなく、女や、酒や、賭博なんぞを見向きもしないのでみんな不思議がつて居た……ばかりでなく閑暇さへあれば哈爾賓の市中を歩きまわつて、何かしら視察したり研究したりして居るらしいので、もしかすると日本政府の祕密監察官みたやうな人間ぢや無いかと思つて怖がつて居たせゐらしい。……しかし一方には、アンタがそんな人間ぢや無い。アンタは正直な日本の兵隊さ

んで温柔(をとな)しいお坊ちやんに過ぎない。アンタが本屋から買つて行(ゆ)く樂譜や雜誌が、高尚なクラシカルなものに限られて居るのを見てもわかる……と云ふ者が可なり多かつた。しかしアタマだけは通りがゝりの兵隊さんと違つてゐるから、此際(このさい)にウツカリした事を云ひ出して、アベコベに此方(こつち)の祕密を見拔かれる樣な事になつては大變だ。此のまゝ放つて置いて、見殺しにした方がいい。さうして萬一無事に銀月から出て來る樣な事になつたら、司令部に歸り着かないうちに、手輕く片づけた方がいゝ。十五萬圓の金を取出す機會は、アトでいくらでも考へ出せるだらう。アンナ頭のいゝ人間が司令部に居たら、將來の仕事の邪魔になる虞(おそれ)がある。現にニーナさんの仙人掌(サボテン)通信の祕密を見破つた位(くらゐ)だし、アブリコゾフを押へて根こそげ白状させたのも、あの當番卒の働きかも知れないのだから、今のうちに片付けた方がいゝと云ふ説が出て、ヤツサモツサと大議論の末、とうとうアンタを抹殺する事に話がきまつて、其の役目を妾(わたし)が仰せつかつてしまつた。其の時にも妾(わたし)は思はずカーツとなつたけど、よく考へてみるとトテモいゝ都合だと氣が付いたから知らん顏をして引受けて置いた。

［やぶちゃん注：●「祕密監察官(ゲーペーウー)」「ゲーペーウー」（ГПУ）はロシア・ソビエト連邦社会主義共和国内務人民委員部附属国家政治局（Государственное политическое управление／ラテン文字表記：Gosudarstvennoye politicheskoye upravlenie／ＧＰＵ）の通称。ソビエト連邦のレーニン及びスターリン政権下に於いて反政府的運動・思想を弾圧した秘密警察で日本語では「国家政治保安部」とも呼ばれるが（ここまではウイキの「ゲーペーウー」に拠る）、作品内時間の一九二〇年にはまだ「ゲーペーウー」は存在しておらず、その前身である「チェーカー」（ЧК）でなくてはおかしい（「チェーカー」から「ゲーペーウー」への改名は作品内時間の二年後、一九二二年二月六日である。従って話者のニーナも下村も「ゲーペーウー」を使うはずがないのである。……「……久作さん……ハヽヽ……とんだ處を藪野に突つかれましたネエ……」）。チェーカーはレーニンによってロシア革命直後の一九一七年十二月に人民委員会議直属機関として設立された秘密警察組織の通称で、正式名称は「反

革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会」（Всероссийская чрезвычайная комиссия по борьбе с контрреволюцией и саботажем）で略称も正式には「ヴェーチェーカー」（ВЧК）である。ここで参照したウイキの「チェーカー」によれば、『「チェーカー」と呼んだ場合にはこの名称から「全ロシア」が取れることとなる。その管轄がロシア共和国に留まらなかったことからこう呼ばれる場合もあるが、「ヴェー」抜きで呼んだ場合は「全ロシア非常委員会」の各都市の支部を指す可能性もあり、正式名称に沿って「ヴェーチェーカー」と呼ぶ事が好まれる』とあり、また、『ソ連では、チェーカー勤務者や一般に国家保安機関に勤務する者のことをチェキスト（чекист チキースト・非常委員）と呼んだ』とある。因みに、ＧＰＵはスターリン死後の一九五三年九月に廃止され、翌一九五四年三月十三日に改組された情報機関・秘密警察であるソ連国家保安委員会（Комитет государственной безопасности）、略称「ＫＧＢ（カーゲーベー）／ＫＧＢ」に引き継がれた。」

……しかしその次に提出された十梨通譯の處分問題は、アンタと正反對に滿場一致で、わけもなく可決された。

十梨通譯は元來上海に居る支那人の富豪と日本人の妾との間に生まれた混血兒で、第三インターナショナルに屬する歐露人の手先になつてゐたものであつたが、母親と一緒に東京に歸つて居るうちに、上手に履歷書を僞造して、日本軍に雇はれたばかりぢやない。慾道心に〇國の軍事探偵みたやうなお役目までも祕密に引受けて居ることが、思ひがけないところから判然つて來た。……と云ふのは、ほかぢやない。十梨は英語と支那語が出來ないことを自慢みたやうに云ひ觸らして居たが、ズツト前、平康里で支那人の娼婦を戲弄つてゐた言葉が純粹の上海語だつたので、もしやと思つて四馬路の支部に問ひ合はせてみると、案の定、今云つたやうな事實と一所に、上海で十梨を買收してゐた〇國人の名前を通知して來たばかりでなく、チヨコチヨコと小怜悧に裏切りしてまはるのが、十梨の持つて生れた性分らしい……と云つたやうな餘計な事まで、附け加へて來たのであつた。

［やぶちゃん注：●「第三インターナショナル」コミンテルンのこと。本作品時間内の二年前である一九一九年、レーニン率いるロシア共産党を中心とした各国共産党及び左派社会民主主義者グループによってモスクワで創設された国際的労働者組織。●「四馬路」。現在の上海市内の福州路。蘇州河の南側にあって各租界に近く、また、名高い娼婦街でもあったから、地下組織のアジトにはもってこいと言える。］

……だから赤軍の建前から云ふと、十梨は直ぐに裏切者として、處分しなければならない筈であつた。上海からも催促して來てゐる位であつたが、しかし夫れは十五萬圓の行方が解つてからの後の方がいゝ。星黑が盜み出した金は多分、銀月の中の何處かに隱して在ると思はれるが、しかしまだハツキリとした斷定は出來ない。十梨だつて油斷はして居ないに違ひ無いから、ことによるとお金はまだ銀月の女將に引渡さないで、何處かに隱して居ないとも限らぬ。だから夫れを一分一厘間違ひ無い處まで探り出すには、無罪放免になつた後の彼奴の行動に氣を附けて居るのが一番早道だらう。さうしてイヨイヨお金の在所がわからなければ、引つ捕へて白狀させる事にしよう。それから處分しても遲い事はない……と云ふ事にきまつた。だから十梨を片づける役目は、まだ誰にも指命されなかつた。

……妾はソソナ相談がアラカタきまると、話の變らないうちに大急ぎで對岸のドバンチコ爺やの所へ歸つた。けれども今度は爺やに何も話さなかつた。あの爺やはモウずつと前から妾の性分を見貫いて居たんだからね。……お嬢さんの身體にはコルシカ人の血が流れてゐる。しかも夫れはウツカリすると神樣に反逆しようとする恐ろしい血だ。憎くらしい人間にめぐり合ふと、その人間の息の根を止めなければドウしても承知出來なくなる血だ。コルシカ人は夫れを正義の血と云つて居るけれども、それは人間世界の正義で、神樣の世界の正義ぢやない。……とか何とかトツテモ六つかしい事を云つて、間がなスキがなお説教をして居たんだからね。ソンナ爺やに妾が今思つてゐる樣な事の百分の一でも話さうもんなら、それこそ生命がけで邪魔するにきまつてゐるからね……。

［やぶちゃん注：●「コルシカ人」コルシカ人（イタリア半島の西に位置するフランス領のコルシカ島の出身及びその血族）は血の繋がりや家族の絆を極めて大切にするとされ、非常に強い名誉心を持ち、一旦、恥を受けたからには死を賭してそれを雪ごうとするという。因みに、最も知られたコルシカ人はナポレオン・ボナパルトであろう。また、コルシカ島はシシリア島のマフィアと並らぶ犯罪組織コルシカ・ユニオン（Unione Corse）の発祥地の一つとしても知られるが、コルシカ・ユニオンは他の犯罪組織に比べても有意に結束力が強く手強いとされている。まさに、ニーナの「血」が騒ぐのである。］

……だから妾は家へ歸つて、ドバンチコのお神さんやウジヤウジヤ居る子供たちと一緒に正餐を食べてしまふと、みんなが球根を片づけに行つた隙にコツソリと裏口へ拔けて、花畑の向うの廐の天井裏に這ひ上つて、其處に隱して置いた寶石だの、お金だのを取り出した。それはみんなアブリコゾフやオスロフから貰つたものばつかりだつたが、それから河を渡つて傅家甸の支那人の質屋を二三軒まはつて居るうちに、妾の顏を知つてゐる支那人が居て、一番大きな贋造紅玉を、一番高く價踏みしたから、其處でスツカリ型をつけてしまつた。それから河岸のヨツトクラブへ引返してズツト前にオスロフが買ひかけた事のある此のモーターボートと、油と、そのほか色んなものを買ひ込んだ。實を云ふと郊外の踏切から線路（廣軌）の上に自動車を乘り上げて走ると、汽車よりもズツト早く逃げられると思つたけど、汽車の通らない時間を調べるのが面倒臭かつたし、途中で警戒されて居るといけないから止した。

［やぶちゃん注：●「實を云ふと……」の台詞！　スゴ！！　これだからニーナはスキさ！！

●「廣軌」私は車の運転免許を欲しいとも思わないばかりでなく、残念なことに鉄ちゃんでもない。ウイキの「広軌」によれば、広軌（Broad gauge）とは、鉄道線路のレール間隔をあらわす軌間が標準軌の1435mm（4 ft 8 1/2 in）を超えるものを言い、ロシアとモンゴルなどの近隣諸国では現在も1520mmとあり、しかもそこには『元は1524mm＝5フィート』

とあるから、当時の長さもこの五フィート、一メートル五十二センチ四ミリであったと考えられる。因みに少し後（本作発表は昭和八（一九三三）年）であるが、日本初の国産実用四輪駆動車として昭和一一（一九三六）年から量産された大日本帝国陸軍の小型軍用乗用車で、日中戦争時に使われた九五式小型乗用車（通称・くろがね四起）の全幅は一・三メートルであった（ウィキの「九五式小型乗用車」に拠る）。」

……それから色眼鏡をかけた中國人に變裝して、銀月の横町に、自動車を用意して待つてゐた。仕合せと銀月には何の警戒も附いて居なかつたので、冒險をする必要はなかつたが、其代り隨分待ち遠しかつた。第一警戒が無い爲に、アンタが銀月に居るのか居ないのか、確かな見當が付かなかつたので、何とかして探り出す方法は無いかとソレばつかり苦心して居た。

……すると、ちやうどいゝ事に十時頃だつたか、赤軍の本部に居る可愛いメツセンジヤーボーイの姿をしたレポーターが、自轉車に乘つて通りかゝつた。その小僧は路次の中に隱れてゐる妾の姿を見ると直ぐに片手をうしろ向きに上げて「引き上げろ」といふ合圖をしたから、妾は大急ぎで追付いて、ハンドルを齧まへながら、路次の中へ引つぱり込んで様子を聞いてみると、その話がトテモ大變なの……「ニーナさんは此の前に上村一等卒を殺しかけてシクジツタんだから、サツキの指令は取り消した方がいゝつて云ふ事に、首腦部で話がきまつた」つて其の小僧が云ふの。さうして其代りに、日本軍の司令部へ宛てた密告書を出すことになつた。「上村一等卒はオスロフに買收された赤軍のレポーターだ」つて云ふ内容で。白軍から出した様に見せかけた手紙を、タツタ今セントランの郵便受箱に入れて來た處だ。その中には、今までの上村一等卒の怪しい行動がみんな書いて有るから、大抵申し開きが出來ないで殺されるだらう。それよりも司令部の連中が今の間に其の手紙を見て、こつちの方に手配りを始めたらケンノンだから早くどこかへ逃げなさい」つて云ふうちに其の小僧は顔を眞赤にしながら、妾を振り切つて逃げて行つた。

……可哀さうにあの小僧は殺されて居るかも知れない。何故つて云ふと赤軍では、ドンナに無茶な指令を出しても、その理由を絶對に説明しない事になつて居る。さうして萬一それを犯した事がわかつたら、事情のある無しに拘はらず死刑にする……といふ嚴重な規定があるのだから……尤も妾は哈爾賓の赤軍の中でもタツタ一人の女だつたし、今までの仕事もあつたお蔭で、首領株とおんなじに信用されてゐたんだから、あの小僧も其積りでウツカリ饒舌つたかも知れない。

……ところで妾は其の指令を受取つても動かなかつた。あの小僧と一緒に死刑にされてもガンバリ通す決心をしてしまつた。その指令のおかげでアンタが銀月の中に居る事が確かになつたのだから、イヨイヨ度胸をきめてそのまんま辛抱を續けてゐると、ヤツト十一時頃になつてアンタがブラリブラリと出て來たからイキナリ短劍を突きつけて自動車に乘せた。それからアトを跟けられて居るか、どうかを見るために、トルコワヤ街を下つて、チヤリナゴナリナヤ街を一直線に、鐵道工場の横まで來て自動車を歸して、線路を乘越して河岸から此のボートに乘込んだのだ。最早ヨツト倶樂部の前を乘越したし、鐵橋の下も傅家甸の横も通り抜けたから大丈夫だ。アトは今の間に妾の裏切りを感づいて、河岸に出てゐるかも知れない赤軍の監視と、モツト下流の方で星黑の行方を捜索してゐるかも知れない日本の憲兵隊が怖いだけだ。

［やぶちゃん注：●「短銃」「全集」は（正字化した）『短劍』であるから、久作がそう書き換えたものらしいが、寧ろ私は、上村が大人しく車に載るとすれば（しかもまたグズグズしてもいられない火急の折りである）、ここはピストルでないとピンとこない。 ●「跟けられて」「跟」は音「コン」で、くびす・踵が原義。他に、従う・後について行くの意がある。 ●「チヤリナゴナリナヤ街」不詳。先に引用した「満州小考」には当時のハルピンの街路名の一覧があるが、似たようなものはない。ルートから見て、松花江近くの街路名か。］

……しかし、それよりも何よりも、妾が一番怖かつたのは誰でもないアンタだつた。ア

ンタが妾の變裝を一眼で見破つて居るらしいのに、兩手をポケツトに突込んだまま妾の云ふなりになつて來たので、何をされるか判らないと思つてヒヤヒヤして來たが、タツタ今、梨を塗いて呉れたので、ホツト安心した。……けれど、それと同時に、アンタが日本の官憲に逮捕されても、やつぱりあんな風に默りコクつたまま銃殺されてしまふのかと思ふと、悲しくなつて涙が出た。

……でも、そんなに苦勞をしたお蔭で、アンタと妾だけが、かうして助かる事が出來たんだから嬉しい。ホンタウの事を正直に話す勇氣のある者は、アンタと妾だけだから

……妾はオスロフを可愛さうと思はない。あの男は、あれでなかなかの好色漢だ。滿洲里にもポクラニーチナヤにも妾を置いて居るのだ。おまけに奥さんが肺病だもんだから、死んだら妾をオメカケにする積りで居る事が、奥さんに祕密で寶石を買つて呉れたり、コツソリお酒を飲ませたりして眺めてゐる眼付でよくわかつて居たの……イヽエ。さうなの。ドバンチコもさう云つてたの。お父さんには用心なさいつて云つて居た位だから……。

［やぶちゃん注：●「ポクラニーチナヤ」底本は「ポタラニーチナヤ」であるが、誤植と断じ、既出の表記で訂した。既注。］

……ただ可哀相なのはお祖母樣と奥さんであつた。妾を親身の孫や娘のやうに可愛がつて下さつたので、十梨と銀月の女將が飛んでも無い寃罪の罪を云ひかけて殺してしまつた。それを思ふと妾は身體中がふるへ出す。骨の髓まで黑い血が走り込んで行く。神樣の正義は神樣が守りやあいゝ。人間の正義は人間が守るばつかりだ。妾は讐敵を討たずには居られない。あの婆さんと奥さんの爲に……さうしてアンタの寃罪を晴らす爲に……。

……十梨と銀月の女將はドパンチコの云ふ小雀ぢやない。二匹の毒蛇だ。哈爾賓の地の下に潛つて、一番恐ろしい毒を吹いてゐる雌と雄の金蛇だ。妾は近いうちに哈爾賓に引返してキット讐敵を取つて見せる」

といふうちに彼女はスツカリ昂奮したらしい。二つ目の梨の喰ひさしを松花江の流れ目

がけて、力一パイたゝき込んだ。

僕は何も云はなかつた。否……云へなかつたのだ。

ニーナの話を聞いてゐるうちにスツカリ醉ひが醒めてしまつた僕は、最早、何一つ考へる力も無いくらい疲れ切つて居る自分のアタマを、頭蓋骨の内側にシミジミと自覺して居たのだ。

それは此二、三日の間突發して來た恐ろしい出來事の重なり合ひに對して、あらん限り絞り上げて來た僕の腦味噌が、急激な神經衰弱に陷つてしまつたせいかも知れない。事件の眞相が頭の中心でボーツとなつてしまつて、ニーナの僕に對する途方も無い見損(みそこな)ひを笑ふことも辯解する事も出來なくなつたばかりでない。自分一身の處置を、これからドウしていゝか

すら見當が付かなくなつてしまつたのだ。たゞ兩手を顏に當てゝ石の樣に固くなつたまゝ、形容も想像も及ばぬ無い無鐵砲なジプシー女の、斷乎たる決心に引きずられて行く意氣地の無い自分自身の兵隊姿を、眼の底に凝視しながら、痺れ上つた頭の中心の遠く遠くにジイイーンと鳴る血管の音を聞き澄まして居るばかりであつた。

けれども、其のうちに彼女の話が終ると、僕はホツと溜息をしながら顏を上げた。さうして彼女が投げ込んだ梨の波紋を何氣なく振り返つたが、そのまゝハツと息を詰めた。

背後はるかに隔つた大鐵橋の左手が、大きな大きな夕日の色に染まつてゐる。さうしてその大光焰の中心に、見紛ふ方ない銀月の雄大な鐵骨が、珊瑚のやうに美しくイルミネートされながら輝きあらはれて居るのを、ボートの背後に起つた長い長い波動が巨大な眞紅の鳥のやうに、又は夕燒雲のやうに嶌きまはしながら引きはえて居るのであつた。

［やぶちゃん注：●「巨大な眞紅の鳥のやうに」「全集」はここを『巨大な真紅の島のように』とする。ハルピンには確かにこの「銀月」のあると思しい位置の直近の松花江の川中に「太陽島」という当時からの何となく、火災にイメージのダブる避暑地（観光地）があるにはあるが、これはどう考えても――燃え盛る「銀月」の紅蓮の炎を火の鳥とした比喩――であり――『「鳥」であつて「島」なんかぢやあない！』――と私は叫びたいのである！　これは私はとんでもない単行本或いは「全集」の誤植（久作が「島」に変えるはずがない）であると断ずるものである。］

僕は身動き一つしないままその光を一心に振り返つてゐた。何の音もなく雲の下腹を焙り出してゐるその偉大な大光明の核心を、いつまでも、いつまでも凝視して居たが、そのうちに何とも云へ無い奇妙な氣持ちで胸が一パイになつて來た。

それは狼狽でも驚きでもなかつた。ただ無闇にシインと靜まり返つた、物狂ほしいやうな……底悲しいやうな氣持であつた。おそらく僕の醉ひざめの沈み切つた神經が、僕自身の絶望的な前途を豫感した微妙な動搖であつたらう。僕がこの時知らず識らずに陷つてゐた大失

敗……銀月の女將の執念と云つてもいゝ恐ろしい運命の谷底に向つて、ニーナと二人連れで突進して居たことを、僕自身にもわから無い心の底の心が直感して居た、その戰慄であつたらう。

その大光明を振返つて居た僕は、何かなしに、もう二度と再び哈爾賓（ハルピン）に歸れない様な氣持ちになつて來たのであつた。同時にかうしてグングンと人間世界から引離されて行く（ゆ）自分自身のたまらない一種の淋しさが、時々刻々に倍加して行く（ゆ）のをヒシヒシと感じたのであつた。

……何故あのまゝに自首して出なかつたらう。すべての罪を、自分一人に結び付けられても構はない。誤解された陸軍歩兵一等卒としての愚かな一生を終らなかつたらう……と云つた様な極めて、超自然的な後悔の氣持が、靜かな十二汽筒（シリンダー）の震動につれて、あとからあとから湧き出して來た。さうして見る見る取返しの付かなくなつて行く（ゆ）自分自身の運命を、千萬無量の思ひに湧きかへる上流の火の粉と艇尾（ていび）の波紋の美觀と一緒にして、ウツトリと見惚（みと）れて居たのであつた。

そのうちに僕はヤツト氣が付いてニーナの方を振り向いた。無言のまゝブルブルと震へる指をソツと彼女の肩に置いた。

「……マア……キレイ……」

とニーナは振り返りさま日本語で叫んだ。ピタリと器械を止めながら、危險を忘れて河の中流にコースを取つた。それにつれて火光（くわくわう）を眞正面（まとも）に受けたニーナの顏が見る見る眞赤に輝き出した。僕の顏をチラリと見ながら露語で尋ねた。

「……あれは銀月ぢやない……」

僕は無言のまゝうなづいた。

「……アンタが火を放（つ）けたんでせう……」

僕は泣きも笑ひも出來ない氣持になつた。法廷に引出された人間のやうに顎（あご）を震はしながら云つた。

「……それぱかりぢやないよ。ニーナさん。あの光りの中心に……銀月の女將の……白骨が寢てゐるんですよ」

「……まあッ……嬉しいツ……」

とニーナは又も日本語で叫びながら坐席を飛び出して來た。重なり合つたガソリンの罐を飛び越えて、艇尾に坐つて居る僕の首つ玉に飛び付いて、雨の降るやうに接吻し散らした。

「……あぶないよ。ニーナ……ボートが引つくり返るよ……見つかるよ官憲に……」

と云ひ云ひ押し除けようとしたがニーナはなかなか離れなかつた。

ボートはいつの間にか艇尾を下流に向けながら押し流されて居た。

すると其時であつた。何處からか傳はつて來た……ビシツ……といふ烈しい空氣の震動と殆んど同時に、

ツタ――ンンン……

と云ふ銃聲が、兩岸の暗をはるか震撼して行つた。……と續いて二ツ三ツ……

ピシツ……ツタ――ン……

ピシツ……ツタ――ン……

ピシツ……ツタ――ンンン……

それは日本の官憲のものだか、赤軍の監視隊のものだかわからなかつた。いづれにしても僕達を十五萬圓の拐帶犯人と睨んでゐるには違ひ無いと思はれた。

しかし僕は慌てゝ身を伏せたりなんかしなかつた。アタマがどうかなつて居たせゐであつたらう……兩手で舷側を押へながら、何とも云へない一種のなつかし味を感じつゝ音のする方向を振り返つてゐた。射たれてもいゝ。捕へられても構はない。その方が早わかりだ……と云つた樣な遣る瀨ない氣持に囚はれつゝ……。

不思議なことにニーナも僕と同じ樣な姿勢を執つてゐた。何と思つて居たのかわからないが……或は彼女獨得の無鐵砲な好奇心から相手の正體を見定める積りだつたかも知れない。

お椀帽子を冠り直しながら伸び上つて、三四百米突ばかり向うの河岸の草原の中から、パツパツと迸る小さな火光を透かし覗いて居る様であつたが、そのうちに思ひもかけない左手の水面がパツと跳ね上つて、横シブキの冷めたい霧がサツとボートの上を掠めると、ニーナはプーツと溜を膨らましながら平手で顔を撫でまはした。

「ププッ……ニチエウオ――」

と一と聲叫んだと思ふと、ガソリンの罐を跳り越えてハンドルに飛び付いた。星あかりに私の方を透かしながら、ニツコリと笑つた……と思ふうちに両舷の排氣管からモノスゴイ火煙が流れ出して河の中心に半圓を描いた。蒼白い、明煌々たるヘツドライトを射出すと同時に、ボートよりも大きい、高い、長い浪を眞白に盛り上げて、背後の大光焔を轟々と吹き散らし始めた。

［やぶちゃん注：●「ププッ……ニチエウオ――」“Будто...здоровы...”（きっと……大丈夫！――）か？　ロシア語の出来る方の御援助を乞う。　●「排氣管」“exhaust pipe”。“exhaust”は「排気装置」の意。　●「モノスゴイ火煙が流れ出して河の中心に半圓を描いた」は「全集」では『モノスゴイ火煙が流れ出した。艇尾が河の中心に半圓を描いた』と加筆されている。ルビの「スターン」は船舶用語“Stern”で船尾・艫の謂い。］

僕は振り落されさうになつた身體を辛うじて喰ひ止めた。両手で顔を蔽うてグツタリとうなだれながら心の底でつぶやいた。

「……すみません。皆さん。濟みません。……僕にはドウしていゝか……どうなるのかわかりません……許して下さい……」

と云つた意味の事を、當てどもなく祈り續けた。

島の間をいくつもいくつも通り越して、哈爾賓の光りが全く見えなくなつてもニーナは速力を落さなかつた。あぶないからハバロフスクまで逃げるのだと云つた。さうして夜が明けると、道路に遠い支流を上つて、深い犬蓼の茂みにボートを乗り入れて、白パンとコーン

ビーフと冷水の朝飯を攝つた。

［やぶちゃん注：●以下、一行空きであるが、「全集」では空きなしで続いている。］

その食事の最中に彼女は、ソバカスで隈取つた、睫の長い眼を上向けて（僕が彼女の顔を注意して見たのは、此時が初めてゞあつた）澄み渡つた大空をアツチ、コツチと見まはしながら、何かしきりに考へてゐるらしかつたが、そのうちに食事が濟んでしまふと、彼女はクルリと向うむきになつて艇尾の甲板に倚りかかつた。さうしてレターペーパと鉛筆を取出す片手間に、僕の顔をジロリと見た。

「……ネエ……妾もう自烈度くなつたから、こゝから赤軍に復讐して遣るわよ。モウいつ哈爾賓に歸れるか解からなくなつちやつたんだから、今のうちに赤軍のスパイ網を、根こそげ日本軍にブチ撒けて遣らうと思ふのよ。オスロフだつて知らなかつた事を、妾はチヤントこの眼で見まはして來たんだから……ネエ。いゝでしよ。……通りかゝりの小舟に賴んで、これを日本軍の司令部に持つて行つたら、タンマリお金が貰へるんだつて云つて遣つたら、大抵無事に屆くでせう。日本軍は信用があるんだから……序にアンタと妾の「左樣なら」も書いとくわ。ねえ。いゝでしよ」

さう云ふうちに彼女は船底から、飲みさしの眞黑なウオツカの角瓶を引つぱり出して、さも氣持ちよささうにコルクの栓をスツポンと引き拔いた。おほかた彼女一流の、惡魔のやうな記憶力を喚び起す目的であつたらう。

しかし正直のところ其時の僕に取つては、そんな事はドウでもよかつたのであつた。夜が明けるに連れてハツキリと蘇つて來る色々な殘念さ、面目なさ、相濟まなさに、石の樣に囚はれてしまつてゐた僕は、物を云ふ力も無いまゝ頭から毛布を引冠つて、ゴロゴロした荷物の上に横になつたのであつた。さうして暫く經つてから

「……ネエネエ。アンタ。とても面白い事があるのよ。ネエネエ。……この上流に金鑛か

何か有るらしいのよ。いつも哈爾賓に金塊を持つて來るつていふ評判の船が、ツイ今しがた此方の岸近くを下つて行つたのよ……だから妾は直ぐに陸に上つて、銀貨を四五枚、手紙に結ひ付けたのを、その船の甲板に投込んで遣つたの。さうしたら主人らしい立派な支那人が出て來て、手紙を拾ひ上げて擴げて見るなり、眼をマン丸くして妾の顏を見たのよ、おほかた日本軍司令部の宛名と、ニーナ・オリドイスキーつて云ふ妾のサインが讀めたのでせう。兩手を胸に當てながら、叮嚀にお辭儀しいしい下つて行つたわよ。小さな大砲を載せたキレイな船だつたわ。恰好は平べつたい舊式だけど……まだ、うしろ姿が見えてゐるわよ。……ホラ……今、本流に曲り込むとこよ。四五人突立つて此方の方を指しながら何か云つてるわよ。……ネエネエ……」

と話しかけるニーナの聲を夢うつゝのやうに聞きながら、酒臭い彼女の身體を毛布の下に抱き寄せたのであつた。

日が照り出して居たのでトテモ暑かつた。

［やぶちゃん注：●以下、一行空きであるが、「全集」では空きなしで続いている。］

それから二晩ほど走るうちに、機械が惡くなつたらしく、何度も何度も故障が起りはじめた。さうして豫定よりもズツト早くガソリンが無くなりかけたので、トウトウ諦めた彼女は、道路の見える處まで來てボートを乘り棄てた。あとから地圖に引合はせてみると、そこはハバロフスクから百五十露里ばかり手前のペトロスカヤ付近だつたらしい。ボートは河岸の草の茂みの中に引上げて置いたから洪水が出ない限り見付からないだらう。

［やぶちゃん注：●「ペトロスカヤ」不詳。ハバロフスクから百五十キロメートル上流となるとアムール川（黒龍江）左岸の「ゴロヴィノ」という場所辺りであるが、「ペトロスカヤ」に近い地名は見当たらない。或いは旧地名か、右岸の中国領内の地名のロシア語呼称であったものか。識者の御教授を乞うものである。］

晩秋の光に滿ち滿ちた大河岸の、廣い廣い露草の中に立つた時、僕は何がなしにタメ息をさせられた。青い青い大空を仰ぎながら、もういよいよ駄目だ……と思つた。

食事が濟むと彼女は飲料水の全部をバケツの中にブチマケて、片手で固練白粉を溶きながら、首から上を氣味の惡いほど眞白に塗り上げた。それから細長い情熱的な眉を引いて、唇を赤黄色いベニガラ色に染めつけると、今度は僕を丸裸體にして、黒い支那服じみた奇妙な恰好の古いダブダブ服を着せた。それから軍服と兵隊靴を、ボートの下に突込むと、代りに古い赤革のゲートル靴を穿かせて、鍔の廣い、黒い、伊太利風のお釜帽子を冠せて、大きな色眼鏡をかけさせて、それから食料とお金と化粧道具と、ピストルを納めた上に、僕の雨外套と、毛布と、飯盒を結びつけた露西亞式の古背嚢を僕の肩に載せかけて、一番最後に巨大な新しい手風琴を渡した。

［やぶちゃん注：●「固練白粉」硬めに作った練り白粉のこと。粉白粉と油或いはグリセリンとを練り合わせて柔らかな固形にした白粉。水若しくは化粧水で溶いて塗る。舞台メークなどの濃厚な化粧に用いられる。現在のファンデーション・ケーキに相当する（以上はウィキの「おしろい」に拠った）。　●「お釜帽子」大正時代のモボが好んで被ったソフト・ハットの頭を潰したものを当時は「御釜帽」と呼んだ。中原中也の知られた写真を想起されるとよろしいか（リンク先は“Wikimedia Commons”の単体写真）。］

彼女は其處で二、三歩退いて僕の姿を眺めると腹を抱へて笑ひ出した。

「ホホホハハハ……ハラショ……オーチエンハラショ……とてもよく似合つたわ。濟まあしてんのねアンタは……盲啞學校の生徒さんソツクリよ。ホホヽヽハハヽヽ……いゝこと、アンタはザバイカル生まれのボヂイ、ガルスキーつて云ふ人よ。それから妾はプリアト、モンゴル生まれのナハヤ、ガルスキー……二人は夫婦なのよ。……いいこと……見てらつしやい」

［やぶちゃん注：●「オーチエンハラショ」“Очень хорошо”（とってもいいわ！／よく出

来ました！）　●「ザバイカル」“Забайкалье”。「ザバイカリエ」「外バイカル」とも訳す。ロシア東部のバイカル湖東の広域名ザバイカリエ地方。現在のブリヤート共和国の一部及びロシア連邦のイルクーツク州に相当するとウイキの「ザバイカル」にはあるが、少し納得がいかないのでもう少し調べてみたところ、服部倫卓氏の「服部倫卓のロシア・ウクライナ・ベラルーシ探訪（ブログ版）」に以下のような記載を見出せた。『「Предбайкалье（プレドバイカリエ）」という聞き慣れない言葉に出くわした。「Забайкалье（ザバイカリエ）」という言葉はもっとポピュラーで、「外バイカル」という意味であり、ヨーロッパ側から見てバイカル湖の向こう、すなわちブリヤート共和国およびザバイカル地方（昔のチタ州）のことを指す地名である。「プレドバイカリエ」というのは、「前バイカル」という意味だから、バイカル湖の手前という意味なのだろう。こちらのサイトなどを見ると、前バイカルというのは、実質的にイルクーツク州のことを指しており、同州の雅語になっているような感じがする。ザバイカリエ（外バイカル）とプレドバイカリエ（前バイカル）を総称し、単に「Байкальский регион（バイカルスキー・レギオン）」、すなわちバイカル圏と呼ぶ』。完全に腑に落ちた。　●「ブリアト」現在のロシア連邦を構成する共和国の一つである東シベリアのバイカル湖の南東部に位置するブリヤート共和国（Республика Бурятия　ブリヤート語：Буряад Республика）周辺の地方名（ウイキの「ブリヤート共和国」に拠る）。ウイキの「ブリヤート人」には、『ブリヤート人はモンゴル族の一部であり、モンゴル先祖はバイカル湖から形成し始めてから草原地代へ進行する、モンゴル秘史に記載する蒼き狼と白い鹿がバイカル湖を横断して草原へ移動されモンゴル民族が発足する。バイカル湖周辺が人類文明の一原点であり、アルタイ諸民族の発祥地だとされる』とある。」

と云ふうちに彼女は素早く支那服を脱いで、強健なオリイブ色の手足を朝の斜光に曝し出した。その上からジプシー一流の赤と黄色のダンダラの舞踏服に、何と云ふか知ら無い茶色の革紐を膝の下まで編み上げたスリツパ様の革草履を素足にからみ付けて、青天鵞絨のベレ

ー帽を耳の附け根まで引下げた。その上から赤裏の青マントを威勢よく引きまはして、紫と紅の房を引きはえた黄金塗の鈴太鼓を一個小脇に抱へると、籠から出た小鳥のやうに肩を一つゆすり上げた。

［やぶちゃん注：●「鈴太鼓」「全集」では『ジヤンポンロ』とルビする。「鈴太鼓」は本邦では歌舞伎舞踊の小道具の一つで、胴の枠に鈴を付けた直径約十七センチメートルの扁平な小太鼓を指し、平凡社の「世界大百科事典」によれば（記号の一部を変更し、ルビ化もした）、『振鼓ともいうが、胴に数個の鈴を入れたもの。歌舞伎では女方の踊りに用いられ、両手に持った鈴太鼓を、打ち合わせたり、膝や床を打ったりして音をたて、リズミカルに踊る。「娘道成寺」「男舞」「浅妻舟」や、「鏡獅子」の胡蝶の踊りなどに見られる。「娘道成寺」では、白拍子花子が芸づくしの舞踊の最後に。『花に心を……』で鈴太鼓の踊りを見せ、鐘入りとなる』とある。ここでは以下に掲げた底本の挿絵を見ると、タンバリンのことであることが分かる。このルビの「ジヤンポン」及び「ジヤンポンロ」というのは外国語ではなく、日本語のオノマトペイアか？　識者の御教授を乞う。］

彼女は其處で、何でもいゝから僕の好きなものを彈いて見ろと命令した。多分さうして僕を試驗した上で、簡單な曲を口移しに教へる積りらしかつたが、案外にも僕が譜だけ知つてゐるジプシー舞踊曲「ドンドン燃やせ――深山の焚火」を大きなベース入りで彈き出したので、彼女は青褪める位驚いて……どうして知つてゐるか……と眼を丸くした。それから古めかしいコチロンやタンゴを二つ三つ彈いてゐるうちに、草の中でステップを狃らしてゐた彼女は、

「モウいゝ……それだけあれば澤山よ」

と云ふかと思ふと、高い草を押し分けながら、ステップを踏み踏みサツサと歩き出した。舞踏好きの彼女はもう哈爾賓の出來事なんかトウに忘れてしまつた樣に浮かれ出してゐるのであつた。

［やぶちゃん注：●『ジプシー舞踊曲「ドンドン燃やせ――深山の焚火」』不詳。二木紘三氏のブログ「二木紘三のうた物語」に作詞ポローンスキィ・作曲プリゴージィとして「私の焚火」という曲を確認出來る（曲も聴ける！）。これか？　識者の御教授を乞う。　●「コチロン」これはどうもフランス風の古式のスクエア・ダンスのことらしい。“Cotilon”はフランス語でペチコートの意であると、「浜松スクエアダンス愛好会」公式サイト内の「スクエアダンス初めて物語」にあった。　●「狃らしてゐた」この場合は、ステップを慣らす、練習するの意である。］

坊主頭の彼女のあとから草を押しわけてゆく自分の姿を振り返つた時、僕は涙も出なかつた。

二人は、それから一枚の露國地圖を賴りにして、西比利亞の曠野を漂浪し始めた。……と云つても大した事は無い。ペトロウスカヤからハバロウスクに出て、其處から烏首里江沿ひに鐵道線路を避けながら興凱湖へ出て、ニコリスクから浦鹽に南下したものであるが、それでも三四百里（日本里）

ぐらゐの徒歩旅行であつたらうか。

［やぶちゃん注：「烏首里江（ウスリーかう）」ウスリー川（現行中国語：乌苏里江／ロシア語：река Уссури）。アムール川の支流の一つで、ロシア沿海地方・ハバロフスク地方と中国東北部吉林省・黒竜江省の国境を成す。ロシア沿海地方の中央を貫くシホテアリニ山脈を水源とし、ウスリー・タイガと呼ばれる松や広葉樹林の原生林を西に流れた後、東北に向きを変えてロシア・中国の国境を流れ、ハバロフスクの近くでアムール川に合流する。合流点に中露の領土争いの対象となってきた中州である黒瞎子島（こつかっし）（黒瞎子の中国語を音写すると「ヘイシャーズ」／ロシア側は остров Большой Уссурийский「大ウスリー島」と呼ぶ）がある。全長約八百九十七キロメートル、流域面積十九万三千平方キロメートルに及ぶ。中国側からの主要な支流は二つあり、一つは黒龍江省と吉林省の境に発し、黒龍江省を東へ流れ、穆稜・鶏西市などを経て虎林市付近で合流する穆稜河で、今一つはハンカ湖（後注参照）を源に国境を北へ流れて合流する松阿察河（ソンガチャ河）である（以上はウィキの「ウスリー川」に拠った）。

●「興凱湖（こうがいこ）」ハンカ湖（озеро Ханка）の中国名（興凱の中国語を音写すると「シンカイ」）。中国東北部の黒竜江省とロシア連邦の沿海地方との間の国境地帯にある広大な湖。中国側は黒龍江省鶏西市に属すが、市街からは百二十キロメートルも離れている。湖面面積は四千百九十平方キロメートルで、湖の北寄りに直線状の国境線が引かれており、南側三千三十 平方キロメートルがロシアに、北側千百六十 平方キロメートルが中国に属している。私は即、黒澤明の「デルス・ウザーラ」を思い出す。あの葦を刈る音は凄かったな。……　●「ニコリスク」は底本では「ニユリスク」であるが、これは誤植と断じて例外的に「全集」の「ニコリスク」を採った。これは現在のロシア連邦の沿海地方南部にある都市ウスリースク（Уссурийск）で、ウイキの「ウスリースク」によれば（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更した）、『かつては清国領で「双城子」と呼ばれていた。一八六六年、この地が清国領からロシア領になって六年後、ニコライ一世の名をとってニコリスコエ村が置かれ

た。東清鉄道との連絡を図るウスリースク鉄道の建設後、この村の重要性は増大し、一八九八年、ニコリスク・ウスリースキー市となった。一九三五年、スターリンの側近クリメント・ヴォロシーロフの名を取りヴォロシロフ市に改称された。スターリンの死後ヴォロシーロフは失脚し、一九五七年、現在のウスリースク市に改称された』とあり、本作の小説内時間の一九二〇年前後は「ニコリスク・ウスリースキー」が都市名だからである。『ウラジオストクの百キロメートルほど北に位置し、シベリア鉄道と中国からの鉄道（旧・東清鉄道）・北朝鮮からの鉄道が合流・分岐する交通の要衝である』。また『交易都市だけに中国・北朝鮮との密輸や日本車密輸、売春斡旋を行うマフィアの活動が盛んである。二〇〇四年には、ウスリースクを根拠にするマフィア幹部が自らの武勇伝や犯罪、投獄を「当事者」に演じさせた実録ドラマを地元テレビ局で放映させ、生々しい実話や実弾発射を用いたアクションなどで注目を集めた。なお、ウスリースクはウスリー川沿岸地方に経済的影響力を持つが、その名に反してウスリー川やその支流は流れていない』ともあって、この後の段のエピソードと合わせると、うひゃあ！　って感じがする。●「浦鹽（うらじほ）」ウラジオストク（Владивосток、音写だと「ヴラヂヴァストーク」に近い）。ロシア極東部沿海地方（プリモールスキイ地方 Приморский край）の州都。ウィキの「ウラジオストク」によれば（アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部を変更・省略した）、『十九世紀末、日本海を通じての太平洋への玄関口として、また北に位置するロシアが悲願とする不凍港として極東における重要な港町に位置づけられ、ロシア帝国海軍バルト艦隊、太平洋艦隊の分遣隊がおかれた。これは、のちに強化されてウラジオストク巡洋艦隊となった。ウラジオストクには造船所やドックが建造されたが、これができるまでロシア極東にはまともな艦船の整備施設がなく、日本の施設に依存していた』。『日露戦争時には、ウラジオストク巡洋艦隊は通商破壊に活躍し、黄海海戦ののち旅順艦隊の残存艦はウラジオストク巡洋艦隊に合流した。日露戦争後はその構成艦船の主要なものがほとんどバルト海へ帰還し、太平洋艦隊はシベリア小艦隊に縮小された。一九

〇五年までに中国領満州のハルビンを経由してモスクワとウラジオストクを繋ぐシベリア鉄道（一部、東清鉄道）が建設された。一九一二年に日本とウラジオストク航路に接続する国際列車が新橋駅（一九一四年からは東京駅）―金ヶ崎（後に敦賀港に改称）で運行される（ボート・トレイン）』。『ロシア革命後、ウラジオストクには、日本、イギリス、アメリカの干渉軍が進駐した（シベリア出兵）。一九二〇年～一九二二年の間、極東共和国の支配下にあり、各地から白系ロシア人が押し寄せたため、市の人口は、九万七千人から四十一万人までに増加した。一九二二年十月二十五日、最後の干渉軍部隊が撤収し、ウラジオストクは赤軍の支配下に入った。市の人口は、十万八千人にまで減少した』とある（作品内時間の当時でのそれは一九二一年）。『かつては非常に規模の大きな日本人街があり、一九二〇年頃（大正九～十年頃）には六千人近くの日本人が暮らし、日本とロシアの交流は非常に活発に行われていた。町には浦潮本願寺などがあり、日本人による商店や企業が多数進出していた』とある。

●「三四百里（日本里）」千百七十九～千五百七十キロメートル。起点の「ペトロウスカヤ」が不祥であるが、大体の位置から直線でハバロフスクとウラジオストクまでを計測すると、七百八十七キロメートルほどであるから、陸路徒歩となれば軽く千キロメートルは超えるので、誇張表現とは言えない。」

それは僕の生涯の中で、一番思ひ出の深かつた……樂しいと云ふ意味ではない。自分の魂が空虚の中に消え込んでゆくやうな氣持での……生活であつたが、その詳細は此處に必要が無いから大略して置く。別に「西比利亞漂浪記」といふのを書いてゐるにはゐるが、これも尻切れトンボになつたから燒棄てる積りだ。

僕の腮鬚とニーナの髮は、この漂浪中に可なり伸びて來た。僕の腮鬚は赤く縮れてゐたので、頭を坊主刈にしておくと、さながらのギリアークに見えたらしい。又ニーナはいゝ加減な斷髮少女に見えて來たのを、眞中から二つに分けて撫で付けてゐた。

［やぶちゃん注：●「ギリアーク」ニヴフ。以下、ウィキの「ニヴフ」に拠る。樺太中部以

北及び対岸のアムール川下流域に住む少数民族で古くはギリヤークと呼ばれたが、現在では彼らの自称に基づいてニヴフ（アムール川下流部で「人」を意味する語）と呼ばれている。『アイヌやウィルタと隣り合って居住していたが、ウィルタ語の属するツングース諸語ともアイヌ語とも系統を異にする固有の言語ニヴフ語を持つ。アムール川流域のニヴフ語と樺太のニヴフ語は大きく異なる』。」

二人が演ずる手風琴とジプシーの踊りの一座は到る處の村々の人氣を呼んだ。山奥の富裕な村の結婚式や祭禮にぶつかつた時はヘトヘトになるはど持て囃された。

しかし雪が降つて來ると旅行のスピードが急に倍加して來た。驛傳の橇を利用して、酒場酒場を拾つて歩かなければならなくなつたからであつた。

［やぶちゃん注：●「橇」「トロイカ」（тройка）はもともと「三」「三つの組み」を意味するロシア語で、そこから三頭立ての馬橇（或いは馬車）を指す語となった。］

僕は其の旅行中に色々な事を見たり聞いたりした。

飢饉の爲めに洞穴に逃げ込んで死んだ一家族の木乃伊を見た。赤軍の不換紙幣による強制徴集に應じなかつたために、虐殺されて、焼き拂はれた大村の中を通過した。赤軍の村（と云つても純然たる赤ではない。一番タチの悪い強盗半分の武裝部落）に這入つて訊問されかけたのを、ニーナが首領とウオツカの飲みくらをして胡麻化したこともあつた。白軍だかチエツコだかわからない兵隊を五人づつ針金で縛つて銃殺した死骸を、道端に何處までもどこまでも並べて在る荒野原を通つた時には、二人とも息を詰めて生汗を滴らした。そのほか地圖に無い高い山や、大きな湖を發見したこと……西比利亞の住民に取つては赤とか、白とか云ふ思想がオヨソ意味ないものであること……それよりも一九一七年に露都で組織された第一女軍の評判が到る處に行き渡つてゐること……二度ほど出會つた大吹雪の恐ろしかつた事……生まれて初めて見たオーロラが神祕的に壯嚴であつたこと……興凱湖の月の夜に僕が何氣なく彈いて聞かせた「カツポレ」の曲を、ニーナがトテモ悲しくて踊れないと云つ

て涙ぐんだこと……なぞ思ひ出せば數限りもない。

［やぶちゃん注：●「赤軍の不換紙幣による強制徴集」今一つ、よく分からない。ロシア史にお詳しい方の御教授を乞うものである。●「チエツコ」これこそ先に注したチェーカー（ЧК）、レーニンによってロシア革命直後の一九一七年十二月に人民委員会議直属機関として設立された秘密警察組織「反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会」（Всероссийская чрезвычайная комиссия по борьбе с контрреволюцией и саботажем）の通称ではあるまいか。英語では“Cheka”、ドイツ語では“Tscheka”で、音写では「チェカー」「チェカ」とも表記するからである。●「露都」モスクワ（Москва）。ソビエトによって首都機能が移転され、ソビエト連邦及びロシア・ソビエト社会主義共和国の首都となったのは作品内時間一九二一年の二年前の一九一八年であった。●「第一女軍」不詳。ソ連が第二次世界大戦時に前線に投入する組織的な女性兵隊組織を作ったことは知られているが、革命当時の公的な固有名詞として「第一女軍」らしきものは調べ得なかった。識者の御教授を乞うものである。●『興凱湖の月の夜に僕が何氣なく彈いて聞かせた「カツポレ」の曲を、ニーナがトテモ悲しくて踊れないと云つて涙ぐんだこと』文句なしに皮肉にステキに面白いではないか。……ニーナは和音階の滑稽節の底にしみじみとした仄かな哀しみを知る不思議な女なのである……。］

二人が浦鹽（うらじほ）に來たのは別に深い意味があつての事ではなかつた。二人の變裝に自信が付いて來るに連れて、都會が戀しくなつたからでもあつたらうし、一つには夫れとなく哈爾賓（ハルピン）の樣子を聞いてみたい……といふ僕の良心的な氣持ちの動きも手傳つてゐたであらう。翌年（今年）の正月の初めに、ニコリスクで白軍に押へられて、危なくスパイの嫌疑を受けるところであつたのを、ちやうどニーナから教はつてゐたジプシー語が役に立つて、無事に放免されたのは滑稽であつた。

［やぶちゃん注：●「翌年（今年）」大正十（一九二一）年。●「ジプシー語」ロマ語（ロ

マニー語)。インド・ヨーロッパ語族インド語派の言語でインドから北アフリカ・ヨーロッパへ移住した少数民族ロマ（差別的に「ジプシー」と呼称されたが、現在は「ロマ」が推奨されている）が使用する言語。以下、ウイキの「ロマ語」より引用する。『インド・ヨーロッパ語族とされるが、流浪した分だけあちらこちらの言語から語彙を借用語として取り入れている。男性名詞・女性名詞、単数と複数の区別がある。また、もともと自身の文字はなく、現在ではラテン文字で筆記されている』。『極初期のロマ語の実態に関する確かな歴史的な文献はない。また、ロマの先祖や、インド亜大陸からの移住の動機についてのどんな歴史的な証拠もない。ただ、インド・アーリア語における性区分』から、七～十世紀頃に『サンスクリットなどの影響を受けたと考えられ、ロマの祖先がインド亜大陸から出たのは』十世紀頃と推測されている。『南アジアからの出発の後、狭い範囲のクルド語とアルメニア語、比較的長期に滞在していたトルコのアナトリア地方の言語や、ギリシャ語の影響が認められている』。十三世紀前半に『始まるモンゴル人の欧州侵入は西方移住の引き金となった。ロマ人はその後、欧州の広い範囲に離散し、点在しているロマのグループは地方の共同体の分化が発生し、それは多くの異なった方言に分かれた現代のロマ語に大いに影響した』とある。」

それから櫓（トロイカ）で浦鹽（うらじほ）に這入（はひ）ってスエツランスカヤの裏通りの公園に近い處にある穢（きたな）い乞食宿（こじきやど）に泊つた。舊式煉瓦（きうしきれんぐわ）を四角い煙突みたいに積み上げた五階の天井裏の一室で、ペーチカの薪を擔（かつ）ぎ上げるのが一仕事であつた。宿主（やどぬし）の名前は忘れたがシワクチヤナとかクチヤクチヤナ（洒落ではない）とか云ふ浦鹽（うらじほ）生え抜きの因業婆（いんごふばゝあ）で、醜業婦（しうげふふ）や旅藝人、密輸入者、賭博打（ばくちうち）、インチキ兩替屋（りやうがへや）なぞが各階にゴチヤゴチヤしてゐた。

［やぶちゃん注：「スエツランスカヤ」須藤康夫氏のサイト「百年の鉄道旅行」の「東清鉄道　ウラジオストック」に掲げられてある戦前の日本製の地図及びグーグル・マップを見ると、ゾロトイローグ（金角）湾（グーグル・マップは「ゾロトイ・ログ」）の北岸を東西に走る通りに「スヴェトランスカヤ通り」というのを現認出来る。多くのネット記載から、現

在もここはウラジオストク一二の繁華街で、レストランなども並んでいることが分かるので、ここであろう。エンデイング近くで、駅裏での処刑の銃声らしきものが聴こえてくるシーンがあることを考えると、彼らの木賃宿はこのスヴェトランスカヤ通りの西（現在の金角湾に南北に南北に渡る橋よりも西側）辺りにあったのではないかと推定される。」

此處に落ちつくとニーナは、クチヤクチヤ婆さんを通じて何處かの親分にワタリを附けたらしい。例の通りの鉛白粉と紅棒で毒々しくお化粧をして、スエツランスカヤの大通りに並ぶレストランや珈琲店を軒別に踊つてまはつた。

しかし僕は一歩も外に出さなかつた。

「浦鹽には日本軍が駐屯してゐる。おまけに亞米利加の軍艦が引上げてからと云ふもの、どうした譯か日本軍のスパイの詮議が滅茶苦茶に八釜しくなつたらしい。一週間に一人位宛、停車場裏の廣場で銃殺される音が聞えるといふからヂツとして待つて居なさい。そのうちに氷が解けたら、ジヤンクに乘つて上海にゆけるから……」

さう云つて僕に黑麵麭と、酒と、罐詰めを當てがひながら口笛を吹き吹き出て行つた。僕は其の留守中にいつも手風琴を彈いたり、西比利亞漂浪記を書いたりしてゐたが、長いこと旅行を續けた揚句に來た幽囚同樣の生活だつたから、たまらなくわびしかつた。疲れ切つて歸つて來る彼女の醉拂ひ姿はなほさら文句なしに悲しかつた。さうして二月に入ると僕はスツカリ健康を害してしまつたらしく、ニーナの留守中に薪を荷ぎ上げるのが容易ならぬ苦痛になつて來た。多分一度罹つた肋膜が再發したものであらう。輕い熱と咳さへ出て來たのであつたが、しかし僕は苦心して此事をニーナに知らせないやうにした。

けれども、かうした僕の苦心は、そんなに續ける必要が無かつた。二月に入つてから間もない一昨日（八日）の晩の事であつた。ニーナが平生よりも早く九時半頃、帽子も冠らないまゝ大雪を浴びて歸つて來たから寢てゐた僕は眼を醒まして、

「……どうしたんだえ……」

と問うた。またお客と喧嘩して來やがつたな……と思ひながら……。

［やぶちゃん注：「二月」大正一〇（一九二一）年二月。いつもお世話になっている「こよみのページ」で調べると、その二月「八日」は火曜日（この夜が新月）で、以下の会話のシークエンスは二月十日木曜の晩に設定されてある。……ということは……本作の印象的なコーダは……そこから丸二日後、遅くとも四日後と考えられるから（支度に有意にかかっていることが分かるが、探索の手が伸びる可能性が示唆されているから、これ以上は考え難い）、それは――二月十三日（日曜）・十四日（月曜）十五日（火曜）未明の午前零時――ではなかったろうか……因みに……それらの夜の月は……切れそうな上弦の三日月である……そうして……そうして十五日だったなら……彼らが旅立つ午前零時頃……月の光は……旅立つ二人を……煌々と照らし出していたものと思われる……」

ニーナはしかし答へなかつた。頸の雪雫（ゆきしづく）を拂ひ落し拂ひ落しペーチカに薪を二三本投げ込んで椅子を引寄せながら、燃え上る焔をヂーツと見詰めてゐたが、やがて温まつたと見えて血色を恢復すると、右のポケツトから大好物の巨大（おほき）な日本梨を出して、皮のまゝカブリ付いた。その片手に左のカクシからレターペーパに包んだ葉巻を三本引つぱり出して、僕の枕元に投付けてくれたが、それは漂浪中（へうらうちう）に欲しい欲しいと云つてゐた上等の埃及製（エジプトせい）だつたので、すぐに一本に火を點けて吸ひ始めた。

その中（うち）にニーナは突然に僕の顔を振り返つてニツコリ笑つた。

「ねえアンタ。妾（わたし）たちモウ駄目なのよ」

トテモいい氣持に陶醉しかけて居た僕は、しかし平氣で煙（けむり）を吹き上げた。

「フーン、どうして駄目なんだい」

ニーナは平生（いつも）の通り、梨の汁を飲み込み飲み込み話し出した。平氣な、茶目氣（ちやめけ）を帶びた口調で……。

「此方（こつち）の方へもスツカリ手がまはつてんのよ」

と云ふのであつた……。

ニーナは今まで默つてゐたけれども、浦鹽に來るとすぐから哈爾賓の樣子に氣を付けて、それとなく探りまはして居たものであつたが、けふが今日まで、それこそ何の情報も聞かなかつた。日本軍の西比利亞撤兵が果して出來るかどうかと云つた樣な議論は、何處に行つても人種の區別なしに鬪はされて居たが、しかしカンジンの十五萬圓事件は勿論のこと、オスロフの銃殺事件さへも傳はつてゐる模樣が無かつたので、トテモ氣味が惡くて仕樣が無かつた。絶對祕密にされて居れば居るほど探索の手が嚴しいのぢや無いかと思つて出來る限りお化粧を濃くしてゐた。

ところが今夜になつて思ひがけない不意打を喰つてしまつた。

スエツランスカヤでも一流のレストラン・ルスキーの地下室で踊つてゐる最中であつた。ピアノの前の卓子でウイスキーを飲んでゐる色の黑い日本紳士が二人、ニーナの顏を見い見い何かしら話し合つて居る樣子が妙に氣になつたから、いつもの通り背向きになつて踊りながら近づいてみた。すると日本語だつたから、よくはわからなかつたが「イヤ違ふ」とか「イヤ、さうらしい」とか云つて爭ひながら笑ひ合つて居るのであつた。それから少しばかり聲を潛めながら「此事件は可なりトンチンカンだ」とか「オスロフと十五萬圓は別々の問題らしい」とか話し合つてゐる聲が、彈み切つた音樂の切れ目切れ目に聞えたが、あんまり長いこと傍にゐると疑はれるかも知れ無いと思つて、又も踊りながら遠ざかつて行くと、その中の一人がニーナの足の下に十留の金貨をチリ、ンと投げた。

［やぶちゃん注：●「十留」前に出した一九二〇年代（本作の作品内時間一九二〇年）の一米ドルは当時の日本円で二円で、凡そ現在の六百円相当が参考になるが、実はこの一九二〇年という年が曲者で、ロシアは内戦によってこの時、六百倍という恐るべきインフレに陥ってルーブルの価値が急落、一米ドルに対する換算レートが一九一四年には二ルーブルであったのに対して、この一九二〇年は何と、一二〇〇ルーブルになっていたという。とすると

急落前なら十ルーブルは十円、現在の三千円だったものが、この頃には一円弱で三百円にもならない状態であった。但し、これは為替レート上のものであるから、国内の価値としては前者換算で考えて問題なく、確かにこの場面でのダンサーへの投げ銭にしては「氣前」がいい（次段）ということになるのであろう。」

ニーナはコンナ氣前のいゝお客に一度もぶつかつた事がなかつたので、少々氣味が悪かつた。でも挨拶をしない譯には行かなかつたから一と踊り濟ますと思ひ切つて、勇敢に笑ひかけながら其の卓子に近づいて行くと、その中の一人がダシヌケに手を伸ばしてニーナのベレー帽をスポリと引き抜いた。

「アハハハハ。見たまへ君。斷髪だらう。ソバカスは解からないが、年頃もちやうど似通つてゐる。……ネエ。さうぢや無いかナハヤさん。君は一體いくつなんだい」

と其の紳士が上手な露西亞語で尋ねた時には、流石のニーナも身體中の血が凍つたかと思つた。お化粧をしてゐなかつたら直ぐにも顏色を看破られたであらう。

ところが、よく氣を付けてみると其の紳士たちは二人とも可なり酔つてゐるらしかつた。だから冗談半分のつもりで其様な事をしたものであらう。相手の年老つた方の紳士はトロンとした瞳をニーナの眞正面に据ゑながらゲラゲラと笑つた。手の甲で鼻の下をコスリあげコスリあげ覺束ない露西亞語で怒鳴つた。

「……オイ。娘つ子、貴様の名前はニーナつて云ふんだらう。……隱すと承知せんぞ」

モウ度胸のきまつてゐたニーナは莞爾とうなづいて見せた。ハツキリした日本語で答へて遣つた。

「えゝ。さうですよ。日本語でニーナ。露西亞語でオイシイ、ウキスキー……」

［やぶちゃん注：●おちゃらけはそれぐらいにして、因みに「ニーナ」（Нина）について調べて見ると、sonohara 氏のサイト「さらに怪しい人名辞典」のこちらに、“Антонина”或いは“Нинель”という女性名のロシア語略称形とし、前者「アントニーナ」の原形“Antonia

Ridge〟「Antonia Ridge」という赤いバラの品種があること、また、後者「ニネーリ」は何と！　レーニン（Lenin）のアナグラムで造られた名ともある！　別にまた〝Ника〟の略称形として〝Ника〟を挙げ、そこでは『ロシア語では（Nika）の綴りがギリシャ神話の女神「ニケ」を指す』ともある。私の好きなサモトラケのニケ、手が翼となった勝利の女神だ！……。」]

二人の日本紳士は卓子（テーブル）をたゝいて哄笑した。それからニーナの両手を両方から引つぱつてホールの眞中に出ると、店附（みせつ）きの音樂師に錢（ぜに）を投げてデタラメなダンスを始めた。その中でも年老つた方の紳士がニーナのベレー帽を冠（かぶ）つて踊り出したので滿場の大喝采を博したが、その踊りにくかつたこと……今にも手の震へを感付かれて、外へ引つぱり出されるかと思ひ思ひ、無理に笑つて戯（ふざ）け合つてゐた。その間の情なかつたこと……。

そのうちに二人はニーナを引つぱつて元の席へ戻ると、強いジン酒（しゅ）を三杯注文した。そこでお盆が來るや否や、ボーイがまだ下へ置かないうちに素早く手を伸ばしたニーナは、三杯とも一息にグイグイグイと飲み干すと、アツと驚いてゐる人々を尻目にかけながら、風車（かざぐるま）のやうにギリギリ舞ひをして地下室を飛び出した。さうしてその足ですぐにルスキーの裏手へ廻つて、給仕頭のムカツツイといふ赤ツ鼻（ぱな）の禿頭（はげあたま）に顔を貸して貰つて、タツタ今貰つた金貨を嚙ませて遣つた。

[やぶちゃん注：●「ルスキーの裏手へ廻つて」底本では「ルスキー」は「スルキー」。明白な誤植であるので「全集」に則り、訂した。」]

ところが此のムカツツイと云ふのが又妙な男で、まだ何も尋ねないうちに金貨を嚙んだニーナの手を押し戻すと脂切（あぶらぎ）つた眼をギヨロギヨロさせながら、毛ムクジヤラの指を一本ピツタリと唇に當てた。

「……あの二人の日本人の事が聞きてえつて云ふんだらう。……ナ……さうだらう……氣を付けなよ。あれあ此の間からヤツト開通した哈爾賓（ハルピン）直通の列車に乘つて來たばかしの怖いヲ

ヂサンたちだよ。若い方が通譯で、年老つた方が鑛山技師つて云ふ觸れ込みだがね。何でも前月の末に哈爾賓で、赤い連中を根こそぎ退治して來たつてんで、チヨツトばかりメートルを揚げて御座るんださうだ。……ところでナハヤさん……そんな事あ何様でもいゝが此頃、浦鹽の方へドエライお布告が廻つて居るのを知つてるかい……ウン。知らねえだらう。云つて聞かせようか。……何でも半年ばかり前の事だつて云ふがね。哈爾賓で經理部の大將と、大きな料理屋の女將と、その情夫だつて云ふ通譯を殺して、公金を竊つ攫つて赤軍に逃げ込んだつて云ふモノスゴイ一等卒が居るんだ。しかも其の通譯つて男が、無罪放免になつて、憲兵隊本部の入口を二三歩あるき出すと、その瞬間に、何處からか飛んで來た小銃彈で殺られてしまつた。すると又それから間もなく、經理部の大將の死骸を詰めたトランクが、松花江のズツト下流の川中島に流れ着いてゐるのを、支那人の船頭が發見て報告したといふので大騒ぎになつたさうだがね。理窟はよくわから無いけれども多分その公金をチヨロマカした兵隊が、自分の祕密を知つて居る二人を殺したのだらうつて云ふ見込みなんだ……しかもその兵隊は、ニーナつて云ふ女と一緒にモータボートで松花江を下つたつて事が、色んな方面からわかつて居るんだ。序に赤軍に逃げ込んだらしい……つて云ふ嫌疑もかゝつて居るさうだがね。もしかすると浦鹽の方角にズラカツて居るかも知れねえつてんで嚴しいお布告が、ツイ二三日前に日本軍のタムロへ舞ひ込んだつて事が、此の俺樣の地獄耳にチヨツピリ引つかゝつて居るんだ。そんな祿でもねえ野郎にクツ付いてゐるニーナつて娘つ子は可哀想なもんだつて云つてコチトラ仲間でタツタ今評判して居た處なんだ。……ナニ、俺ケエ。おらあ此家の給仕頭よ。白でも赤でも何でもねえ。無色透明、浦鹽見通しの千里眼樣だ。さう云つたらわかるだらう……ハツハツ。さあさあ解つたら此の水を飲んで今夜は早く家に歸りな。助かり度けあ俺んトコへ逃げて來る事だ。片付けるものを片付けてナ……いゝかい。人間は何でも思ひ切りが大切だからな。氷の解けるまでヂツトして居れあ大概、捕まるにきまつてるからな。詰まらねえ義理を立てゝそんな男に……ナニイ……そんな用事で來たん

ぢやあねえ?……ふうん。そんなら何の用事で俺を呼んだんだ。ナニイ。あの帽子……彼の青いベレー帽子を俺に取返して呉れつて云ふのか。アウン。大事な守護符でも這入つてんのか。ナニイ。あの紳士たちがドウするか試して見たい……チツプを附けて温柔しく返して呉れるかどうか、ちよいとヒヤカシてみたい……？　ブルルル。ト飛んでもねえ……圖々しい阿魔だな手前は……ソンナ事をして本物のニーナと間違へられたらドウする。停車場の裏が怖くねえのか。さもなくとも俺が此の指を一本、斯様曲げて店のピアノ彈きに見せたら、お前のお乳が蜂の巣になるのを知らねえか。馬鹿野郎……」

［やぶちゃん注：●「前月」先月。前の月。過ぎ去った一ヶ月は現在の後、以前にある、という意から生じた、近世語と思われる。　●「タムロ」は恐らくはロシア語ではなく日本語の「屯」で、日本軍のウラジオストクの駐屯地のことであろう。「たむろっている」とよく我々が口にする「たむろ」は「党」とも書き、もともと上代語で集団・兵隊の意である。］

ニーナはさう云ふムカツツイに両手で赤ンベエをして見せながら、横つ飛びに逃げて來たが、生れてコンナ怖ひ思ひをした事は無かつた。お酒の醉ひも何も一ペンに醒めてしまつた。

「だからモウ駄目よ。あの赤つ鼻の禿頭はボルセビイキの密偵の癖に妾に惚れてゐるんだよ。だから云ふ事を聞かないとドンナ事をするか知れたもんぢやない。あの二人の日本紳士だつて醉ひが醒めて氣が付いたらキツト血眼になるに決つてゐるわよ」

［やぶちゃん注：●「ボルセビイキ」レーニンが率いた左派の一派ボリシェヴィキ（большевики　ロシア語で「多数派」の意）。ロシア社会民主労働党左派から分裂形成された。三月革命後の臨時政府を支持せず、十一月革命を起こしてプロレタリア独裁を樹立。一九一八年に「ロシア共産党」と改称しているが、その後もこの語は彼ら左翼思想集団の代名詞として使用され続けた。ボリシェビキ。］

といふうちに彼女は梨の大きいのに降參したらしく、喰ひ殘しの半分をナイフで荒つぽく塗き初めた。

「フーン。それぢや十五萬圓はやつぱり銀月の中の何處かに隱して在つたんだな」

「さうよ。それが燒けちやつた事が判つたもんだから赤の連中が、ムシヤクシヤ腹で十梨を殺したのよ」

「惜しい事をしたな。無罪の證據になるんだつたのに…」

「證據なんかなくたつてアンタは無罪ぢやないの……」

「お前に對してだけはね……」

「妾は有罪だつて何だつて構やしないわ」

「ハツハツハツ……しかし驚いたなあ。星黑の死骸まで俺のせゐになつちやふなんて……」

「馬鹿にしてんのね。そんな嫌疑を一ペンに引つくり返す證據が殘つて居ると面白いわね」

「ウン。タツタ一つ素敵なのが殘つて居るんだ。今しがたお前の話を聞いてる中に思ひ出したんだがね」

「……まあ……ドンナ證據……」

「……わからないかい……」

「……わからないわ」

「今までの出來事をズーツと一遍通り考へ直して御覽……記憶えて居るだらう。何度も話したんだから……」

「ええ。だけど……わからないわ。……イクラ考へてもわからないわ。アタマが何樣かしてんのよ今夜は……」

「……十梨が、星黑から分けて貰つた官金の一部だと云つて、憲兵の前に提出した十六枚の二十圓札の話をしたらう」

「ええ。聞いたわ。その二十圓札つて云ふのは、十梨が星黑を殺した時に奪ひ取つた星黑の給料だつたに違ひ無いつてアンタがさう云つたわ。その中の一枚の裏つ側に、星黑がつけた赤インキの飛沫の形をアンタがチヤント見覺えて居たつて云ふ話でせう。象のお尻に太陽

が光つてゐる形になつて居たつて云ふ……だけどそれがドウかしたの……」

「ウン。その二十圓札の番號と、朝鮮銀行の支店に控へて有る札番號と引合はせれあ、十五萬圓の一部ぢや無いことが、すぐにわかる筈だらう。十梨が云つた事がミンナ嘘だつたつて事やなんかも一緒に……」

「……まあツ……どうして今まで氣が付かなかつたんでせう。あたし馬鹿ね。ヨツポド……」

「ナアニ。みんな馬鹿なんだよ。今から考へると、これは十梨のオツチヨコチヨイが、あんまり話を上手に作らうと作らうと思つて焦躁り過ぎた爲に出來た大手拔かりだね。多分、十五萬圓を手附かずのまゝソツクリ銀月の女將に預け込んで、自分一人で星黑の死骸を始末しに行つて居るうちに、十梨が勝手にヒネリ出した淺知惠に違ひ無いと思ふんだ。銀月の女將が一枚這入つてりやあ、そんなヘマなセリフを附ける氣遣ひは無いからね。……ところが、その時には當の本人の十梨も、相手の憲兵も、陪審員の僕も、そのほかの連中も一人として氣が付かなかつたんだから妙だね」

「……やつぱり運よ。物事つてソンナもんよ……だけどその話は、そんな時に云ひ出すよりも、今になつてアンタから左樣云つて遣つた方が利き目がありはしない……」

「それあさうさ。しかし……其の二十圓札がズウツと憲兵隊に保管して在ればつて云ふ話だからね。十梨が放免された處から見ると、その二十圓はトツクの昔に沒收されちやつたらうよ」

「……そりやあ左樣ね……」

ニーナは何かしら外の事を考へて居るらしく形式的にうなづいた。

その顏を見い見い僕は淋しく笑つた。

「お前と一緒に逃げたお蔭で、とうとう結末が付いちやつたね」

ニーナはプイツと拗ねたやうな恰好でペーチカの方に向き直つた。さうして思ひ出したやうに、梨の喰ひさしとナイフを頭の上に高々とさし上げて、

「……あアあ、妾（わたし）の仕事もおしまひになつちやつたア。……アンタに惚れたのが運の盡きだつたわよ」

といふうちに又もガリガリと梨を齧り始めるのであつた。

僕は美味（うま）い葉巻の煙を天井に吹き上げてゐた。

氣のせいか又も二三發、停車場（ていしやぢやう）の方向で銃聲を聞いたやうに思ひながら……。

病氣のせゐもあつたらう。すべてを諦め切つてゐた僕の神經は此時、水晶のやうに靜かに澄み切つてゐた。さうして此時ぐらゐ煙草が美味（うま）いと思つたことは無かつた。天井から吊るした十燭（しよく）の電燈が、ちよつと暗く……又明るくなつた。

［やぶちゃん注：●「十燭」現行の白熱電球の十ワット相当で非常に暗い。］

その時にニーナは又も、新しい小さい梨を一つポケツトから出して、今度は丁寧に皮を剝いた。さうして其の白い、マン丸い、水分の多い肌合ひを暫くの間ヂツと眺めまはして居たが、やがてガブリと齧み付くと、スウスウと汁を啜り上げながら無造作に云つた。

「ねえアンタ」

「何だい」

「……妾（わたし）と一緒に死んでみない……」

僕はだまつてゐた。ちやうど考へてゐたことを云はれたので……

「ねえ。……ドウセ駄目なら銃殺されるよりいゝわ。ステキな死に方があるんだから……」

「フーン。どんな死に方だい」

と僕は出來るだけ平氣で云つた。少し許（ばか）り胸を躍らせながら……ところが、それから梨を齧み齧み説明するニーナの言葉を聞いてゐるうちに僕はスツカリ興奮してしまつた。表面は知らん顏をして葉巻の煙を吹き上げ吹き上げしてゐたが、恐らく此時ぐらゐ神經をドキドキさせられた事はなかつたであらう…。

僕はニーナの話を聞いてゐるうちに、今の今までドンナ音樂を聞いても感じ得なかつた興

奮を感じた。僕の生命の底の底を流れる僕のホンタウの生命の流れを發見したのであつた。

……さうして全然生れ變つた様な僕自身の心臓の鼓動を、ガムボージ色に棚引く煙の下にいきいきと感じたのであつた。

［やぶちゃん注：●「ガムボージ色」“Gamboge”はインドシナ半島に植生するオトギリソウ科の雌黄樹から採る透明感のある黄又は黄褐色のガム樹脂。有毒。

――以下、残りの印象的なコーダの部分に注打ちたくないので、総て、ここに示すこととする。……ニーナの……素敵な笑顔の……澄んだ瞳に、乾杯！――

●「無煙炭」固定炭素含有量九十三～九十五%以上の炭化の最も進んだ石炭。黒色で硬く、金属光沢がある。火力が強く、殆んど無煙で燃焼する。揮発成分が少いために短炎で燃える（非粘結性でコークスにはならない）。着火点は凡そ摂氏四百九十度で火が点き難い難点があるが、火力が強く、一旦着火すれば一定温度を保って安定して燃え続ける。●「荷馬車揚場」船舶に積まれた荷を陸に揚げると同時に、その場で馬車に積めるようになっている場所の謂いであろう。●「ルスキー島」остров Русский。остров（オストロフ）はロシア語で「島」。ロシア沿海地方南部ウラジオストクの南洋上にあるルースキー島。ウィキの「ルースキー島」によれば、『日本海北西部のピョートル大帝湾中央部にあるムラヴィヨフ＝アムールスキー半島の南沖に浮かんでおり、半島先端の港湾都市ウラジオストクとは狭い東ボスポラス（東ボスフォルとも）海峡で分かれている。ムラヴィヨフ＝アムールスキー半島とルースキー島がピョートル大帝湾を二分しており、西はアムール湾、東はウスリー湾となっている。ポポヴァ島、レイネケ島、リコルダ島などと共にイェフゲニー諸島を構成している』。面積は九十七・六平方キロメートルあるが、起伏が多く、高さ三百メートル弱の峰が連なって（最高峰はルースキー山で標高二百九十一メートル）おり、『海岸は険しい断崖が多い。ルースキー島の中央には、北西から南東に向けて細長いノヴィク湾が入っており、島はほぼ二分されている。対岸のウラジオストク市街との間は渡船で結ばれているが、ルースキー島

連絡橋が建設されている』とある。エンデイングのためにグーグル・マップのウラジオストクとルースキー島をリンクしておく。 ●「或る老看守から傳へ聞いて居たものださうだが」の「だが」は底本では「なが」。誤植と断じて「全集」に従って例外的に訂した。」

ニーナはその晩から部屋を飛出して準備を始めた。さうして昨日の午前中に三階に住んでゐる支那人崔の手を經て、馬付きの橇を一臺手に入れる約束をした。それから宿の拂ひと買物をした殘りのお金で、昨夜から今日一日ぢう、御馳走を食べ續けて無煙炭をドシドシペーチカに投げ込んだ。

僕は病氣も何も忘れて此の遺書を書き始めた。發表していゝか悪いかを君の判斷に任せるために……尤も書きかけの西比利亞漂浪記の中から抽き出して書いたのだから、大して骨は折れなかつた。

ニーナはまだ編物を續けてゐる。寄せ絲で編んだハンドバツグ見たやうなものが出來上りかけてゐる。

注文した馬と橇はモウ下の物置の中に、鋸屑を敷いて繋いで在る。張り切つてゐる若馬だから一晩ぐらゐ走り續けても大丈夫だと、世話をしてくれた崔が保證した。

僕等は今夜十二時過に此の橇に乘つて出かけるのだ。先づ上等の朝鮮人參を一本、馬に齧ませてから、ニーナが編んだハンドバツグに、やはり上等のウヰスキーの角瓶を四五本詰め込む。それから海岸通りの荷馬車揚場の斜面に來て、そこから凍結した海の上に辷り出すのだ。ちやうど滿月で雲も何も無いのだからトテモ素敵な眺めであらう。

ルスキー島をまはつたら一直線に沖の方に向つて馬を鞭つのだ。さうしてウヰスキーを飲み飲み何處までも何處までも沖へ出るのだ。

さうすると、月のいゝ晩だつたら氷がだんだんと眞珠のやうな色から、虹のやうな色に、變化して、眼がチクチクと痛くなつて來る。それでも構はずグングン沖へ出て行くと、今度は氷がだんだん眞黑く見えて來るが、それから先は、ドウなつてゐるか誰も知らないのだ

さうだ。

この話はニーナが哈爾賓（ハルピン）に居るうちにドバンチコから聞いてゐたさうで、そのドバンチコは又、或る老看守から傳へ聞いて居たものださうだが、大抵の者は、途中で醉ひが醒めて歸つて來るさうである。又年寄りの馬はカンがいゝから、橇（トロイカ）の上の人間が眠ると、すぐに陸（をか）の方へ引返（ひきかへ）して來るさうで、その爲に折角（せつかく）苦心して極樂往生を願つた脱獄囚が、モトの牢屋のタヽキの上で眼を醒ました事があるといふ。

「……しかしアンタと二人なら大丈夫よ」

と云つて彼女が笑つたから、僕は此のペンを止（と）めて睨（にら）み付けた。

「若（も）し氷（こほり）が日本（にほん）まで續いて居たらドウスル……」

と云つたら彼女は編棒（あみばう）をゴヂヤゴヂヤにして笑ひこけた。

——をはり——